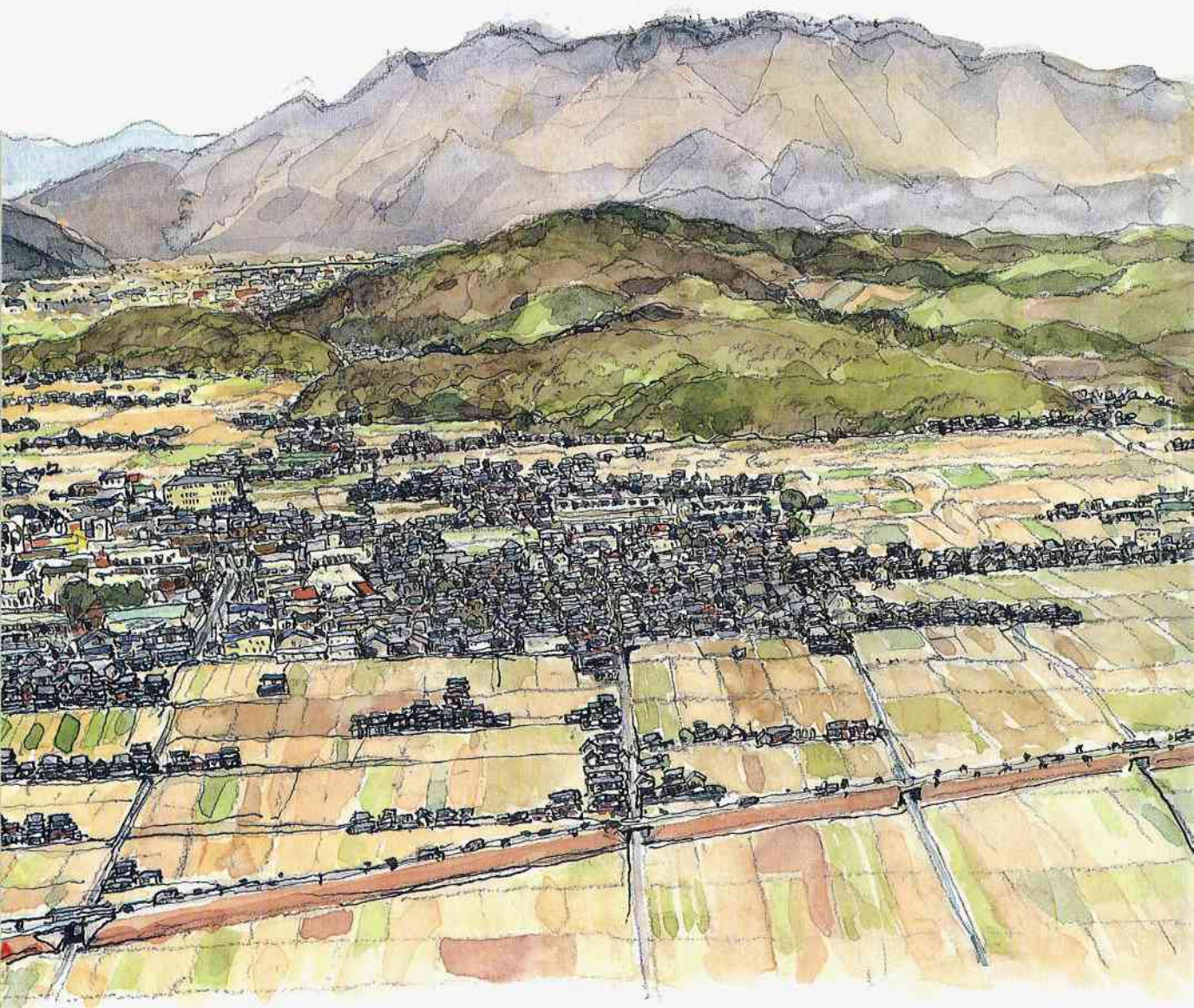


邑久町 ふるさと体験集



岡山県邑久町

おくちょう

邑久町
ふるさと体験集

岡山県邑久町

奥田桂峰 表紙題字
広畑一男 表紙挿絵

『邑久町ふるさと体験集』刊行にあたり



邑久町長 木村 恵 昭

昭和二十七年四月に、私たちのまち邑久町が誕生して、四十年を経過いたしました。

二十一世紀に向けて、今や邑久町は産業、教育、文化並びに観光の拠点として、大きく飛躍・発展を遂げようとしています。これもよき伝統と美しい風土のなかで培われた諸先輩方のたゆまないご努力の賜物だと、深く心に刻んでおります。

このときにあたり、これまで先人の方々の歩んで来られた足跡や事跡、或は貴重な体験をまとめて、町民の皆様にご認識いただくことは、ふるさとを理解する上で大変意義深いものがあると思えます。

執筆者の皆様方は、明治、大正、昭和の初期に生まれ、戦中戦後のはざまに生活され、その貴重な体験が歴史のひとつとまとして世に語り継がれることは、飽食と物質文明の先行している今の時代のあり方に対する警鐘にもつながるのではないかと考えます。

どうか温故知新のお気持ちを持って、この『ふるさと体験集』をご一読いただき、これからの人生の糧としていただければ幸いと存じます。

終わりにりましたが、編集委員の方々、また、ご執筆下さいました諸先輩に心から感謝申し上げますと共に、執筆後ほどなくしてご逝去されました故山下達雄・今吉功両氏の御霊前にこの体験集を捧げ発刊のことばといたします。

目次

農 業

機械化される以前の米・麦作り (1) 農協の変遷 (4) はっか、たばこ作り (7) ぶどう、みかん栽培 (9) 家畜として飼っていた動物 (11) 畑作農業の変化 (野菜作り) (14)

一

漁 業

私の漁業体験 (16) 漁網の変遷 (18) 錦海湾と打瀬網漁業 (20) 漁業のうつりかわり (23) かき養殖の始まり (25)

一六

教 育

育てよう 邑久魂 (28) 邑久農学校と終戦前後の思い出 (32) 邑久土曜学校の歴史 (38) 戦後の教育改革と邑久中学校の誕生 (39) 邑久高女体操 (42) 学校での服装や弁当 (45) 豊原小学校の思い出 (47) 明德小学校とその思い出 (50) 福田小学校と当時の体験 (53) 淳風小学校の思い出 (57)

二八

人 物

邑久町人物列伝 (60) 大原桂南先生 (63) 奥田真須二先生を偲んで (66) 嘉数郁衛君のこと (69) 竹田喜之助の思い出 (72)

六〇

社 会 七四

太平洋戦争の思い出(75) 塩造りの移り変わり(77) 私の戦中体験(80) 錦海湾干拓について(84) 空襲と女子挺身隊(88) 邑久公設市場物語(90) 昭和二十年の大水(92) 昭和五十一年大水害の回顧(95) 赤穂線開通迄の経緯(97)

生 活 一〇〇

ランプ(101) 昔の服装(103) 家電製品の普及(105) 昔の服装(108) 食生活の流れ(111) 錦海丸の起源
南備海運の経歴(115)

行 事 一二七

尻海神田稻荷神社 横尾山静円寺の修正会(会場)(119) 貴船山の思い出(120)

そ の 他 一二二

長島愛生園と光田健輔(123) 邑久光明園と今田虎次郎(126) 岡山県立邑久高等学校新良田教室(128)
邑久光明園忘れ得ぬことども(132) 虫明焼きの今昔(135) 養老院での奮戦記(137)

機械化される以前の米・麦作り



北野房男

- ・ 昭和七年（一九三〇）生まれ
 - ・ 尻海
 - ・ 元邑久町農協参事
- 農業

私は農家の二男に生まれ、農業や農家の慣習を体験しながら育ち、成人してからは農協において営農指導業務を担当させて頂き、農業と切っても切れない関係にあることから執筆を求められたものと思っています。それだけに古い記録や記憶をたどりながら、往時の水田作の模様をあるがまゝに表現することに努めてみます。

農業の機械化が急速に進んだのは、昭和四十年（一九六五年）ごろからであるが、動力による脱穀、糶摺、揚水などの部分的な機械化は第二次世界大戦後の昭和二十一年（一九四六年）ごろ堰を切ったように拡がっていった。

これ以前が畜力耕、手植え手刈り、足踏脱穀体系の時代といえますが、当時の環境としては水田の表作に水稻を、裏作には麦類か紫雲英（飼肥料作物）を作付けするのが常識で、よほど

低湿地でない限り休閑させておくということはありませんでした。

普通の農家の平均耕作面積は五〜六反（五〇〜六〇アール）で一町歩（一ヘクタール）以上耕作する農家は大百姓と呼ばれ、営農、生活ともに安定していました。

現在の尺度でこの規模をみると、零細のひとつことに尽きますが、すべての作業に人の手がかゝりしかも前作物と後作物にかゝわる農作業が重複する農繁期（田植の時と稲刈りの時）には労働面でかなりの無理が生じ、夜明けから日没まで作業にいそしんだので、「朝は朝星、昼は梅干し、夜は夜星」という諺がぴったりの状態でありました。

一方、食生活の面でも調理等に時間がかけられないので、あり合わせの粗食で腹をふくらませるといった具合で、食事回数も小屋、夜食を加えることもしばしばありました。

もう一つ営農上共通することとして、役畜（通常は和牛）を飼養し、畜力として活用するとともに、飼養することによって出来る厩肥をもとに堆肥を製造し、土づくり資材として重宝していました。

したがって、冬季を除いては畦畔草を刈って飼料にあてゝいましたし、その役畜は家畜と呼び主屋の中の一隅を囲い（内まやといった）家畜を入れたので、まさに人畜が同居する状況で

如何に重要視していたかを物語っていました。

まず、表作の米づくりのあらましから記述してみますと、その一番手は苗代づくりです。

冬の間に堆肥等を施し耕起しておいた水田を、春暖とともに碎土整地し、五月中頃までを目途に水を溜めてねり短冊型の播き床を作り、種籾をまいて苗作りをはじめます。

四〇〜四五日をかけて育てた苗は、六月下旬に田植えされることとなりますが、それぞれの農家では麦の熟れ具合を気にしながら麦刈りを終えると、数少ない科学飼料の硫酸石灰チツソなどの元肥を施して、牛にひかした犁で耕起していきましが、麦の刈株を倒すように見えたので麦わら倒しといっていました。このようにした水田に水を入れ田土を練って畦付けをし、水を溜めて馬鋤で代掻きして田柵^{こしら}えを完了する。

田柵に併行して老人婦女子は、水を湛えた苗代で苗とりをし根の土を洗い落として手際よく束ね、田植に備えます。

田植は、印綱に沿って尺角(三〇×三〇センチ)ぐらいに手植えされますが、腰を曲げた姿勢で作業なので、なかなかはかどらず、苗取り田植えを通すと一人一日で五畝(五アール)程度だったので、疲労の程度を軽くするため共同田植えや田植人夫を雇傭して対処することもありました。田植が終わればそれを祝うとともに長期間の重労働の疲れを癒す意味で、それぞれ

の家庭でご馳走を食べ家族全員が一日ゆっくり休養する「代みて」という習慣が定着していました。

苗が活着し緑色を増して伸び始めると、田打車等を押して除草を行っていました。大体一週間ぐらいの間隔で一番草、二番草、三番草という除草を済まし、最後は手で除草をし、田面を塗りつけるようにして均らし以後の雑草の発生を抑えるようにしましたので「止め草、又は塗草」と呼んでいました。

当時は植物性農薬ぐらいしがなく、現在のようない病害虫防除は行っておらず、秋ウンカが大発生した時は石油に防虫菊の殺虫成分をしみ出させ、それを水面に滴下しそこへウンカを振り落して防除していました。

稲刈りは、十一月に入ってから行われていましたが、すべてが手作業で刈取ったものは十数株分を一束にし、稲架に掛けて乾燥させ、ほぼ乾ききったころ足踏脱穀機で扱き、扱き落した籾は筵干して仕上げ、籾摺りをしていました。

次は麦作りですが、稲刈りの終わった田んぼから株切り(稲株を切るようにして株の土塊を起し碎土をしやすくする作業)を行い、牛にひかした犁で耕起し、さらに馬鋤をかけて土塊を砕き、畜力と人力で畦立てをします。

畦立てが終わったら一畦に二条の溝を切り、過燐酸石灰と硫酸を配合した肌肥を施したあと麦種子を播きます。

覆土は、あらかじめ用意された土肥（堆肥と土を混ぜて堆積したもの）が使われていましたが、これは田んぼの一角に運んでおいたものを老人婦女子が主に散布していました。

麦播きは、稲刈りの進度に合わせて準備が行われ、日が短くなつての農作業なのでそんなにはかどらず十二月中頃までは続けられていました。

年内から年明けにかけて芽を出した麦が、霜柱等で浮き上がらないよう、寒のうちは麦踏みというところが行われ、田舎の風物となっていました。麦踏みが終ると、麦の生育を促し雑草の発生を抑えるため、中耕と除草を兼ねた作業が行われていましたが、条間は、人が四ツ目鋤を用いて耕し、畦の肩は牛にひかしたエンザラ（土塊を砕きしまった耕土をやわらげるもの）で行い、谷上げをしながら株元に土を寄せることをしていました。

麦刈りは、六月に入ると大麦、裸麦、小麦の順で行われていましたが、小麦の場合は



<おかやまの農林水産業>から引用

稗つきのまゝ収納し、梅雨明けに脱穀することもしばしばありました。農業技術の移り変りの激しさをしみじみと感じながら筆をおきます。

米・麦作りの四季

季節	春			夏			秋			冬			
月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	
栽培体系				種子消毒	苗づくり	田植	田の草とり 1 2 3 止		ヒエ切り		稲刈り	乾燥 調整	出荷
準備作業	次年度の 依編み 春田 草刈 田の薬				施肥 （耕起） （アザカ） （アザカ）							次年度の 依編み 寒びき	
栽培体系	中耕、除草、土寄				麦刈り	脱穀 調整					施肥	種	麦踏み
準備作業							土肥づくり			土肥運び	砕土、畦立 株切、耕起		

農協の変遷



大河原 京 太

- ・ 大正十年(一九二一)生まれ
- ・ 山手
- ・ 前邑久町農協組合長

「モシ、モシ、こちらはJ A邑久町ですが…」

「?…」

農協発足以来半世紀、稲穂のシンボルマークが消え、中年以上のものには馴染めない英字に変わったのはつい最近である。

ふるさと創生事業の一環として「邑久町ふるさと体験集」を刊行するにあたり、町当局より「農協の変遷」についての執筆依頼を受けた。しかし、年代的、記録的に整理しようとするれば、とても七〇八枚の原稿用紙に纏められるものではない。従って私が農協でお世話になった四二年間の体験を、往時の背景を交え、大雑把に語るだけとなるがお許しをいただきたい。

敗戦後のインフレが、どんなに激しいものであったかは、あの時に遭遇した人々には記憶が生々しいと思う。

食糧不足、物不足、酒、タバコの嗜好品も配給制、お金も終

戦を境に新円、旧円に分かれ、旧円は一世帯一ヶ月二〇〇円までしか引き出せない。組合信用窓口は混雑し、職員の昼食は二〜三時頃になっていた。

「月給トリというトリより、ニワトリ一〇羽を飼ってお床の上に祭っておけ…」サラリーマンの待遇がニワトリ一〇羽の稼ぎに劣ったことを風刺したものである。

昭和二十一年十一月末、白浜の陸軍療養所から杖にすがる姿で我が家にたどりついた。

「今夜は純綿のご飯ぞな、よう味おうて食べんせえ…」食事のとき妻に言われて目頭がジーンと熱くなったのを忘れない。世相は暗いイメージだったと回想する。

比島戦線より奇跡の生還した私は、歩行困難な傷痕の身でありながら縁あって、昭和二十二年二月一日、邑久村農業会にお世話になることになった。村役場東側付属建物に事務所があり、一〇名ばかりの職員が狭いところに肩を寄せ合っていた。

忘れもしない、戦後の大きな変革は、マッカーサー指令による小作地の開放、軍人、軍属の公職追放、戦犯軍事裁判、そして天皇人間宣言、戦争放棄の憲法制定、円の切換、民主教育の徹底、アレヨ、アレヨという間に、国内状況は変貌していったのであった。

「おい、民主主義いうたら、何ちゅうことならえ…」お年寄り

からよく尋ねられたものだ。

昭和二十三年四月、農業協同組合法の施行に伴い、農業会は解散、全国一斉に農業協同組合が設立された。私は集落から理事に押され、専務理事に就任、ときに二十六歳の若僧だった。

そして終戦の大きな変動の流れを彷徨いながら盟協時代が十三年間続く…

終戦直後、この地域を襲った大水害は「泣き面に蜂」と言うか、住民に深い疵跡を残した。だが復員軍人の帰農、朝鮮戦争の特需、食糧の増産と社会経済の活動は次第に明るい方に転回、活気と秩序を取り戻してゆくことになる。

社会経済の変動は、小規模農協の能力では組合員対応が難しいものとなり、必然的に全国ベースで農協合併の方向に動きだした。

昭和三十六年四月、県、及び町の幹旋により、巨久、福田、今城、豊原、笠加の町内五農協が合併、ここに巨久町農業協同組合の設立をみたのである。

初代組合長、川崎茂氏、巨久地区農産物出荷場を本所事務所として事業を開始した。そして二年後、岡山県経済連合会より巨久工場跡地の払い下げを受け現在に至っている。

米の需給については、不足―均衡―過剰時代とに大別される。

農協はその時々々の農政にかかわり、国の食糧政策に最大限の協力をしてきたが、これからはどうなるのであろうか…

その間、国の経済発展はめざましく、池田内閣の所得倍増計画、或は田中総理の列島改造論に象徴されるように景気も、神武―岩戸―イザナギと続き、第一次、第二次オイルショックをのり越えて、働き蜂の日本は経済大国と言われるまでになった。しかし、考えてみると、農産物の収穫は年に一回、企業の物の製造は毎日、これでは太刀打ち出来る筈がない。

進歩に残されていた農業機械も、ポツポツ近代化され、牛に代わった歩行型耕耘機が田圃で動きだした。

「あんなもんで耕しやあ、土起こしが浅うて米がとれんようになってしまふんじゃあがなあ…」

畦で眺めるお年寄りが嘆くことしきり。

神武景気の頃、家庭の三種の神器は掃除機、洗濯機、白黒テレビだった。岩戸―イザナギには冷蔵庫、カラーテレビ、電子レンジ、イザナギ以降の景気では3C時代の到来、即ち、カー、クーラー、セントラルヒーティングと変わる。

経済の発展過程で農業は常にカヤの外に置かれた。昭和四十五年には米の過剰を理由に減反政策が始まり、以来、米価はスズメの涙程の値上げ、最近では値下げか、或はストップ状態。他の農産物においても大同、小異である。

国の農政そのものが、農業だけでは食ってゆけぬことを悟った農家の対応は、若い労働力を景気のいい他産業に流出させた。そして三ちゃん農業の始まりとなる。

じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃんだ。それも今ではかあちゃんまでお勤め、そして農作業は日曜百姓（極端な省力栽培方式）となっている。

合併当時、巨久町農協年間収益の五〇％を米、麦、その他の農産物取扱手数料に依存していたものが、現在では十分の一にも満たない四〜五％程度に低下している。また町行政に於ても町民所得の割合は、給与所得が九〇％以上で農業所得は四％程度と聞いている。この数字のパーセントが示す通り、農家も、農協も農業部門に関する限り、収益構造は類似している。

農協は組合員に最大の奉仕を原則とされている。時代の流れのなかで、組合員のニーズに応え、事業を拡大し、施設も充実してきた。

特に私の心に残るものは、昭和四十〜五十年代、生産コスト低減の目的とした「経営実験農場」・大農、集団方式を誘導するための「請負耕作」の実施等は、地域農業将来の在り方を模索するものであり、最近日本農政自体も、ようやくその方向に動きつつある。

昭和五十二年四月、本庄、玉津農協と合併し、平成四年には

組合員戸数二、七〇〇戸、出資金六・五億、貯金二・三〇億、職員一、二二名、県下大型クラスの農協である。

昭和五十六年五月〜平成二年五月まで三期九年间、私が組合長に在任中、集中的に行った施設の改善と充実。それに歩調を合わせた役職員の努力と、組合員の協力により財務内容も抜群である。手前味噌ではないが、県下農協の最右翼にランクされると自負している。

平成元年、「農協生産基地構想」を策定、町行政支援のもとに、国、県の助成を得て、全国で類例のない事業に取り組んでいる。この狙いは地域農業を守るための模索である。

水田関係は豊原地区に、畑関係は玉津地区一本松（農協売店）北側山林開墾地に設置、この場合農業公園も併設、地域の子供や、お年寄り、或は観光者の憩いの場所としたい構想である。

以上、頭に浮かぶことを順序もなく述べて「農協の変遷」とは異質のものとなってしまったが、お互農村に住む者にとって農協の存在は、心のふるさとでなくてはならないと思う。

巨久町在住の皆様のご理解、ご協力を切望してやまない。なお、駄足ながら私の愚著自分史「昭和の浦島太郎」の中に戦後の回想を記述している。各農協支所に配本してあるのでご一読下されば望外の幸せである。

参考附記（組合の変遷）

明治二十三年 産業組合法公布
明治四十年 邑久村山田庄に販売購買組合設立（全国規模）
大正八年 邑久信用販売購買利用組合設立（全国規模）
昭和十九年 邑久村農業会設立 戦時国策（全国規模）
昭和二十三年 邑久農業協同組合設立（全国規模）
昭和三十六年 邑久町農業協同組合設立現在に至る

はっか、たばこ作り



松 本 俊 平

- ・ 大正十四年（一九二五）生まれ
- ・ 庄田
- ・ 農業

はっか、たばこ作りの体験を書けと言われたが、六十年前、父母について畑に行き、仕事の手伝いより遊んでいた時の思い出を書いてみます。

小学校時代の思い出を書いてみます。
わが家は、蚕・ハッカ・米・麦などが主な作物であったよう

に思う。稲刈り、麦蒔きの後で十二月に入ると、ハッカ畑に行き、鍬で掘り起こした白い根を手でむしり、ふごに入れ、次の年に作る畑にハッカの根をパラパラと振り手で適当にした後に土をかけ、上に堆肥をふっていたと思います。

ハッカがわが家の畑作の何割ぐらいであったかわからないが、わが家に入って来た換金作物の第一等だったと思います。

当時わが家は、蚕も飼っていた。当時庄田でタバコ作りより七戸くらい多かったように思う。

最近聞いた話では、たばこが庄田に入ってきたのが昭和二年位で、蚕はそれより少し前だったとか。

父母が毎日同じような仕事をしていると思ったことは記憶にあるが、農家の作物の変化していく様子などは気がついていなかった。

子供の手伝いといえば、草取り、稲・麦の刈取り。ハッカ刈りは六月八月十月の三回、二番刈りは夏休みのため良く手伝った記憶がある。その方法は、一握りずつ縄に編みつけ約二メートルから三メートルの長さにして家の軒か「かど」につるして干していた。

子供の手伝いは、父や母それに祖父が編んでいく時に一握りずつハッカを分けて渡すことでした。

つるして半月ほどのちに絞ることとなる。業者に頼む人、自

分たち共同で絞る人様々でした。

共同で絞っていた釜は、朝日寺の西五〇メートル位のところにあった。直径二メートル・高さ二・五メートル位の樽があった。この樽の下に水蒸気を作る釜があり、その中に乾燥したハッカを詰め込み、出てくる水蒸気を水で冷やすとその上にハッカがたまる。五〜六時間位炊くとハッカ油が出てこなくなる。出し殻は釜からだし干して、えさのなくなる冬にわらに混ぜて牛に食べさせる。

今思うと自慢ではないが、父の作るハッカはほかの家より良かったような記憶がある。現在のマスカットを作り始めたのが昭和五十三年だった。そのマスカットもすでに老化現象に入っている。次の世代に移している同級生も少なくない。

父のハッカ作りに学ぶところは多く、今痛みかけたマスカットも何とか頑張つて大切に育てていこうと思う。話が横にそれたが、時代も変わり終戦の年の八月に故郷に帰ってみると、庄田のハッカ場がなくなっていた。多分戦争が激しくなり食糧の生産に追われたことと、ハッカ絞りを技用する人がいなくなったのだろう。

その後、わが家の耕地にハッカ場を作り庄田の人が集まり使用していたが、県道拡張の時姿を消すこととなった。この頃までの庄田における農家の作物は、タバコが主なものであったよ

うだ。太平洋戦争中にわが家においても主力の蚕からタバコの生産に移したように記憶している。

しかし、昭和二十八年頃だった、日本でたばこを作るのはだめだとか、日本産のものより外国産の方が自然作でマイナス面が少ないと伝えた記事もあり、畜産・果樹作りへと主力を変えた。

仕事に追われ、ふと気がついた時には自分の頭は白くなり、農業後継者の少ない時代に入っていた。

私が、煙草を作ることをやめたのは昭和三十七年。

しかしその後、六十年ごろまで四人ぐらいの人は頑張つて作っていた。

先日、黒井山の近くを車で通ると、自分が作っていた時のものより立派な煙草が目につき、思わず頭の下がる思いで帰路についた。

これからの農業を考えると不安のみがよぎる時代である。

ぶどう、みかん栽培




金 居 登

- ・ 昭和四年（一九二九）生まれ
- ・ 福谷
- ・ 町農業委員会会長
- ・ 農業

ぶどう栽培

戦後の食糧不足時代（昭和二十年代）は、水田に於ては米、畑にはさつまいも、じゃがいもが主な農産物として栽培が行われたが、数年後より、食糧の需給も安定し、社会も安定化の方向に急速に伸びて来た。昭和三十年代から経済の高度成長時代に入り、食生活に於ても果物畜産物の需要が大幅に伸びて来た。此の頃より邑久町に於ても、山を切り開き、又普通、畑にぶどうを植栽され始めた。そして、昭和三五〜三六年には、葉たばこを栽培していた農家がぶどう栽培に転換したことにより、植栽面積も急速に拡大された。先ず、植栽されたぶどうはキャンベルである。そして、ぶどう栽培技術の向上と消費の動向により、美味しいものが求められ、ネオマス、ベリーA、デラ、ヒロハンといった品種が次々に導入された。そして、昭和四十年

代に入り、経済の安定化により高い収入を目的とした施設栽培が始まり、のマークで出荷する産地の基礎が出来た。その頃よりハウスぶどう研究会が組織化されて、生産者が情報の交換栽培技術の研究、先進地の視察、市場視察等を実施して来た。最初数人で発足した施設栽培の同志も、短期間で増加して施設栽培を主としたぶどう産地となった。然し、その年の気象条件によっては大変苦勞もあつた。つまり、風、雪、雨により思わぬ災害により、収穫目前にして涙を流す事もあつた。又、長雨による日照り不足により収量の低下、病虫害により、品質の低下など様々な問題があつた。施設に使用する材料も最初は木、竹が主として用いられたが鉄骨に、型も平屋根（岡山型）丸屋根（島根型）の二種で改良され、自然災害に耐えられることにより、安心して安定した収穫ができるようになって来た。此の頃より消費者の動向が種の無いぶどうに人気が集まり、先ず、デラがジベレリン（ホルモン剤）の処理によって完全無核に出来ることにより高価格で取引されるようになり、相当の面積に新植された。そして昭和五十年代に入り、消費の動向は大粒系に移行し始めた。先ず、巨峰が導入されたが、土質、栽培面に於て安定性無く短期間で姿を消したぶどうがある。昭和五十四〜五十五年よりピオーネという大粒系の品種が出来て試験栽培をする生産者がいたが、栽培方法技術面での問題により安定して

生産出来ることのむずかしさに、巨峰と同じく姿を消すのでは
も思ったこともあるが、ジベレリン処理により結実が安定し、完
全無核出来果粒の肥大もスムーズに出来るようになり、消費者
が求めている理想的なぶどうと言うことで、昭和五十七〜五十
八年頃より改植新植が進み、ぶどう栽培面積の八〇%まで達し
たのではと思う。現時点でぶどうの品種は数え切れない位ある
が、ピオーネ以上に優れた品種のぶどうは無い。しかし、問題
点としては瀬戸内の気候である八〜九月の夜温の高い時に完熟
する作型では色付きが心配される点である。その打開策として、
常時色付きの悪い園地では、ふじみのりと言う大粒系で外観は
ピオーネと全く同じであるが肉質が軟い品種がある。このぶど
うは、色付き果粒の肥大は安定性があり導入され栽培されるも
一つの法策であると思う。いずれにしても、今後数年間の消費
の動向は高品質のものを少量買を進むものと思われる。そうし
た動向に対応できる邑久町で生産されるピオーネを地域特産物
として大事に育てたいと思う。

みかん栽培

昭和三十年代の日本の経済は景気上昇著しく、昭和三十六年
の所得倍増政策を契機に、高度成長時代に入る。すなわち大衆
消費時代に移行し、食生活に於ても果樹畜産物の需要が大幅に
伸び、果樹は選択拡大部門の一つとして注目されるようになって

た。特にみかん類は高価格が維持し、みかんブームをひきおこ
した。一方新農村建設事業構造改善事業等の諸施策が打ち出さ
れ、ブルドーザーによる大規模開園、水田転換農道の整備が行
なわれた。邑久町に於ても、東部を中心にみかんブームによる
開園造成が行なわれた。通山八反、黒井山地区に、構造改善事
業により、みかん畑の造成が行なわれた。また玉津、裳掛地区
を中心として、普通畑の転換によるみかんの新植が進み約六〇
ha余の産地となった。そして、昭和四十年代に入る頃より、み
かんブームによって新植されたものが結果期を迎え、昭和四十
三年には日本全国生産量が三六五万tと三〇〇万t時代に入突
し、恒常的過剰生産による価格の低迷を引きおこした。みかん
ブームが冷えきり、放任園があちこちで見られるようになる
同時に、生産されるみかんの品質の低下が見られ、価格の低迷
が続くようになった。昭和五十年代もみかん過剰による価格の
低迷が続き、荒廃園がどんどん進んだ。そして六十年代に入り、
国の施策として、みかん転換事業、つまりみかんを切って他作
物か、または元の山にすることで栽培面積を減少させ生産量を
減らすことが行なわれた。その結果、平成二年産のみかんは気
象条件にも恵まれ、しかも全国的に裏年となり、生産量も少く、
食味も良く高価格で推移した。平成三年産のみかんは表年とな
り、生産予想は開花時点で一七八万tと予想されていたが、今

年の五、六月の晴天日は前年対比四五、四七%と雨が多く、日照不足により落果が多く、今後の天候による所であるが不作が予想される。それに全国的な農村の流れかもしれないが、就業者の高齢化、若い青年の農村からの流出による後継者不足等により、今後のみかん生産は減少の傾向で推移するのではと思われる。温州みかんは果物の中でも非常に喰べ易い、然も甘酸があつて多くの消費者に好まれる果物であると、私は信じている。邑久町のみかんを栽培されておられる農家の皆さん、邑久町のみかんを地域特産の果物として大切に栽培を続けられることを希望する。

家畜として飼っていた動物



那 須 具 子

- ・ 昭和二年（一九二七）生まれ
- ・ 東 谷
- ・ 農 業

私達の若い頃、家畜として飼われていた動物には鶏、牛、馬、山羊、羊とありました。

鶏は農家の軒端で飼われ、時を告げ、卵と肉は食用にと、生活に結び付いておりました。卵は高級な食品として、病氣見舞い等に珍重されておりました。庭先で地虫、青草をふんだんに食べて、栄養素をそなえた完全食品でしたが、今はケージの中で画一的に餌を与えられて、機械仕掛けで産まされたような卵に、昔の味を求めるのは無理となつてしまいました。今では、スーパーの目玉商品となり、昔の面影はありません。戦中・戦後の物の不自由な時代、なんでも自給自足するため山羊、羊を飼う農家も出てきました。

山羊は土手に杭を打ち、昼間はつなぐれ雑草を食べながら「メーメー」と人なつこく可愛い声で鳴いていました。麦、野菜の屑等も与えて乳を搾り、家で熱処理をして飲んでいました。牛乳より脂肪が濃かったです。今は食料事情の好転で飼われなくなりました。

羊も山羊と同じようにして飼われ、衣類の手助けをしていました。春になると、獣医さんの手で毛をバリカンで刈り取ってもらい、加工に出し毛糸になって帰ってきます。羊一頭分で毛糸は大人セーター二枚分、布は背広一着だったように思います。各農家では、母屋の入口の隣に牛、馬を飼う大事にしておりましたが、農家の機械化が進み、農耕のために牛、馬を飼う農家は姿を消してしまいました。

飼料はすべて農産物の屑（小米、麦屑、野菜）、藁、畦草、土手草でした。牛場の糞尿は大切な農家の肥料源でした。

馬は農耕だけでなく、荷役として車を引いて木材、米俵等重い荷物を積んで、でこぼこの田舎道をパカパカと運んでいました。あの蹄の音は、今も耳に残っております。戦争中は戦場に出動して、後方よりの物資をぬかる道を運んで手柄をたてたのです。

戦前の牛は、赤い牛（朝鮮牛）が飼われて、農作業に使われておりました。戦争末期頃より黒い和牛になりましたが、時代と共に農耕に必要ななくなり、肥育して売られるようになりました。

また、我が家では、県北に子牛を買いに行き、大きくして肉牛として売っていましたが、子牛が手に入りにくくなったので乳牛を飼い、生乳の出荷を始めました。この頃は一日三回の手搾りで朝早くから夜遅く迄がんばり、搾乳した牛乳は川につけて冷して、翌朝自転車で村の中心にある集乳所まで運びました。

飼料は濃厚飼料の流通量が少なく、自給飼料の確保が重要なポイントでした。田の裏作にはイタリアン、エン麦、レンゲ、畑にはトウモロコシ、蕪スーダンを作り、乾草にしたりサイロにつめたり青草のまま与えたりしました。また、田の畦草、土手草も大事な飼料です。土手草は区分して刈りました。

昭和三十七年頃より搾乳を朝晩二回としました。搾乳者も増えたので部落に集乳所を作り、ドロビングラーターをつけ、毎朝集乳してもらえようになり楽になりました。

雄子牛が生まれると、軽四トラックに手足をしばり、ムシロを被せて大多羅まで持って行き、二、三千円をもらって帰ってました。途中、荷台で「モウー」と鳴き、恥ずかしかったです。

昭和四十一年に大阪乳業の進出で、組合を集団で脱退するという騒動がありました。低乳価にあえぐ酪農家にとって、やむを得ぬこととはいえ大きなショックでした。この頃は日本列島開発ブームが始まり、仲間の人も、一人、二人と減り、現金収入を求めて働きに出られるようになりました。

乳牛は一度お産をすると、その後十ヶ月間毎日せつせと乳を出し続けます。一泌乳期の乳量は普通の乳牛で五〜六トンを、能力の良い牛は一〇トン以上も出します。この量は子牛を育てるための十数倍にも匹敵します。乳牛は泌乳能力が異状に発達した化け物というほかありません。乳牛は後軀の股間に大きな乳房をぶら下げておりますが、その形をよく見ると、前乳房の位置が高く、後ろの方が低くなっています。これは子牛が母牛の腹の下にもぐり、頭で乳房を突きながら乳頭に吸いつく時、最も吸いつき易い位置、形になっています。

昭和四十四年には、社団法人の旭東畜産公社が優良雌牛の保留対策として、採草、放牧を主とした育成牛の受託飼育場を長船町の山に設置しました。強靱で耐用年数の長い後継牛を育成し、経営の確立と経済の向上を目的に、生後一ヶ月から初産分娩前まで育成されます。

昭和四十八年には、各集乳所ごとにバルククーラーが設置され、五十一年には個人で取りつけ、一段と楽になり、乳質の改善に役立ちました。

昭和四十八年から四十九年にかけて、オイルショックを中心に国の酪農政策が多頭化して、施設の融資助成の処置がとられ大きく変わり、経済の立ち直りと共に消費が伸び、飼料の低価安定もあり、生産が大きく増強されました。

昭和五十二年から一転して生産調整の時代へと変わり、五十四年から計画生産を余儀なくされ、乳価は毎年据え置き、値下がり取引条件の改悪と、スーパー等の量販店の安売りと不安は募るばかりでした。

六十年には割り当て乳量オーバーに対し、ペナルティーとして翌年の割り当てより差し引かれ、超過数量一キログラムに四〇円が徴収されました。

乳質改善も厳しく、生産の流通も広域化し産地間の競争に激しさを加え、消費者の牛乳に対するニーズもより新鮮で高品質

の物が求められ、乳質が重要なポイントになりました。生産者の出荷する生乳にペナルティーがかかるようになり、酪連より奨励乳、規制乳、規格外乳の要領が決定、発表されました。

平成元年四月より、乳価はテール方式となり、脂肪率と無脂固形分率の両方により計算されます。

平成三年から体細胞がペナルティーの対象となり、酪農界は加工原乳保証価格の連続値下がり、さらに飲用乳価も連動引き下げ、雄子牛、老廃牛も下落し、飼料は値上げとなり厳しい酪農を迫られ、旭東酪農組合の組合員の老齢化も加わり、搾乳戸数は毎年五〜六%減り、今では一三〇戸となりました。

夢とゆとりのある酪農を確立するため、国の政策としてヘルパー事業も制度化され、後継者、専業酪農家の光明として、今後普及、推進されることになりました。

静かに過ぎし年月を振り返ると、束の間の出来事のように思われ懐かしくなります。

つたない筆を思うままに走らせていただき有難うございました。

畑作農業の変化（野菜作り）



川野多喜夫

- ・大正十四年（一九二五）生まれ
- ・尻海
- ・町郷土史クラブ会長
- ・農業

文化、文政、天保の頃の人で、尻海の中江理左エ門が「錦海の由来」という尻海を中心にした記録書を残している。この中に「文化以前は食生活も質素で、一年中野菜は自給自足、どの家も五畝、一反の菜園を持っていた。大根、菜葉類は海水で漬け込み細切りにして大飯器で飯と混ぜ、主人から船頭の家族に至るまで一緒にいただくのが普通であったが、文化の頃から。」と野菜の自家栽培、自家消費の様子が記録されている。

江戸時代末期、野菜類が地方の町々で売買されていたのはごく少量であろう。しかし城下町や商業町では、近郷近在の農家が町々を振り売りして回ったであろうし、また、日持ちのする瓜類干瓢等は、商人が多量に取り扱った様である（射越村の瓜、豆田村の干瓢）。

時代は明治に移り二十年前後、今迄耕作していた夏秋の収穫

の砂糖黍と藍の栽培が順次衰微して、南瓜、西瓜、馬鈴薯、ハッカが栽培される様になる。南瓜は黒皮チヂミ南瓜、西瓜は大和西瓜、馬鈴薯は表皮が赤色で丸型のキントキ。これらの野菜は日持ちがして、大阪、神戸の大都市へ移送が可能な為、産地と消費地の関係が生まれ、産地では一〇軒、二〇軒の農家が組をつくり、一定量を産地の問屋に直談判で売る。産地の問屋は消費地の問屋に連絡して引き取らず。運送は船である。馬鈴薯一貫目（約四キロ）四銭前後、南瓜一貫目五〜六銭、西瓜一貫目八銭前後である。

産地では、問屋を二軒以上入れて三厘、五厘の価額競争をさせた。消費地問屋は産地の善し悪しをよく知っていて、少々の価額差はあった様である。前島の黒南瓜、長浜の瓜、敷井の西瓜と大阪商人は区別していた様である。「敷井よいとこ 南をうけて 大和西瓜の味の良さ」と唄われたのも、この時代の事であろうか。この商業体は長く続き、昭和の初期（十五年頃）まで続いた。

さて、野菜であった西瓜を果物として取扱ったのは戦後である。この西瓜が京阪地方で一番消費されたのが七月二十五日の天神祭で、どの家も縄でしばった西瓜をかっいで持ち帰っていた。産地ではこの日に合わせて出荷できる様、色々の工夫がされた。この指導をしたのが大原農業試験場であり、県立農業試

験場であり、郡役所農事部であり、郡農業指導所であった。南瓜は苗を温床で育て、何度か植え替えを行い、小根を出させ本畑に植えるのは四月二十四日の大賀島の権現祭が目安で、気温も上がり霜の被害もなくなる。西瓜は植え替えができないので、四、五〇センチの木箱を作り、和紙を貼り紙に「エゴマ」を塗布して小型の温床を作り、この中で苗を育てる。夜は「こも」をかけ保温するので、朝夕非常に手間のかかる農法であった。このため、朝夕の「こもとり」「こもかけ」は子供の仕事で、鞆を畑の岸に投げて「こもとり」を済ませ登校したのは私一人ではなく、皆そうであった。また、夕方陽のあるうちに「こもかけ」を終わる。こうして朝夕四〇日程畑に出ると麦の根本に雲雀の巣を見つけて、毎日見舞ってやるのも大きな楽しみであった。

当時出来た西瓜は二貫目前後で、大阪、神戸の人々には大きい西瓜が好かれ、最小一貫目程度までが商品であった関係から、一貫目以下の西瓜は「くず」で牛の飼料であった。これに目を付けた尻海、虫明方面の漁師の人が一個三銭、四銭と値を付け、金瓜、夏ネギ、白瓜、キュウリ、サツマ芋、ナス等と一緒に小舟（五〜六トン）に積み合わせ、小豆島や家島の漁師町に八月五日頃から十二日頃まで、多い人は三、四回と運び込んでいた。これらの人々は頼知のいい人で、「西瓜を買ってくれた人に西瓜の皮の漬物を食べてもらい、作り方を教えましたら、もう一

つちようだいと数を増やしてくれましてなァー。」と話していた。この当時の肥料は腐食堆肥が中心で、一間角に片荷（フゴ一杯、一畝にフゴ三〇杯）ずつ一作ごとに打ち込み、待ち肥として溝を作り、溝に綿実カス、菜種カス、魚紛等を作物に合わせ振り込み、化学肥料は使用しなかった。この様な有機質肥料、栽培農業も昭和二十年の敗戦を境に大きく変化した。このごろ有機物の使用は戦前の五分の一程度であろう。化学肥料の進歩と技術がそうさせたのである。

敗戦後五〜六年は物不足で、米麦豆類はもとより、馬鈴薯、甘藷、里芋、南瓜、西瓜、金瓜、白瓜と何でも出荷割当があり、農家人口が増加した時代でもあり、闇売闇買いの嫌な時代である。しかし、この当時農産物の多収穫を狙った多くの学者が、米麦豆類はもとより野菜に至るまで、味の良い病気に強い一年に何回も収穫出来る品種改良に成功、合わせて「ビニール」という保温に使用出来る物品の誕生で、農家に活気が生まれた。三十年代に入ると都市近郷開発で近郷野菜農家が崩壊、葉物に至るまで地方産地が生まれる。すなわち、牛窓を中心にした近隣海辺町村は、白菜、カンラン、レタス、シュンキク、ホウレンソウ、馬鈴薯、南瓜、西瓜等の指定産地となり、数年後長浜のピーマン、玉津のプリンスメロン、ホワイトメロンと変化し現在に至っている。

さて、西瓜について特筆しよう。

昭和二十四年、玉津農協職員木村芳雄氏は、将来大和系の丸型西瓜では特産性がないと考えた末、鉄兜という黒皮丸型西瓜と中国系の小型の細長型西瓜（肉質黄色、俗にポケット西瓜という）を交配して、細長大型の黒皮西瓜を生みだすべく努力したが、なかなか固定できず、敷居へ依頼。敷居では、大和系と自然交配を恐れ、畑と程遠いハゲ山山中で三年間固定に努め、晩生を中生まで改良して二十八年試作に成功。黒皮黄西瓜を生み出したのである。販路は日生、姫路方面に売り出し、味の良さで好評であった。岡山市場で好評を得る様になるのは四十年代で、その間各農家では、商人の手で地方売りを進めていた。現在では、中四国方面まで耕作され、黒西瓜として広く賞味されている。

私の漁業体験



坂 口 一 海

- ・ 昭和三年（一九二八）生まれ
- ・ 尻海
- ・ 元錦海塩業勤務

昭和二十年八月に志願兵より復員した私に、母は「もうどこへも行かず家の手伝いをしてくれ。」といった。先年、長男を病死させ五人の弟妹を抱え、病身の夫を持つ母の心境を思い、私は月給取り志望をやめた。以来十年、半農半漁の貧しい家業にいそしんだ。終戦直後のあの時代に必死になって慣れない仕事に恥も外聞もなく日夜を過ごした。

激しい肉体労働にくたくたになったこともしばしばであったが、青年時代の貴重な経験でもあったと思っている。

以下は、私の体験した漁業を業種別に記憶をたぐりながら記してみる。

但し、延縄^{のべなわ}他二種ほど省略

延縄の種類、タコ壺縄、ハゼ縄、サヨリ縄、鰻縄、穴子縄

▼てぐり漁

春は低温のため網を持つ手が凍るようで**胼胝**ができて握れなくらい痛かった。

秋にも気候のせいか網が刺のように思えた。

▼藻貝取り

冬の作業で太い棒を一日中担ぐので肩と腕が抜けるように思えたが、同業者が多く競い合って励んだ。

▼牡蠣養殖

今の移動可能な筏式とちがいで、一本ずつ竹を立ててヒビ建を作っており、一棚組むのも容易ではなかった。収穫も全部人力によって行い、今のクレーン船を見ると昔日の思いがする。

▼寄漁業

通称大網といい、ほとんど組合員全員が参加していた。飯炊きに始まり、すべて先輩たちに教わりながら寒中の早暁より操業をした。網を張り「ろく鱸」を回る時など眼も眩むばかりで酷寒でも汗びっしょりになった。網揚げも熱いくらいで全裸で作業するものもいた。しかし、共同作業は楽しく大漁の時など早速、魚を料理し酒を酌み交わした。

▼建網漁

四季を通じて操業可能であったが、特に寒中には鰯が群れをなし、一網に何百何千も獲れることがあり、その時の嬉し

さはまた格別であった。

☆グルメ

春の底曳き網に獲れていた「シュントク」「エサダ」「モズ」等の棒いりはカルシウム満点であり、夏の「石モチ」は金魚色で「塩蒸し」の味は捨てがたいものであった。

☆底引き網の歌

てぐれ曳け曳け大きなトト・たなごヨー

あたま ぶらぶら蛸がのるヨー

☆夏の夜ばなし

昇^{すぼる}真天に蕎麦時けば三握り一升・粉八合・団子にすれば丁度五〇・七人家族に七つ当て、一個は嬢の味ききじゃー

☆拙詠の一首

「昇真天に」と云ひにし父を想いつつ

いま仰ぎみる夏の夜更けに

漁業はおよそ夜間作業なので、帰途の暁は心楽しく、船脚も速く朝日を背にして「かえり船」や「吾は海の子」など歌ったものだった。

船が雁木につくころには、今か今かと家族が待っており、それぞれに荷揚げ、仕分け選別をして「セイロー」に乗せ魚市場へと急ぐのであった。

それこそ女房、子供も手伝って家族総出の多忙にしてほほえ

ましい漁村の朝の一刻であり、思い出として忘れることができない。

昭和三十二年より錦海湾に堤防ができて塩業が操業し、多くの失業漁民も就職した。往年の海は塩田となり枝条架が整然と並んでいた。しかし、これも廃止され、今は産廃処理場となっている。この地に働いたもの一人として、次なる健全開発をひたすら願いつつ拙筆を置く事とする。

漁網の変遷



横山 春松

- ・ 大正十四年（一九二五）生まれ
- ・ 虫明
- ・ 邑久町教育委員長
会社社長

我が国に於て、漁網ははたしていつの時代より使用されていたであろうか。これについて明確な解答を与えてくれる資料は、未だ与えられていないが、網は有史以前から使用されていたことが、充分想像できる。

この自然環境に生棲していた我等の先祖が、網を以て魚族獣

類を捕獲していたことは、今日まで各所に発見せられている。

先住民の遺物からでも想像することができる。とは言え、漁がより早く用いられたか、あるいは鳥獣の為のものの方が早いかは、直ちに之を決定する資料はないとしても、彼らは石器や骨角器を用い、軽石で浮子を作り、土器の破片や小石を以て錘を作って、これを使用していると思われる遺物が、各地に見されているのを見ると、かかる時代から漁網のあったことも考えられる。

江戸時代中期頃迄は、材料としては主にフジ・クズ・藁縄等で、暖地ではコウゾ・ミツマタも使われたといわれる。

藁縄の如くでも、近年は專業の製造業者によって製造されているが、それでも一部には、なお漁業者が自製しているところがあるように、古くはこうした自家編網が本態であって、製網を業とするものは少なく、立地的には生産または集荷の都合によって制限されていたようである。

また、網元とか、個々の小漁家が網屋から網地を購入するのは、地域的に特殊地帯であるとか、その量が相当に多量であって、漁業者では原料の入手が不便な場所などであったようである。

ゆえに、網地の供給範囲も局限されて狭く、殊に帆船運送の便ある地方とか、米味噌またはその他の漁業資材の給送地であ

るとか、漁獲物または製品の消費地として、漁場との舟航の便のある地方であるような地区で、ある程度の網地が商品として取り引きに上がっていたことについては、事例が残っている。

日本水産史によれば、麻糸が漁網に使用されたのは江戸中期頃とみるのが、史実的に正しいとする説が比較的多い。

麻網普及に關しての諸家の諸説は、この江戸中期説以外には異説がほとんどないといってもよいようである。しかし、麻が漁網用糸として使われたのはずっと古い時代に遡ってもよいような気がする。日本の網漁業に關する絵図の如きも、奈良朝當時にその遺物を見ることができると、網そのものは今日ほとんど現存するものを見ない。

ニューヨークの、メトロポリタンミュージアムのエジプト室には、約八、〇〇〇年以上の年代を経た漁網の実物が保存されている。

撮影されたその写真によって見ると、麻か亜麻製の糸を以て編まれたもの如くに見られる。同所に陳列されている網針の如きも、かなり細目の網地を編き得る形態のものであって、日本のアライと要領のよく似たものである。

明治十年前後の漁網は、麻網時代であって、江戸時代の姿とほとんど変化は少なく、漁網の画期的な革新ともいうべき綿網が使用され始めたのは明治十五年までで、それまでを明治時代

の前期とすれば、それまでの漁網は依然麻網主体であって、この時代においては漁業及び網具共に新たな改良発達の見るべきものはなく、旧態の踏襲時代であった。

明治中期すなわち明治十五年から三十年の間に、綿漁網の普及がようやく軌道に乗りかけた。いわば綿漁網の黎明時代である。

明治三十一年から四十五年にわたる明治後期時代は、漁業界においては近代漁業への躍進の時代であったが、製網業界においても革新の時代であった。

大正時代はこれを要約すれば、漁網工業の成熟期であり、国民的産業発展の上げ潮に乗って近代的に育成され、今日の水産業を造る基盤が培われた時代であるといわれよう。

昭和に入り、明治、大正、昭和と永い綿漁網時代を送り、次の合成繊維漁網時代を迎えるに至った。

昭和二十四年に漁網用ナイロン糸が紡糸されて、天然繊維に合成繊維が代位する具体的発足が確立されて以降、二十六年までの産業利用試験時代、二十七年の準産業化時代、二十八年にいたってかくたる産業として、独立企業の基盤を確保するまでの間におけるこの工業の歩調は、かなり急ピッチであったが、堅実でもあった。漁業の発達とか、漁具の進歩とかが網用糸の製造発明によって刺激され増進したことは、一般の機械器具類が

材料進歩に伴うごとく、網もまたその軌を一にする。

明治時代以来、綿糸の利用ラミィ、そして合成纖維糸へと、次々に網糸が考案され工夫されるに伴って網は益々種類を増し、網具は精巧となり、強度と耐久性を増し、かつ規模を拡大して今日に至っている。この如き漁網用資材の変遷と、漁業の発展の關係は注目すべき問題である。

錦海湾と打瀬網漁業



畑 中 實

- ・ 大正六年(一九一七)生まれ
- ・ 尻海
- ・ 自営業

月日が立つのは早いもので、錦海湾が干拓されて早くも三十四年の歳月が流れた。干拓されるまでの同湾は、県下唯一の稚魚の育成場として有名であり、海域が牛窓・長浜・尻海と三ヶ村に跨ぐため江戸時代より漁業権をめぐって幾度も漁場境界論が繰り返された歴史をもつ。

湾内で生活を支えていた漁家は当地のみで干拓時百余軒を数

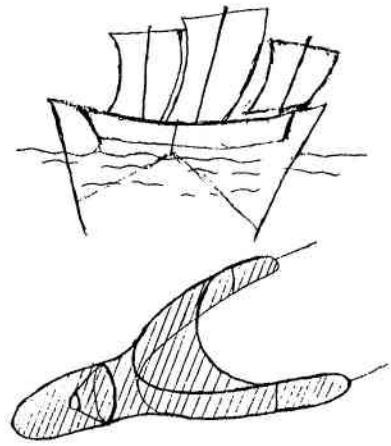
え、業種は打瀬網・刺網が主体で季節により延縄・藻貝採り等が行われていた。

また、かき養殖は戦後玉津漁業会が湾内中央へ試験的に造成したのが始まりで、最初のうちはたけを鳥居型に立てたひび建簡易垂下式であったため、たびたび台風による被害を受ける等苦い経験を経て、今日沿岸海域を埋めつくすほど盛んになった。

錦海湾干拓と共になくなった漁業のひとつに打瀬網漁業がある。打瀬網は底引網の一種で、その漁法は袋網の両側へ袖網をつけ、風力・潮流を利用して船で引き、魚・エビ等を獲るのである。打瀬網には藻打瀬、沖打瀬の二種類があり、藻打瀬は湾内のちようど締め切り堤防あたりまで密生した藻のうえを引く当地独特の漁業であり、一年中操業が可能であったが、六・七月ころは藻の表面にかきが付着し漁網の損耗が大きいため湾内での出漁は極力避けていた。

また、沖打瀬は湾外以東で操業し底に藻もないため、網は同じでも底へ沈めるための分銅の仕掛けが違うのである。操業は六月から十一月末までであったが、潮流の緩やかな湾内で風力のみで操業し得る藻打瀬に対し、沖では潮流が早いいため逆方向の風では網を引くことができないので時折、藻打瀬に積み換えて出漁することもあった。(但し六・七月の梅雨期は潮流が海底より海面が早いため「水潮といった」別に用意してある帆を海

中にいれ潮帆で網を引くことができた。



次に動力について、この漁業の歴史を辿って見ると、大正末年までは無動力であったが昭和初期になると漁場までの往復に小馬力エンジンを据えつけて漁撈作業を行うようになり（この頃は動力で網を引くことは禁止されていた。）終戦後になって、風力も利用しつつ凧の時は動力で網を引くようになった。先に述べた如く湾内は藻が密生しているため、魚が外敵から身を守る棲家として、また産卵場として県下にこれほどの海域はなく、漁資源保護のため四月の産卵期（沖では八月）は禁漁期間として打瀬網漁業のみ操業を禁止されていたが、第二次大戦頃より食料増産が叫ばれるようになりこの規制も自然消滅となった様である。

次に藻打瀬（湾内）沖打瀬（湾外）で当時漁獲された魚の主

なものを持ってみると、次のようなものがあげられる。（堤防締切後殆どいなくなった魚には○印を付す。）

▼湾内

- 鰻 三月から十月
- クロバカマ海老 九月・十月
- シカタえび 五月・六月
- バリ 九月・十月
- 文甲イカ 五月・七月
- イサダ 一月・三月

セイ

七月・十月

タナゴ

二月・十月

イナ

九月・十月

ホソ

十月・三月

各種タコ・メバル・トトロ・アナゴ・チヌ・ハゼ・カレイ・

サヨリ・カニ・シヤコ

▼湾外

- ハモ 七月・十月
- クロバカマ海老 九月・十月
- 鯛 八月
- アナゴ・各種赤エビ 七月・十一月
- キス 七月から十月

ゲタ 六月・七月

カレイ・〇各種イカ 六月・八月

各種タコ・ハゼ・スズキ・カニ・シヤコ

以上、各種の魚が漁獲されたが、特に七月から十月までが最盛期であり、この時期は湾内外ともかなりの水揚げがあった。私も大正、昭和初期の子供のころ長閑な春の一時友達と共に小舟をこぎだし舟遊びをしてよく父に叱られたものだが、この頃の海は良く澄み、海底の藻の間を大きな文甲イカが産卵場所を求めてゆっくりと泳いでいるのを一生懸命追いかけて廻したものである。

また、秋の盛漁期にはよく父の漁撈を手伝うべく出漁したもののだが、この頃は網を入れるとすぐにゴボゴボと魚が音を立て袋網に入るのがよくわかり、網を上げると多い時はセイ、イナ、ホソ等数十尾もデッキで飛びはねるのが面白く、学校の休みにほとんど連れていってもらったものである。

この時代は一晚で多い時はイナ二、三〇〇尾他に鰻、セイ、タナゴ等相当の水揚げがあったがもちろんこれは最盛漁期のことであり、当時は無動力のため凧の時はなすすべもなく無漁の日もあり、収入は不安定であったが、昭和年代になり動力船となつてからは、無動力船ではとうてい出漁し得ないようなしけの日でも出漁が可能となり、湾内が大波で黄色く濁ると、この時

が打瀬業者にとって最高の稼ぎ時であり、しけが三日も続けば不眠不休で日夜連続操業することもあり、冬期閑漁期の低収入を補うべく一生懸命働いたものである。このような時は魚もたくさん獲れるが、鰻が最大の収入で一日三貫匁から四貫匁（一〇kgから一五kg）の漁獲があった。（鰻は別に仲買人がおり量目によって価格が拘束されており、セイ・タナゴ等の如く多ければ安くたたかれるということが無かった。）この頃は緊縮時代の最も不況時代であり十本入り煙草ゴールデンバットが七銭、イナ一尾が平均一銭位であったが鰻の価格は一貫匁五円位で取り引きされていたように思う。また、沖打瀬では七・八月の大潮時（旧暦十三日から十八日、二十八日から翌月三日）は昼から出漁していたが、この時代は一網揚げると赤エビが多い時は一度に船へ揚げられないようなこともあったが、晩の魚、エビは明朝のせり市までそのままおくと鮮度が落ちるため、生簾へ入れ、残りは塩ゆでにして処理していた。取り立てであるため味の良いことはまた格別で、今でもあの味は忘れられない。

終戦後の食糧難時代より動力で網を引くようになり漁船、漁具の近代化と相まって乱獲による魚群の減少とこれに拍車をかけるように干拓によって広大な産卵場が失われ、魚資源の激減を招き、次第に獲る漁業からつくる漁業（かき養殖、エビ・チヌ等稚魚の放流）へ移行して今日に至っている。土地は江戸時

代、千石船の往来で大変栄えていたことは子供の頃よく古老の人達から聞かされたものだが、その名残であろうか、私が小学校へ上がる頃はこの狭い地域にお医者さんが三軒もあったことを思い出す。しかし、残念ながら時勢の波に取り残され、過疎化の一途をたどっている今日この頃である。また陸に海に公害汚染防止の声を聞くにつけ、魚の宝庫であった錦海湾塩田跡地の一日も早い開発を望むものである。

漁業のうつりかわり



松 本 誠 一

- ・ 明治四三年（一九一〇）生まれ
- ・ 虫 明
- ・ 漁 業

私達小漁師の長男に生まれた者は皆な七、八才になると父親に連れられ漁に出て家計を助けて居りました。私も八才の時より父親と漁に出ました。その当時は魚類も多く、魚法も多種多様で漁獲量も多かったが、今では魚類が年々減少して現在は絶えて無くなった漁法が沢山あります。その一つ大網別名巾着

（キンチャク）網と言う魚群を一網打尽にする勇壮な漁法を、古い記憶を思い起こして書いて見ます。主にイナ、ボラ、セイ等を漁獲する冬場の漁法で、寒さが厳しければ厳しい程魚群（イロ）が締り、魚足も遅くなり、掬い獲るのに最適となる。総勢五〇名以上網舟真網左舷に網を積む、逆綱^{サカ}右舷に網を積む二隻一組で網の全長七〇m、腰丈三五m（浮子（アバ）縄より沈子（イワ）縄までの網の丈）を積み込み、櫓は四丁から五丁立て、櫓手は一丁の櫓に二人から三人付く、手舟一〇隻には各二人乗り、魚群見（イロミ）舟四、五名乗で編成する。魚群見舟に魚群見人と言う人も乗って居て、多年の経験で海水の色を見て魚類漁獲量を見当る事の出来る特種の眼力を持つ人が居る。夜間はヒケ見て（魚が逃げる時に起こる現象）で見当る魚群人の中に大廻と言う采配（ホデ）を持つ人が居て二本のホデで網舟を自由に操る魚群舟がホデを立て網舟を招く（呼ぶ）、大廻しは魚群の大きさに依って肌脱ぎか上半身裸になる。網舟も上半身裸か全裸になって持場に付く。ホデに従ってミトを割る真網^①逆網の結合点網中心を、左右に別れて櫓手網子一体となってエイスアーエイサー 櫓声で網を投入して、魚群を円形に囲む網舟の舳に「ノケ」櫓と言う櫓が有って、何時も舳を外側へ外側へと漕ぎ出す、舟頭（とも櫓）は円形を作る為に舳を内側へ内側に向ける様に漕ぐので、舟尾は外へ外へと出る。舟は前

① ミト—真網、逆網で積んでいる網の中心部

進しながら舟全体が横すべりに外に動くので、舟の下に渦潮が起り沈子網（イワツナ）は重いので真下に沈み、網は渦潮に引き出されてイワ網の外側に沈むので、巾着の様にイワ網を絞る時にイワ網と網が縫れない様に考案されたノケ櫓である。真網逆網が円形に網を投入して出逢が近くなると、手舟二人乗りは円形になった網に等間隔に着けて浮子（アバ）縄を舟に積込んで待つ。網舟がイワ網を絞るのに合せて浮子縄を絞る。左右の網舟が出逢い互いに最合網^{モア}を投げ合い、最合が取れたら舳をミトに向けて舟を繋ぐ。網舟の中央に据付けたロクローイワ網の「巻取機樑木を縦横に組合せた一辺が四〇cmの六角形の筒状になって居て、高さ七〇cm一角一角各タロクロー棒を差込んで回すロクロー棒は長さ一・三m、経七cmの杉丸太一本の丸太に二人掛で巻く。ロクローにはイワ網が巻きつけられてある。早くイワ網を絞って網を袋にする為に、ヨイト巻け、ヨイト巻けとの掛声で一生懸命馳足で巻く。イワ網は海底が絞る八〇kgフンドウ「錘」を海底に下す。フンドウにはイワ網の連なった鉄製のナンバ「滑車」が結び付けてあって、イワ網はロクローに直結す。イワグチ網の下部には三m間隔に長さ三〇cmの麻縄が付いて居て、縄の先端には直径七cmの真鍮の輪が結び付けて有って、輪の中をイワ縄が通って居て、ロクローに依って次々と絞られて真鍮の輪が一ヶ所に寄ればフンドウの滑車を解く特種な結方

をして有るので、舟の上で解く事が出来る。解いてイワ網を舟に積込めば袋になるので、魚は逃げる事は出来ない。釐^{ドウモア}最合を解いて網を積込んで行き、魚を一カ所に纏めて大ダモで掬う。大ダモは直径一・五mの円形の輪の入った網袋で一タモで魚舟に一隻分約一、三〇〇kg、一、四〇〇kg掬うタモ一杯に掬うと網舟より「ハアヨイセ」とタモ声を掛ける。魚舟の若者は、「ハアヨイヨイセ」と声をあげる交互に声を掛け合って一五分から二〇分かけて積込む。大漁の時には押込と言う行事が有る。大正の末期に移動する魚群を追い掛けて一網で九隻分獲った時は、網舟は大漁旗を立て舳よりマストを通して舟尾の大漁旗まで幾重も縄を張り、それに漁獲した魚を吊り下げて港に向かって櫓手は總掛で櫓声を掛けながら右に漕ぎ、岸が近づくと左に向きを変え、右に左に繰返し繰返し漕ぎ網の上では全裸、裸一本若者が杓子を持って杓子の舞いを舞いながら家族や群衆の出迎える波止場に着けて、漁獲した魚を拾い得^{トク}に投げる。壮観である。投げ終ると、網宿に引上げて若者は炊事に掛かる。男の料理で簡単な刺身、魚の煮付けで始まり最後が名物のブツ掛汁で終る。昭和二十八年頃一網で舟に四隻獲ったのを最後に大網も姿を消しました。写真はダモ一杯分です。向かって左が私です。現在は海底に海藻が生えなくなり、漁舟は大きな馬力の機械を据えて海水を海底までかき廻すので、魚群（イロ）で棲む場所が

無くなり昔の大網の様に大勢の工夫を使って操業して居たボラ敷網鰯網地域網等漁獲が年々減少して、採算が取れなくなり廃業に追込まれました。漁網もよいのが出来、漁具も改良されて少人数で操業する漁法に変わりました。



漁業風景

かき養殖の始まり



松本清市

- ・ 大正十年（一九二二）生まれ
- ・ 虫明
- ・ 漁業

県下で有数の牡蠣^{かき}の生産地として知られている虫明地区は、邑久町でも最東端の湾岸に面した他に例を見ない漁場に恵まれた、牡蠣養殖には最も良い環境といえます。思えば、養殖を始めてから三九年ほどになります。養殖が現在になるまでには計り知れない困難に耐え努力してきたことを走馬灯の如く思い浮かべ、私の拙い文章ではとても書き表すことは難しいことです。終戦の暮れ、幸いにも無事郷里に復員できました。結婚したのは翌年でした。大変動の戦後のこと、当然家業である漁業に従事したわけで、米の配給も少なく、食べるのがやっとの当時、両親兄弟とともに食生活ができるのが最上でした。昔は水上派出所があり、稚魚の乱獲を防いでいましたが終戦後には、その取り締まりもなく魚も次第に減少していきました。

同業者の融資と日頃の会話の中で「このままではいけない。

何とかしなければ生活しにくくなる。」と、そんな時（昭和二十六年頃）手始めとして、行政指導により県の紹介を得て広島草津試験場に行きました。あらゆる指導を得て広島と虫明の漁場との違いを学んだわけです。最初の試みとして県の斡旋で宮城産の種苗を使用して、有志によって木島の内側に共同筏の試作をしたのが最初です。

結果は、台風のためつぶれて成功にはいかなかったのを覚えています。そこで翌年、内海の一部を漁協から借り受けて希望者を募って一台ずつ筏を作ったわけです。

もちろん、ひびたて式で海中に竹を立てて風波に耐える丈夫な筏を作り、本線（太縄）を張って荒縄を二本よりしてコールトールで染め種苗をつりさげる行程です。

今度は筏はつぶれなかったが、牡蠣の斃死です。

当時は車の便もなく、宮城から片上まで貨車で送られた種苗を舟で受け取りに行き地元まで持ち帰り、皆で注文数量を配分するまでは相当の日数を要する為、種苗の死滅は至しかたなかったでしょう。

竹の購入も山陰方面から貨車によって送られ、片上まで行って筏にして引っ張って帰ったものです。

何年か続けていましたが、牡蠣の斃死の状態は変わらないので「これではいけない。」と思って更に広島に行き状況を話しま

したところ「草津水産試験場の種苗に変えてみたら…」ということで、広島産の種苗で試してみたところ結果は良好でした。それから草津の養殖業者より種苗の購入が始まりました。舟に食料品を積み、組の人が乗り合わせ何日かかりで草津まで種苗を買いに行ったものです。と言いましても地元虫明の種苗も大きくしめていました。

あらかじめ用意している針金に通したほたて貝を海に投入し採苗します。この採苗も水温その他の好条件がともなわれないと附着しにくいのです。また、広島を見習って二年牡蠣を平尾に試作しましたが初めてのことですのに見事な牡蠣のでき具合を覚えていきます。

二年牡蠣には地元の種を利用していました。

筏を一台作ると言いましても海中に大きな竹を立てるので、手の力だけでなく竹にロープを結び足で踏み込んで一本ずつ垂直に打ち込んでいました。

竹がゆがんで安定感がないと牡蠣の成長と共に筏の弱い部分に重量がかかり風波にあえばそこからくずれていくのです。次々と竹の補修も必要です。三年目の場所替えとなりますと竹や綱を全部はずし、泥やさめのついた古くなった竹抜き作業は大変でした。

それまで不振であった時には大平山開拓やレンガ会社に勤め

ていた人達も次第に養殖に復帰したのです。ところが、養殖場が狭くなって内海の一部ではどうすることもできないので、漁業権の拡張を計り抽選によって漁場を広くしましたが、筏の増加によって牡蠣に必要なプランクTONの減少で著しく成育を遅らせたのです。このため、外海に移動することによって身太りができるのではと思いつき自分で試みることにした。気象状況を見計らって先ず沖海にひびたて式の筏を作り、内海の牡蠣つるをはずして舟に折り重ね移動したものです。重い牡蠣のつるを一本ずつはずしかえる作業はとても大変でしたが良好でした。昭和三十九年頃と覚えていますが、それによって牡蠣業者の人も外海を利用するようになりました。

そこで、広島業者の筏を見習って徐々にひびたて式筏から本垂筏（浮き筏）が普及されて行きました。筏を浮かすのはセメントのブイでした。四十一年に本垂筏を二台つくっています。

この頃四十三年に洗浄機を購入しています。ロープ等も化学繊維になり、荒縄を二本よりして染める手間も省けるようになりました。四十五年頃セメントのブイもハッポースチロールの軽いものになりました。これによって、筏を移動するには動力が必要になり、次第に船体もエンジンも大きくなりました。筏の竹組も陸でできるようになり、牡蠣も巻上機で舟へ積み込み、洗浄機コンベアにより牡蠣殻の処理まで時代も変わって機

械化されました。移動によって筏の台数も増し、一年もの・二年もの・三年ものと多様化されています。

また、作業場も国から近代化資金を借りて埋立地に規格に合ったものができて衛生管理もできています。拡張によって作業場の建造資材の購入、あらゆる諸経費も多くなっただけでも、ますます生産も向上し、一時は県下に誇っていましたが、現在では気象状況のためか海底の老化のためかまたは生産過剰のためか牡蠣の身太りも悪くなって商品としての価格が下がってきているように思われます。

このためには個人によって良識的な判断で思いきった改革が必要に思います。そして若い後継者によってますますこの牡蠣の養殖の発展することを祈っています。

育てよう邑久魂



赤 枝 秀 夫

・ 明治四十年（一九〇七）生まれ
・ 豊 安
・ 元邑久町教育委員長
・ 書家（香城）

邑久魂とはどんな魂か。今まで明確に記された記事に接したことがない。この度ふるさと体験記の発行を機会として整理確認、いよいよ磨きをかけて邑久魂を成長させてみたいものである。

① 『胸鎖乳突筋が鉛直線の方向に真直ぐに伸びているか調べて見よ、前列廻れ右。』で頭廻施の正確さを確かめていた。今秋も体育会のラジオ体操に三年生の藤原君が台上に上がって指揮を取っていたが呼んで再現して見ると正しく廻旋されていた。こんなことは簡単なことであるが、どの先生もどの学級でも全校一致で極限から極限まで実行出来なければ教育の成果は揚がらない。

② めばるかふぐか…ハケ村寄れば仲良しの友達がたくさん出来る。川野保夫君の招きで宇治君と敷井へ釣りに行った。翌朝

一校時民実先生は誰から聞きつけられたか、「宇治と赤枝はふぐばかり釣ったが、川野はさすが上手にめばるを釣ったそうじゃ」とこんな優しくおもしろい言葉も邑久魂には取り入れてほしいもの。

③ 中隊教練…何といっても邑久高等の中隊教練は天下一品であった。「只今より五分後三年生は武装して第三運動場に集合。」県外からの視察団来校だ。袴にゲートル、海軍帽に銃、中隊長は石原博先生、第一小隊長阿部美佐夫、第二小隊長赤枝秀夫、第三小隊長太田猛、一二学級全員一四〇名の参加、今思い出しても胸が鳴る。

④ 伍長上等兵：姫路十連隊で除隊の時金筋一本入れた、五動さんは概ね邑久高等卒業生であった。だから長船、香登、上道、西大寺、浜、山南と学区外の転入者も多数であった。

⑤ 台覧の光栄：邑久高等卒四年後の出来事、大正十五年秋のことである。陸軍大演習が岡山地方で実施された。学生も参加した。自分が台覧に供した演技は跳箱前後開脚跳と分列大行進であった。施順攻撃の猛者陸軍中佐清水武治郎配属将校先生お着眼でこの時も阿部君と武刀を振るった。この度の伴奏は陸軍の軍楽隊、行進は股を膝まで挙げる挙股歩、偉風堂々勇猛邁進の気概がなくてはならないのであった。

⑥ 木剣体操：二年生の修練種目、指導は今田幸夫先生であっ

た。体操の相手は邑久柔道主将の時実君であったが、彼との動作においてまずい点が発生した。『コラ!!』大屋一声職員室で待機せざるをえなかった。午後の六校時は済んだ。『赤枝ここへ来い。これ読んで見よ』『よしこらえてやる。帰ってよし』室外の大声に比し職員室での温情ほんの暫^{しばらく}。先生にご心配をかけた相済まなかったと反省帰宅した。翌朝廊下でY先生に会ったので殊更元気に朝の挨拶をした。『お、ここや赤枝!!』と軟いすり拳が頭のギリギリの辺をさまよっていた。昨日の事であるので居あわせた友達連中意味ありげに笑っていた今田Y先生は褒めても叱っても大きな声の出る先生であった。

⑦ 合同学習…二年生 三、四学級短歌俳句の作り方の勉強会…奥山忠男はよい短歌を作った。『子供等の清き瞳にうつりたる初夏の窓辺の若草の色』Y先生割れる様な声で、『奥田ええぞ!!』奥田君は尾張の人、東京大震災後早く病死、惜しい人物であった。

⑧ 恩師の脚…今田先生は牛窓、長船の方へのご勤務であったがご病弱でご逝去になった。友人達と先生の脚になりたいと申し込んだが満負で相叶わぬことであった。教え子等に守られて野辺の送り、素晴らしい邑久魂だ!!

⑨ 兎追う…通山総攻の兎追い。邑久高等の腕のなる行事である。終日追いまくってやっと一匹捕獲、全員学校へ引き上げ。

今日は早朝からご苦労さんであった。兎一匹や二匹でみんなに味をきいて貰うわけけん行かぬ、皆の先生方に味をよく調べてもらい後で皆に報告をするとの週番の先生のお言葉。今頃のように学校給食の設備があると皆の者に兎をなめさせてあげるのに。

⑩ 柔剣道…これは邑久の特技である。野道は福間、久山、赤松先生 剣道は木村、上野、今田、石原、升原先生方が指導してくださったが、鹿忍黄金時代が出現し、山根先鋒の胴、宇野主将のさし面に苛まれ隠忍せねばならぬ過去もあった。

⑪ 農業実習…水田は長田新聞屋の東三枚、畑は大黒屋の西、郡役所南岡本商店まで、田畑開発その美田を誇っていた。農具の使用方も長浜、玉津諸君が上手で長浜男の真実さそれから渡辺、板野両先生の真摯なお姿が目につぶ。赤いトマトは促されても食べようとしなかった昔の気風である。

⑫ 給仕さん…今頃の学校職員には書記や用務員が公費で置いてあるが邑久高等では男性の生徒を給仕と言う名で採用、学校運営の一助にしていた。そして押しも押されぬどっしりとした人物の育成が邑久高等の夢であり邑久の魂であるといっていた。

⑬ 墓参…私は昭和二十八年牛窓小学校長に転動した。先輩先生の跡継ぎができますよう下山田の今田先生墓地に参拝した。師弟の愛情のこまやかであること、魂の育成には重要な要件であ

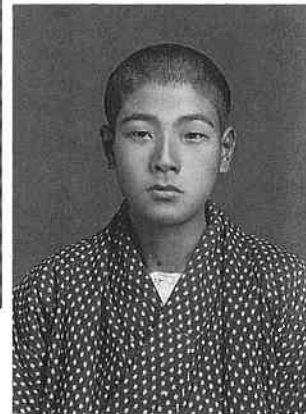
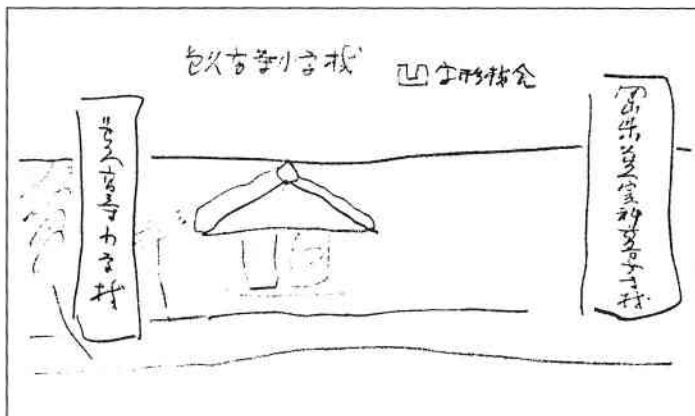
る。

⑭心の力：三年生は始業前にこの凝念行事を励行、心身を鍛錬していた。心の力第一章、可能な所まで記して過去を偲びたい。

⑮ ころの力第一章

天高うして日月懸り、地厚うして山河は横たはる。日月の精、山河の霊、鎮まりて我が心に在り。高き天と、厚き地と、人と対して三となる。人と無くして夫れ何の天ぞ、人無くして夫れ何の地ぞ。人の心の霊なるや、以って鬼神人を動かすべし。人の心の妙なるや、以って天地に参ずべし。燦たる彼の月と日と遙かに我が心を照す。我が心の凝りて動くや、能く日月を貫くべし。峨々たる山、漫々たる河、常に我が心に通う。我が心の遠く翔るや触く山河を包むべし。ただ六尺の肉身に限らる、我が心ならず。ただ五十年の生涯に盡きぬべき我が心ならず。身よ雲に色あり、花に香あり、聞け風に音あり、鳥に聲あり。此の中に生を托したる我に人この心あり。至大至剛はこれ心力、至玄至妙はこれ心靈。ただ此の心あるが故に、我人は至上至尊なり。夫れ眼前の小天地は離聚常ならず。我と我が身と心とを此の中にのみ限るものは、天なる月日の精を見ず、地なる山河の霊を知らず。此の精と霊とを鎮めたる我が尊さを我と悟らず。眼にさへぎる影を払へ、耳に塞がる塵を去れ。その影消え、その塵絶え、心はすみて鏡の如く。湛然として澗の如くば彼の小

天地に限られし。昨日の我を外にして、至上至尊の我あるを知らむ。



赤枝秀夫
邑久高等3年時代

邑久高等小学校沿革

○明治一八年二月二五日 邑久郡各村組合を以て邑久村大字尾張に民家を仮用して高等小学校を設置し高等高砂小学校と称す。

○一九年四月 本組合より南部四ヶ村を分離す

○二〇年一月 北部五ヶ村及び牛窓鹿忍二ヶ村を離す

○二三年三月 北部五ヶ村を再び本組合に併合す

○二一年六月 凹字形校舎一棟を現敷地に新築す

○二三年四月 校名を高等邑久小学校と改め、二六年四月更に

邑久高等小学校と改称す

○二四年一月 勅語謄本を、翌二五年一〇月天皇后兩陛下御影を下賜せらる

○二七年四月 裳掛村を分離す

○二五年、二六年、二八年、三〇年、三二年に亘りて教室倉庫宿直室炊事場を増築す

○三四年四月 鶴山村、三五年四月豊、行幸、国府、美和の四ヶ村分離し現在の邑久、笠加、福田、今城、豊原、本庄、長浜、玉津の八ヶ村組合となる

○三八年四月 附設女子校を設置し、四五年三月を廃止す

○四〇年四月 農業実習地を設置す

○四一年四月 小学校令の改正に依り就業年限を三ヶ年と定め

たが大正三年四月女子に限り二ヶ年と改む

○大正三年九月五日 卒業生補習教育の目的を以て私立邑久土曜学校を開設す

○大正四年五月一日 女子補習科を設置し、一〇年三月之を廃止す

○六年三月 北側隣接の田六七〇坪を購入し地場を行い運動場となす

○一〇年四月邑久実科高等女学校を併設す

○一二年四月私立土曜学校を組合立とし本校に併設

歴代校長

校長名	任命年月日
横山謙齊	明治十八年二月
桜木雄作	明治二十三年四月
服部奎三郎	明治三十三年四月
戸島末三郎	明治三十四年四月
秋山 陟	明治四十年二月
宇治大次郎	明治四十三年八月
奥田真須二	大正四年四月
今田力治	昭和八年

邑久農学校と終戦前後の思い出



木村 恵昭

・昭和七年（一九三二）生まれ
・山田庄
・農林水産省勤務
現町長（二期目）

邑久町ふるさと体験集に、終戦間際の昭和二十年四月から二十二年三月までの僅か二か年間であったが、秋の夕空に紅のように現れ、春先の淡雪のように消えていった当時の邑久村外六か村（福田・今城・豊原・本庄・笠加・長浜）による学校組合立邑久農学校と終戦前後の思い出について当時の記憶をたどりながら記することにする。

昭和十九年、私が明徳国民学校（現在の小学校にあたり本庄にあった）六年の夏頃、上級学校への進学希望調査の際、当時の担任古武駒一先生が「尾張に組合立の農学校が設立されるから希望校の中に入れておくように」と言われたのを覚えている。

岡山県邑久農学校設立の主旨を邑久郡誌から引用する。（文末参照）

当時、国民学校を卒業すると第一邑久国民学校（元の邑久高

等小学校）、県立西大寺中学校、県立邑久高等女学校のいずれかに進学していた。

新しく農学校が生まれるということに、子供ながら胸を膨らませ、大きな期待を持った。満二歳と六か月で父を失い、貧困の中に育った私は「やがて戦争に行かねばならないが無事戦地から戻れたら、僅かながらの先祖から受け継いだ田畑を耕作者から返還していただき農業を生業にして、朝早くから夜遅くまで働いている母親を早く楽させてあげたい。」という思いが先に立ち、来春には是非農学校に進学しようと小さな心に将来の方針を決めた。思うに「子供は働く親の後姿を見て育つ」という言葉があるが、その典型的な模範生の一人であったかもしれない。かくして二十年三月、同級生四六名がそれぞれの道を選び竹久夢二・正富汪洋・古武弥四郎先生等の大先輩を生んだ母校明徳国民学校を巣立っていった。

邑久農学校の正規の名称は、公立中等学校岡山県邑久郡邑久村外六か村組合立邑久農学校であり、開校場所は第一邑久国民学校内、現在の中央公民館の建っている地であった。

春爛漫の四月七日、邑久農学校へ入学した。入学式は現在の公民館裏手に現存している元の邑久中学校講堂で行われたが、現在位置より三〇米程西側に位置していたと思う。

当時の日本内外の情勢をみると、昭和十六年十二月八日に始

まった太平洋戦争も緒戦の連勝はすでになく、十七年六月のミッドウェイ海戦に破れ、サイパン島も落ち、二十年三月十日の東京大空襲で帝都は崩滅的な被害を受け、さらに沖繩本島に米軍の上陸が開始される直前でもあり、入学式も極めて簡素であったことを記憶している。今、私の手元に入学生名簿があるが、男子生徒一七四名が「い・ろ・は」の三学級に組分けされ、出身地も当時の邑久郡内二〇か村・上道郡（現岡山市）和気郡、赤磐郡等広範囲にわたり、年齢的にも国民学校高等科（現在の中学生）からの入学生が相当いて、一、二歳の差があった。

教職員は、校長出射久志（第一邑久国民学校校長兼務・物故）、教諭吉田幹夫（数学・物故）、山本誠一（農業・山田庄在住）、出射虎夫（英語・山田庄在住・現弁護士）、横山春松（物理と化学・虫明在住・現邑久町教育委員長・横山製網社長）の諸先生であった。

入学してから八月の終戦までの五か月間は、一生にまたとない貴重な体験をした。教室での学習は二次的に考えられ、国策に副い戦争協力と併せて農学校の特色を生かしながら毎日食糧増産のために開墾作業に従事した。本庄下山田の梨畑跡の開墾をはじめ当時桑畑が散在した吉井川豆田川原（現在の村田製作所付近）の開墾など原野や河川敷を畑地化し、さつま蒔を植えて来たるべき本土決戦のための食糧確保に文字通り体当たりで

精出した。今の中学校一年生に相当する私達は連日麦飯を持参し、地下足袋を履きゲートルを巻き、手に肉刺まゆをだしながら鍬をふるった。一日の作業が終わると空腹をこらえて自転車で家路に着いた。さらに、日曜毎の家庭実習として一人二十坪の開墾が割り当てられ、私は佐井田のU君、K君などとグループを組み、K君方の笹山を開墾してさつま蒔を植えた。今は竹藪となり往時を偲ぶこともできない。

また、陸軍の特別攻撃隊の基地として福岡川原（現在の長船町ゴルフ場付近）に飛行場を建設するため動員された。その滑走路造りのため、二十歳前後の若い曹長と兵長の二人の軍人の指揮の下に、私達は地下足袋、ゲートルを着用して隊伍を組み、腕をとりながら軍歌を歌い歩調をとって歩き、滑走路の踏み固めを行った。当時は機材不足でローラーはなく人力で転圧したのである。朝から晩まで声をからして軍歌を歌って歩くのも大変なことであったが、お陰で「万葉ばんやの桜」をはじめ幾つかの軍歌を覚えた。作業は誠に原始的なやり方であり、夕方には足が棒のようになり疲労は極に達していた。時には力が入っていないという理由で、今の福岡城跡付近を何回も走らされた記憶もある。終戦直後、私達が造成した飛行場に行ってみたが、鉄材と木材とでできている胴体、翼の骨組に麻布を張った赤トンボが二機滑走路に放置されており、エンジン部分などの主要な部

品は誰かによってすでに持ち去られていた。

また、空襲の際に延焼を最小限に抑える目的で、岡山市の建物疎開にも動員された。今の城下付近で、立派な家屋にロープを引っかけ皆の力で家屋を間引き倒壊して空間を作る作業であり、建物の梁や柱を農学校校舎の建築資材に再利用することによって私達が動員されたのである。当時の持ち運びは馬車が運送の主要手段であり、馬車を持っている朝鮮半島出身の金さんにお願ひし、代わりに金さん方の耕作地の田植えを学校側が引き受けるという交換条件の下に資材運搬は行われた。

忘れもしない六月二十九日早朝、田植えを始めようとした時に未明の岡山市大空襲の火災により生じた灰や焼けた紙くずが空から舞い降り、異様な雰囲気になったことや、その日の田の水がなぜか非常に冷たかったことを、今日なお鮮明に記憶している。

一方、学校では体操時間に銃の代わりに青竹を担ぎ歩調のとおり方、ゲートルの巻き方、伏せのままの前進の仕方等軍事教練の初歩を教わり、反面英語も敵国語ながらABCから勉強していた。英語の出射先生が cotton (綿) の単語を説明するために、ご自分の背広の裏地から綿を引っ張りだし、「これがコットンです。」と何回となく私達腕白坊主を相手に目をぱちぱちさせながら一生懸命に説明されたことや、化学の時間に最初に教わった

ことが食塩であったので横山先生に早々ミスター NaCl の渾名をつけたりしたことを覚えている。

この様ななかで広島、長崎への原爆投下を経て八月十五日の終戦を迎えた。当時のことは克明に記憶している。というのは終戦二日前の夜、私の母が路上で蝮の難を浮けて、医薬もなく十五日には視力も体力も落ちて重体になり、私達兄弟三人と親類の人が枕元に寄り添って母を励ましていた。そのとき、日本が戦争に敗けたらしいという話が近所の人から耳に入り、国も家庭もこれから大変だなあと悲嘆にくれて泣いていたからである。

いよいよ戦後の新しい時代を迎え、先生も私達生徒も毎日どのように対処したらよいのか虚脱状態が続いているさなか、覆い被さるように九月十八日午前四時、行幸村八日市（現長船町）の地点で吉井川の堤防が決壊して大洪水が襲来したのである。学校側記録によると「千町平野水中に没す。校庭の水深二米八十糎。学校備品・諸帳簿全部浸水一部流失。浸水期間十二日間。」とある。朝早く半鐘が鳴り、吉井川堤防が八日市付近で決壊、直に倉庫にある米を付近の高台に運び出せとの指示が役場からあり、私もそれに参加して、近くの政府所管の倉庫から米俵の運びだしを手伝った。作業中に土佐の地から山手付近を眺めると白い津波のような線になって洪水が押し寄せて来るの

が見えた。それから半時もしないうちに千町平野が水浸しになり、私の家も床上一米五十糶ぐらいの高さまで水が押し寄せ、布団も畳も水浸しになった。そして、二か月の長期にわたり納屋の二階で、奇跡的に蝮の害から回復した母、そして姉、私、弟との四人で暮らすことになった。

十日程して洪水も歩けるぐらいに減水したので、一人で農学校に行くと講堂には数センチ泥が堆積しており足の踏み場もなく、岡山市から持ち帰った建物木材も流木となって散在していた。横山先生が一人宿日直をしておられて、「早く家に帰って家の修復をしなさい。当分学校は始まらないよ。」と言われ、急ぎ家に帰ったことを思い出す。さらに十月九日、第二回目の洪水があり、学校の記録には、「第二回目の大洪水。第一回目の決壊箇所より流出し再度の災害を被る。」と記してある。生徒の手により連日復旧に努めたかきがあり、やがて授業も再開の運びとなった。また、校舎新築のため大量に倉庫に保管していた貴重なセメントが洪水で固形化したため、それを粉碎して粉にすれば使用できるといふ当局からの指示があり、毎日ハンマーで固いセメントをたたいて粉にしたのを覚えている。しかし、使ってみると役に立たなかったが、当時では笑えない真剣な対応の一つであった。

さらに学内記録から引用すると「十一月三日、明治節拜賀式

挙行。十一月十五日、小林薫校長（長浜村小津・物故）着任。」とあり、校長先生の交替があった。十月十二日には岡山市へ米軍が進駐し、市内の女学校は休校となった。占領軍が来ると日本民族を増やさないために男子は去勢され、女子は山に隠れねばと不安の渦巻、何故女子が山に隠れねばならないかよく意味も解らないまま当時のデマも信じていたし、お隣の邑久高女のことでも他事ながら心配していた。

大洪水で米の作柄は皆無で、千町平野のその年の稲刈りは大方の地域で行われなく、立ったままの稲に火をつけて燃やしており、夜は野火となって千町平野をあざやかに色どった。また、生徒間で米が非合法に取り引きされ、水害を受けていない農家の生徒が白米を学校に持参し、食糧難で喘いでいる家庭の生徒に一升一三〇円ぐらいで売買していたと思う。

十月に岡山市天満屋百貨店開業、十一月に千日前に金馬館開館、この時、天満屋に勤めている伯父をたよって、西大寺軽便鉄道を利用して岡山に行った。戦災で岡山鳥城はなく、見渡す限り一面の焼け野原の中に天満屋がぼつんと立っており、大豆と小豆の手土産は伯父を喜ばした。

この年、修身、国史、地理の教育は停止され、教科書の中で戦中の戦意高揚と天皇に関するか所は黒くぬり、毎日の授業の中にも歴史の移り変わりを強く感じた。

かくして、あわただしい中に昭和二十年は終わり、二十一年一月一日、新年拝賀式挙行、一月五日、第三学期始業、三月二十一日には大雄山農場整理に生徒教職員登山。この時、第一邑久国民学校の森隆先生より、大賀島の神仏混合の歴史についての講話を、畑の中に腰を下ろして聞いたことも思い出す。三月二十六日、第一学年修了式挙行。全員二年生に進級。この日成績順位が廊下に張り出され、一年間の各科目の総平均が一七四名中二位だったことが妙に頭に残っている。

二十一年四月一日付けで横山春松先生が家業を継がれたため、さらに出射虎夫先生が弁護士に専念されるため、それぞれ退任された。新たに教頭格として太田鎮（農業・物故）、牧野孝保（英語・物故）、三浦叶（国語・西大寺在住・現西大寺文化資料館長・愛郷会会長）、有道義明（社会・備前市佐山在住）の諸先生が就任された。この時、大阪大学理学部学生奥田節夫先生（京都府在住・京都大学名誉教授・現岡山理大教授）がアルバイトの教師として勤務されており、先生から代数を教わった。食糧難で各大学ともに学生が大学に通学できる状態でなく、自宅で履修することが許されていたときである。秋頃には阪大の方に帰学され、十一月に新たに天野敬朗（物理・神戸市在住）先生が就任された。阪大を卒業された奥田先生には邑久高校で解析学を教わり、また、岡山大学で物理の実験を担当して頂き、現在で

も種々な面でご指導を頂いており心から感謝している。また、東京から転住された三浦先生には国文法、現代国語等を教わり明晰な授業であったが、残念ながら一年程で転勤されてしまった。

新一年生一六二名を迎えて、三三六名の全校生徒数になり、農学校という専門校としての校風の中で、先生も生徒も早く戦後の民主教育に溶け込むことができた。

当時の小林校長の教育目標のメモをみると、農村教育の拡充、生活的実践的科學教育の徹底、道義尊重、体育実践、実力補充のための知育尊重、画一主義の打破と個別指導等が記されており、現在でも十分通用する先見的な指導方針であった。学校内も新一年生を迎えて、私達も二年生としての自覚もできて、落ち着いて勉強していたが、時折教室の片隅では一年生を掴えて鉄拳制裁を加えていた。また戦時の予科練や飛行学校に行っていた人達が除隊して転入学され、年齢的にもさらに厚い層ができた。国民学校の高等科から入学した私より歳の大きい友達ですでに黒々とした腋毛が生えており、体操のとき垣間見てびっくりした思いもあり、私自身多感な思春期の入口にたち、次第に自我への目覚めも始まり、また、クラスの人も積極的に交友を深めるうちに自信もつき成績も向上し、クラスの中でしだいにリーダー的存在に成長していった。

五月二十九日、古武弥二郎博士（元阪大医学部長・和歌山医
大学長）が来校され、久方振りに郷土の大先輩の講演を拝聴し
た。七月二十三日、農学校の校舎平屋四教室が校内南端に建築
されるための地鎮祭があり、十一月二十二日には落成式が執り
行われた。誠に超スピードで完成したが、予算の都合か床に座
板がなくて、石灰で固めた土の上に直接机と腰掛けを置き、冷
え冷えとした教室で勉強することになった。しかし、第一邑久
国民学校の教室から独立して、私達農学校の校舎ができた事を
内心嬉しく思った。

九月二十一日、校内生徒研究発表会開催、九月二十七日、校
内創作工夫展覧会実施、十月十二日、ツベルクリン反応注射、十
一月三日、日本国新憲法公布・明治節祝賀式挙行、このような
中であって秋頃であったと思うが、農学校は今年度限りで廃止
になり、来年から新しい中学校が出来るという評が生徒間に広
まった。「それは大変だ、このまま農学校を存続しなければなら
ない。」と学校側に交渉しようとする代表を選び校長と話し合
った。二・一ストの前年であり、組合交渉と同じように相当先
鋭化した交渉であったが、結果的には国の方針の学制改革に従
い、新制の邑久中学校に衣がえをよぎなくされた。客観的には
農学校として存続は出来たと思うが、七か村の組合立なので当
時各村の財政負担も相当大きかったことが原因で廃校となり、

新制中学校に編入されたと推測している。

かくして昭和二十二年三月三十一日をもって、僅か二か年の
邑久農学校の歴史は閉ざされ、四月より新制邑久中学校となっ
た次第である。

邑久中学校で直接ご指導を頂いた新しい教師として教頭鶴海
秋夫（国語・物故）、出射弘良（理科・現瀬戸町在住）、木村政
夫（体操・大窪在住・前邑久町教育委員長）、上野進（仁生田在
住・元邑久町教育長）、清水潔（音楽・山田庄在住）の諸先生が
あり、現在も公私ともども大変お世話になっており心から感謝
申し上げます。

二十三年三月十九日、邑久中学校卒業式の日小林校長が五
十余年後の二十一世紀にわたる式辞を述べられたが、そういう
私も後八年で新しい世紀を迎える歳になった。往時を偲びつく
づく「少年老易く学成り難し」の思いを深くし、人生八十年と
すれば後二十年ばかりの春秋を迎えることになる。散りゆく桜
に春の名残りを留め、暮れゆく秋に紅葉を賞でるのも後二十回
である。将に一寸の光陰を大切にしたいものだと思感する昨今
である。

さて、十代半ばの邑久農学校時代を中心に戦中戦後の思い出
を述べたが、当時の苦しい体験が今日の私の人格の一端を形成
しており、いつまでも遠い少年の日の気持ち忘れず理想をも

ち、これからの人生を頑張りたいものだと思っている。
終わりにりましたが、ご多用のなか諸資料をご提供下さい
ました邑久中学木村克明校長先生に深謝申し上げます。

邑久土曜学校の歴史



佐藤梅夫

・大正五年（一九一六）生まれ

・豆田

・農業

大正三年四月、御大典記念事業として邑久高等小学校第三学
年卒業者中の有志相謀り当時の校長奥田真須二先生の御助言御
指導の下に同校内に発足す。

（兵隊検査まで四年で卒業）

その第一期生中次なる者が自学自習、普通文官試験に合格、先
生や友人たちを驚かせ、土曜学校の存在を郷党に知らせしめた
のであった。

○嘉数郁衛（邑久村真徳）

まず、邑久郡役所書記に、やがて岡山県庁の某課長に、そし

て皆様御承知の如く、邑久町発足と共にその二代町長として町
民挙げての懇願によって着任、今日の邑久町の礎を築いたこと
はあまりにも有名である。

○長島理一郎（裳掛村白谷）

大正七年、卒業と同時に普通文官合格

○佐藤某（豊原村長沼）

大正七年、卒業と同時に普通文官合格

創立当時の校長

○奥田真須二

（邑久高等小学校校長兼任）

名称の由来

邑久高等小学校職員を講師としたため、土曜日は教室が空き
易いのと、今一つは他より講師を招聘するにも土曜日は好都合
であるので、創立当時は土曜の午後の学習を主体とした。

大正十一年、我国いよいよ本格的に軍国化し、全国在郷の青
年を義務づけて「青年訓練所」設置の令下り、本校の門柱に校
名の左側に「青年訓練所」充当の六字で並記し、在郷の中堅青
年育成の場が軍事教育の場となり、「青年訓練服」と称し、軍服そ
のままの形状の服装とし、従来よりの在校生に青年訓練所生徒
を加え、軍隊そのままの実技訓練を行い、冬の寒さ厳しい時間
帯の夜間演習を、夏の暑さ酷しい真昼に耐熱行軍を行ったり、郷

土農村の中堅人物養成の機関として誕生した。学園が一ぺんに兵営化していったのであった。

言うまでもなく純粋な農村地帯であるため、学科の中では農業科に重点を置き、講師は邑久高等小学校の農業科担任教員に加えて邑久郡農会の技手に兼任を乞い、更に各地の精農家をも招いて（農閑期）その教授を乞うた。また、家庭実習地の設置を義務づけ、農業担当教師が家庭を巡回して実地指導に当たった。

その他の教科として、漢文漢詩は地元尾張の江川環桑先生に、公民科は宇垣大将の令弟東須恵の林甚八先生に、また科外教養として地元尾張の川柳家野崎不天坊先生に川柳の実技指導を、また時には琵琶の弾き語りを聴いたり、また自動ピアノでベートーベンの月光の曲を聞かせたり、希望者には茶花道の課外指導も行った。

更に、平沼男爵を全国組織の会長にいただく修養団支部が県にあり、町内にも有志の会員が相当あって、時々県支部の研修会もあり、郡内でも可成りその活動が活発であり、校内でも有志の会員の部があった。

また自治会活動の「自研会」があって、自研奮闘をモットーに自治修養活動が割と活発であった。その機関雑誌として「奮闘」を年数回発行して来た。年一、二回はその総会に地元の奇

術師「久山氏」を招いて余興をしたりした。

なお毎年卒業旅行として、京都見物、伊勢参宮旅行を、各教師交代で引率した。

あるいは県畜産試験場や土田の園芸試験場で「果樹」の剪定整枝の実技指導（講習会）へ参加させたり、課外実習をかねていた。

また課外学習として、「書道独習」東京の杉本華桑の「書海の人」会員もかなりあり、熱心に書道を学習して行く部もあった。

戦後の教育改革と邑久中学校の誕生



上野 進

- ・ 大正九年（一九二〇）生まれ
- ・ 北島
- ・ 元邑久中学校長
- ・ 元邑久町教育長

昭和二十年八月、終戦によってわが国は連合国の占領下におかれ、二十七年平和条約の成立による独立までは、国政はすべて占領行政のもとで行われた。この間、各分野にわたって改革の実施が要請されたが、教育改革はその中でもとくに重要なも

ののひとつであった。この教育改革は教育の制度、内容等教育に関する全分野にわたって行われたが、そのうち多くの人々の注目を集めたのが六・三・三・四制による学校制度の改革であった。それは明治五年の学制施行公布以来の大改革であった。

この改革によって義務教育の年限は九ヶ年に延長され、教育の機会均等、男女平等、共学の原則にたつて単線型の教育体系となった。六・三制の施行により新制中学校の開設については全国的に多くの問題があった。当時の劣悪な経済情勢では三年制の中学校をただちに創設することは困難であり、年数をかけて徐々に行おうという意見も強くあったが、六・三制の出發を昭和二十二年春とするという方針は総司令部の強い意見であり、実施を強行することになったのである。小学校と異なり、新制中学校は母体となる学校がなく、しかも独立校舎をもつことを建て前とされていたので、施設整備は最大の隘路^{あいち}であった。発足当初、どうにか転用により独立校舎をもちえたのは全国的にわずか十五%にすぎず、いわゆる空地での青空教室や、講堂や廊下を仕切つての間仕切り教室、また生徒を午前、午後の組に分けての二部或は三部授業等を行つたりで不正常授業はいたるところで見られていた。幸い、わが邑久中学校では県下希にみる三年制の邑久高等小学校（戦時中国国民学校令の施行により、終戦時まで第一邑久国民学校と呼称していた）、という母体をもつ

ており、さらに邑久土曜学校、邑久農学校の施設も同一敷地内に保有されていたので、校舎、設備の面では他に比べ極めて恵まれた状態にあった。然しながら年を追うにつれ生徒数は年々増加し、爾後^{じこ}毎年のように校舎の増築が行われ、管理当局のご苦労は並大抵ではなかつたらうと推察された。

こうした背景の中で、昭和二十二年四月一日新制邑久中学校は現在の町立中央公民館の位置に誕生した。校名は「邑久、福田、今城、豊原、本庄、長浜、玉津、笠加村学校組合立邑久中学校（略称、邑久村外七ヶ村学校組合立邑久中学校）」であった。私は昭和二十一年復員、新制中学発足と同時に四月一日付で邑久中学校に赴任した。五月二十八日に開校式が行われた。

開校式当時の生徒数は七四六名（男五三四、女二二二名）一六学級の編成であった。一年生は各小学校卒の新生入生、二、三年生は旧第一邑久国民小学校と邑久農学校の生徒達であった。校長は長浜の小林薫先生で校長以下教職員二四名での船出であった。学校管理村長は笠加の赤木朝志氏で各村から選出された組合議員さんで学校予算の審議等行われていた。

小林校長は謹厳実直という言葉びつたりの人格者で県視学等もなさつてきて、教育行政にも明るく県下に名の知れた名校長だった。職員は旧邑久高等小学校および邑久農学校の職員、それに我々のように新制中学校発足によって転入、新入した者達

の混成部隊であった。「創業は易く守成は難し」という言葉があるが、当時の管理職の物心両面にわたる創業のご苦労は大変だったろうと推察される。小林校長の卓越した指導力と統率力で爾後新制邑久中学校の基礎づくりが進められてきたのである。

次に、制度改革と並んでの重大な改革は教育内容の改革だった。昭和二十年九月、文部省は「新日本建設の基本方針」を示し、極端な国家主義、軍国主義を廃し民主的、文化的国家建設の目的で各種指令を発し、その中で修身、地理、歴史の授業は停止された。そしてこれまでの国定教科書制度の再検討も行われ、教科書は民間で編集し、文部省がこれを検定する制度に順次移行する方法がとられた。当時の教育現場では、具体的に何をどう教えるかについて五里霧中の状態であった。二十二年春に出された学習指導要領がいちおうの基準となったが、とくに新しい科目として登場した社会科や家庭科、自由研究などは不安が多かった。私は小林校長にお願いし、二十二年秋東京で行われた初の社会科研究大会に出席させてもらい、おぼろげながらその全容を掴みとることができた。早朝重い米袋を肩にして出発、岡山から東京まで十数時間、列車の通路に立ちこぼうで、東京に着いたのは日暮れ時であった。

次に学習指導の方法についても、従来の注入主義を改め、生徒の自主的活動を進めるための討議法が奨励され、また生活の

中の問題をとらえ、経験をもとにした単元学習なるものが提唱されていた。旧邑久中学校の校門を入ると校舎正面に「今日の問題は、解決の方法は」という大看板が掲げられていたが、これは、こうした学習指導の基本理念であった問題解決学習のあり方を端的に示したものであった。

戦後のこうした混迷の中で、我々職員は、「教育の力で日本の再建を」を合言葉に、夜の更けるのを忘れて教育のあり方を議論し、教材の単元構成や資料づくりに忙殺された。そうした時期、文部省から新教育の実験学校に指定され研究実践にいつそうのほずみがかかっていた。当時邑久中学校が提灯学校という異名を頂戴していたようである。帰宅は夜の十時から十二時頃だったが、若かりし頃の教育的情熱と責任感から別にそれが苦しいとも思われなかった。当時県教委では、教育実践のすぐれた中学校として「西の味野に東の邑久中」といわれていたようである。生徒も活気をもってよく頑張っていた。今にして中学創業時代に想いをいたす時、苦楽を共にして頑張った同僚や生徒の面々、共に奮もてを擔かぎ植樹作業や校地整理に汗を流したPTAの方々等の面影が顔前に彷彿と蘇よみがえり感慨ひとしおである。

その後時移り、世変り校舎の老朽化が進み昭和三十八年校地北寄りに鉄筋校舎が建設され（現在の郷土資料館）校舎の全面

改築が行われたが、なにぶん限られた敷地のこととて運動場も狭隘、木造校舎の老朽化も進み、何とか新しい地に学校移転という話がちあがってきた。なお町内今一つの裳掛中学校も生徒数が減少傾向で、かつ校舎も老朽化していたので両校を統合し、新しい地に統合中学を建設しようという気運が醸成し、去る五十五年、現在の統合邑久中学校が創設されたのである。

これまでの「教育尊重」の邑久の風土に感謝し邑久中学校並びに町内教育の益々の進展を祈念して筆をおく。



統合前の邑久中学校校舎

邑久高女体操

若 林 房 子



- ・ 大正十三年（一九二四）生まれ
- ・ 大 富
- ・ 元邑久高教諭
- ・ 箏曲三絃教授

緑の木々にかこまれたピンク色の校舎、その校庭にはたくさん桜が美しく咲き前庭の大きな「ねむの木」がたくさんかわいらしい花をつけるころになると、運動場のまわりのクローバが深々とした緑のジュートンをつくり、クラブの練習で疲れた体を休ましてくれました。そして秋の大会を前にして一日の練習を終え、お宮の馬場の松並木に立ち（現在は運動場になっている）美しい夕焼け空を眺めながらその日の練習を省み。また冷たい冬の朝、平均台の霜を払っての早朝練習もしました。（当時体育館がなく練習は屋外でした）これが昭和十二年、十三年頃の邑久高女の体育部誕生のころの様子です。

私が邑久高女に入学した当時の体育担当の小坂先生が岡山県で、はじめて体操競技をとりいれて熱心にご指導なさっていた時で、私も誘われて体育部に入りいつのまにか体操競技のとり

こになり、毎日夕方おそくまで練習しました。

夏休みなど毎日四、五日の休みしかない学生生活でした。また、現在の体育館の北側に礼法室（お茶室と畳敷の大広間）があり、きびしいクラブ練習のかたわら、お茶、お花のお稽古にも精だしてすごしました。

競技内容については、当時は現在のようにテレビで見ることもなく八咫映画を参考にしたと思う。でも外国の女子選手のフィルムは、教育大学の本間先生がわざわざお持ちになっただけで、新しい技をあみだすことはとても大変なことでした。夜、夢にみた技がとてすばらしいので次の日の練習で実行しようとして、平行棒から落ちたり、平均台で足をすべらせて落ちたり、それが幻の技でどんなに練習しても出来ないことがわかり、なんどがっかりしたことか。そうかと思えばふとしたはずみで思いがけない技が出来て、鬼の首でもとった思いで、秋の明治神宮大会（現在の国民体育大会）に自由問題に組み入れて発表しました。

昭和十四年の神宮大会に県代表として邑久より宗時、若林が出場。全国第五位、翌十五年神宮大会は若林、入江、岡崎、波多野、波多野の五名が出場。若林が個人総合第二位。翌十六年も同じ五名が出場。岡崎三位、入江四位、若林六位、翌十七年は邑久高女より十名参加し、岡崎一位、入江二位、若林四位、酒

井八位、水野十位と全国大会で上位を独占し体操邑久の基礎をつくりました。

その後、太平洋戦争が激しくなり、学校の運動場も大豆や薩摩芋の畠になり、生徒は学徒動員で乃木服の邑久工場で軍服の縫製に、また西大寺の鐘ヶ淵紡績で機織り、また男子生徒にまじって片上の煉瓦工場で煉瓦うちの作業に従事し下級生は亀ヶ原や舟原で開拓作業に汗を流しました。もとより体操の練習もできなくなりました。そして昭和二十年終戦と同時に倉庫で埃まみれになっていた体操器具をとりだし部員をあつめて練習を開始しました。

昭和二十一年第一回国体で岡崎一位、若林二位。

第二回国体、女子中等団体邑久高女一位、個人岡本一位、金



昭.27 ヘルシンキオリンピックをめざしての強化練習（若林）

居二位、吉田五位。

一般女子団体邑久クラブ一位、個人若林三位、岡本四位。

団体徒手体操、邑久高女三位。

第三回国体、女子中等団体邑久高女二位、個人岡本二位、金居三位、佐藤四位。

団体徒手体操、邑久高女五位、一般女子は不参加。

第四回国体、高校女子団体一位、個人岡本三位、佐藤四位、大原五位。

一般女子団体邑久クラブ一位、個人若林一位、金居三位、岡崎五位。

ヘルシンキオリンピック選手候補に五名推薦され、

第一次予選、岡崎二位、金居三位、若林四位、岡本五位、佐藤十位。

第二次予選、若林一位、岡崎三位、佐藤四位。

第五回国体、高校女子団体一位、個人佐藤一位。

一般女子団体邑久クラブ一位、個人若林一位。

この年、国体の閉会式で邑久クラブが全国体育優良団体として文部大臣表彰をうけた。

第六回国体、一般女子団体一位、個人若林一位、佐藤二位。

昭和二十七年一月ヘルシンキオリンピックの女子体操候補選手の強化合宿が邑久校でおこなわれ四名参加して頑張りました

が国の予算の関係で女子体操は参加できなく、オリンピック出場は夢ときえさりました。

思い出すままに記してみましたが、器械にしても演技内容に於ても、ともすればおくれそうになり、そのたびに、くじけそうになり、あせる私達を励ましご指導下さいました小坂先生のご苦勞は大変なことだったと思います。そしてご父兄の皆様、後援会の方々のお力添えがあったからこそとありがたく思っております。そして十余年の努力のかいあって、昭和二十五年秋の国体に於てクラブが表彰され、高校女子団体、個人、一般女子団体、個人と、生徒と共に全種目優勝できたときの喜びは私にとって一生忘れられない思い出でございます。



昭.25 高校の部、一般の部で団体優勝

学校での服装や弁当



今 吉 功

- ・ 大正七年（一九一八）生まれ
- ・ 平成四年十月没
- ・ 福 谷
- ・ 元裳掛中学校長

私は大正七年三月十五日に生まれ、大正十三年四月一日に裳掛尋常高等小学校へ入学した者で、その当時の学校での服装や弁当について記憶をたどり書いてみようと思う。

小学校の尋常科に入学した時には、まだ着物を着て学校へ通学していた。着物といっても緋の着物か、せるの着物であった。三尺帯といって黒の帯をして、ふだんは前だれといって長方形の布にひもをつけたものを前にたらし通っていた。

一月一日や、第一代の神武天皇が橿原の宮で即位せられて、日本では初めての天皇が誕生したという日、これを紀元節といっていた（今の建国記念の日）。また、天皇の誕生日、これを天長節（今の天皇誕生日）といっていた。このような日本の国にあってだじな日を当時は三大節といっていた（後に明治節が加わり四大節になった）。その三大節には服装を正して袴をはいて

式に臨んだ。パンツなんかは無かった。後に服を着るようになってから使用したように思われる。だから今のように、跳んだりはねたりする体操ではなかった。低学年では遊戯をするか、簡単な競走遊戯のようなものだったことを思い出す。着物の下には、母が手縫いしてくれた木綿のじゅばんを着ていた。冬になると、上着には、やはり母が手縫いした木綿（かねかくといって裏にネルのついたもの）のじゅばんに、下半身には木綿（かねかく）のももひきをはいて学校へ行っていた。今のような毛糸のセーターやズボン下は無かった。でも寒かったという印象は残っていない。やはり元氣いっぱいだったせいであろう。

靴下などもなかった。冬になると母の手製のたびをはいていた。そして、ふだんは竹の皮で作り、はなおは黒の布を使ったぞうりをはいて通った。何事かの時には畳表で作り、はなおは白の布を使ったぞうりをはいた。小学校二年生の学芸会（学習発表会）で独唱に出してもらった。たしか曾我兄弟の歌のようにおぼえている。どんな歌だったか何も記憶がない。その時畳表で作ったぞうりをだいじそうに左手にもって歌って、後で先生から、そんなものぬいで置いておけばよいのにといわれたことを思い出す。しかし、置いておいてなくなったら一大事のように思ったのであろう。雨の日は、油紙で作った雨傘をさし、下駄をはいて通った。私は通学路が約一里（四km）あって、その

半分が山道だった。峠を越さなければならぬ。下駄をはいて山道はなかなかたいへんだった。それに冬に雪でも降って道路に積もると何回となくころんだ。一番急な所では、はうようにして登って行ったことを思い出す。何回もころんでいるとはなおが切れてしまう。途中ではなおをたてる材料を持っていないので、下駄を片手にぶらさげてはだして通った。学生帽子は、一年生の時から着用していた。また、布製の黒いかばんを肩に掛けて、その中へ勉強道具を入れて通学した。

初めて洋服（学生服）

を着たのは、小学校三年生の紀元節の日のようにおぼえている。当時、あまり学生服は着ていなかった。得意になって式に臨もうとしたが、あいにくその日は雪が降っていた。雪の日に新しい洋服を着るのはおかしいなと思ったが、式があるのだから思いきって着て、山を越そう



小学校3年生の時 左から2番目

としたら何回となくころんだ。学生服を着ても雨か雪の日は下駄をはいて行った。ゴム靴になったのは、ずっと後のことだと思う。紀元節の日に初めて学生服を着たが、その後もふだんは着物を着て通学し、何事かある時だけ学生服を着るようになっていた。毎日学生服を着るようになったのは、四年生以後のように思われる。

さて、学校での弁当について書こうと思う。主食はご飯で、家の者は米に麦を混ぜたものを食べていたが、学校へ行く子どもには米の多いところをすくって入れてくれた。だから弁当の中へは麦飯がぼつぼつ入っている有様であった。そのご飯をアルミニウムの弁当がんに詰めて、おかずは質素で赤く漬けた梅干しを一個ずつ入れてくれた。たくあんは食べる時にはおいしいのだが、机の中へ入れておくと鼻をつくような香がするので、遠慮して持って行かなかった。アルミニウムの弁当がんに梅干しの酸で穴があくので、後には柳行李に変わった。一年中梅干しの弁当だといってもよいくらいだった。

時にご飯へ赤いあんこをまぶったおはぎや、きなこをまぶったおはぎを持って行った。このようなおはぎの日には、弁当の時間が待ち遠しい。また、時にさつまいもをふかしたのを持って行った日もあった。お正月にお餅をつくとやわらかいあんこ餅を持って行ったり、固くなると砂糖醤油で焼いて持って

行く。この味が何とも言いようのないくらいおいしかった。早く弁当の時間がこないかなあと、その時間を待ったものである。

このような弁当もみんなが持って行くのでなく、喫飯の時間と違って、家に食べに帰る者もいた。だから喫飯の時間は一時間は取っておったように思う。給食になるまでは、大抵の学校で喫飯の時間を一時間取っていた。食べるものも今のようにならぬ養のことも考えず質素なものであった。

時代の流れに従って衣、食、住が文化的になり、生活にゆとりができてきたように思われる。文化が進み、心身に適する衣、食、住に変わってきたからこそ、日本も高齢化社会が実現したものと思われる。しかし、昔のことを思い出し、自分の衣、食、住について反省してみることもないだろうか。



裳掛高等学校2年 優勝旗を持っているのが今吉さん
巨久郡北部五校（裳掛・鶴山・国府・美和・行幸）
連合運動会に優勝した時

豊原小学校の思い出



岩 井 敏 男

・ 大正六年（一九一七）生まれ
・ 大窪
・ 元山陽電研（株）常務取締役

豊原小学校は長沼・仁生田の部落が学区外となり、さらに年々児童数が少なくなつて、ついに昭和四十年に廃校になり、今では敷地も校舎も畠山製菓（株）に売却され、当時の面影はなく、わずかに講堂の建物を改造されたのが残されています。

一、学校の近辺

私は大正十二年（一九二三年）に当時の豊原尋常小学校に入りました。

遠い昔のことですが、子供の目で見えた当時の学校付近の景色といえば、そこは千町川（大川とよんだ）に架かった土橋を渡ったところに、おじいさんとおばあさんとで学用品を売る店が道端にあり、校門の前には村役場があり、少し南に行くと駐在所があり、この前を通る時は何となく怖くてわきみもしないで通ったものでした。

校門は両側に太い四角な柱が建っていて、それには豊原尋常小学校と墨でかかれた分厚い板が掛けてありました。

二、校舎

校門の付近と校舎の北側には丈の低い杉の生け垣があったように思っています。

校舎は木造平屋建で寄せ棟の屋根に日本瓦が葺いてあり、外壁は鍍張下見板で当時はどこの学校も同じような造りでした。

校門をくぐると、西から順に一年から四年までの教室が一棟になっており渡り廊下をはさんで五・六年の教室に続き、これが一棟になっていました。

渡り廊下は運動場から裏庭に通り抜けができ、下駄箱や体操用具を置く場所でもありました。

後年、この東に講堂が建てられたが、この建物だけが現存しています。

二年と三年の教室の間に職員室があり、その南側に白漆喰しろしっくいの玄関ポーチが張り出し屋根の上には大きな鬼瓦が上がっていました。

授業時間の合図をする鐘も玄関付近にあり、先生がひもを引いて鳴らしておられた、そしてここは卒業の記念写真を撮るところでもありました。

教室の中は羽目板張りになっており上は真壁の漆喰塗りで、

天井板は掃除当番の子がふざけてぞうきんを投げつけるので、五・六年の教室には染みが多かった。

運動場は私の在校中二度にわたって拡張され、これまでは前のたんぼにボールが落ちる度にお百姓のおじさんに叱られないかとびくびくしていたがその心配もなくなり、また二百mのトラックコースも取れて先生も喜んでおられたのを思い出します。

三、学校生活

幼稚園は一年生の授業が終わった後の教室を使っていたので私が幼稚園に登校する時は決まって下校する一年生とで会う、一人意地悪い子がいて追いかけるので私は憂鬱だった。

始めのころは、きびがら細工や竹ひご細工など新しいことで興味があった。

一年生の二学期ごろから筆を使っての習字が始まり、机の右側に小さい蓋があり開けるとそこが硯箱で、この蓋を机の穴に差し込んで手本立てにするのがおもしろかった。(硯入れの中は期末毎にぞうきんで拭くが、いくら拭いても真っ黒だった)

手習いの草紙は母が作ってくれた。これは半紙とその大きさに切った新聞紙を取り合わせ上の方を棧竹で綴じたもので机の脇にかけておき新学期毎に取り替えていました。

三年生にもなると野外教育が始まり、前の山に行き桜の木に登って花を取り理科の講義を聞いたり、写生などもした。体操



豊原小学校閉校時
大窪 大森志賀夫氏所蔵

の時間にはたびたび砥

ちたものはなかった。

石城跡に登り、時には大ケ島の旧道（急道と覚えていた）を競走で登ったりしました。

冬の教室には暖房はなかったが廊下に学年毎の弁当温めができた。金網棚の上に弁当箱を並べ下に炭火鉢を置く仕掛けで、登校順に入れるから一学年四十人ほどの後半になると上の方にわりほとんど暖まらない。小使いさんが入れた炭火をかきあたり火鉢の位置を動かしたり、中には人の弁当と場所を入れ換える悪童もいたように思います。

子供の遊びも年と共に変わりそのころには杉鉄砲が流行し、学校の裏庭に植えてある杉の実を取ってきて、それを詰めてパチパチ撃ち合った。先生にとめ

お昼が来て扉を開けると沢庵や醤油の匂いがプンとする。ひっくり返った弁当包みには醤油の染みもついている。自分の番を待ちながらそれを取り出す手を見ると、あかぎれの手や霜焼けではちきれそうな手など、今でも懐かしく思い出されます。

られたがまたしても誰かが始めポケットの服装検査を受けて取り上げられた子もいました。

入学したころの女子はみんな着物で前掛けをし下駄を履いていました。男子は

他にも先生に止められながら冬の北風が吹くころになると、かすみ網を持って来て帰り道の土手下で上級生があぜに網を張り下級生はかばんを持たされたうえ、アゼ（小鳥の俗名）追いの勢子に回された。冬になって冷え込んだ朝は千町川の上に架かった大用水の樋から、長いつららが下がる日が多くなる、朝日にキラキラ輝いて美しい、勇敢な子が樋をつたって取りに行く、さながらサーカスを見ているようでハラハラするが川に落

二・三人が服を着ていたが大抵は着物で藁草履ばかりでした。それが卒業するころになると女子は冬だけが着物になり男子は着物をきた



小学校3年生当時
仁生田 太田保氏所蔵

子は珍しくなった。履物もゴム草履や麻裏に変わって行き、ものの道理や分別が少しずつわかるように育っていきました。六十年を越える昔のことで記憶違いもあると思いますのでお許しください。

明德小学校とその思い出



木村安雄

- ・ 昭和五年（一九三〇）生まれ
- ・ 本庄
- ・ 元牛窓北小学校校長
- ・ 神戸学院大学明德荘主事

四月二十八日（日）晴、明德荘主事室にて宿直をした。学生が来たからである。何十年かぶりであった。

五時起床、窓のカーテンをあけた。そこから見える景色のあまりのすばらしさに感動した。運動場の葉桜の間から、尾ノ村、藤峠の家々が見え、そして、その向こうに土佐の山、美和の桂山、備前の峰々が美しい稜線を描いて緑や紫に見える。東に目を移すと庄田、一本松方面の山々が形や色彩に変化をみせている。真赤な太陽が昇ってくる。もううぐいすや小鳥たちの鳴き

声も聞えている。

幾度か有名な高原のキャンプ地で朝を迎えたが、ここ明德の、この美しい朝はこれらに匹敵するようにさえ思えた。

私は、この地に明德小学校を置いた理由を定かには知らないが、閑静で風光のすぐれたこの高台の地が、教育環境として最高の地であることを実感し、この地を選んだ先人達の卓見に敬意を捧げたいと思った。

現在は神戸学院大学に管理が移って、若者の教育施設として生き続けている。そして、統合前の校舎、校地も大体そのままに残っている。しかし、私達が新校舎と行って、式典や、学芸会などに使っていた校舎だけは、老朽のため今はない。

運動場は、戦後、児童数の増加や、体育に球技が多く取り入れられた関係で、PTAの血のにじむような奉仕によって倍増されたと聞く。その時植えられた桜が大樹となって運動場の周囲を覆っている。四月九日の日記によれば、（火）晴、桜八分咲き、今が一番の見頃か。花見客、千客万来と書いている。この日町内の多くの方や、かつての校医さん、旧職員の方も見えて、花見を楽しまれた。

時には、若い卒業生の一団や、老人クラブの方々も見える。おらが母校の姿を……ということであろう。卒業生の心の古里として、いつまでもあるのであろう。

先日、邑久小で、明德小学校の沿革誌を閲覧させてもらった。明德小の歴史を見ておきたいと思っただからである。

明治三十年九月一日、元本村大字下山田ニ明治八年設立の啓心小学校ト大字本庄ニ明治九年設立ノ衣笠小学校トアリシヲ明治十八年ニ至リ両校名ヲ明德尋常小学校ト改称シ尚両校ヲ存立セシメシガ明治三十年五月校舍ヲ大字本庄尾ノ村ニ新築ノ工ヲ起シ九月一日落成式ヲ挙ゲ本校ヲコ、ニ移ス 本日ヲ本校創立記念日ト定ム

大正五年十月二十六日邑久高等小学校及同校組合尋常小学校九校連合運動会ヲ福田村豆田河原ニ举行ス本校モ 五、六学年児童参加ス尋常校八校、駆足選手競走ニ於テ第一着トナリ優勝旗ヲ受ク、選手氏名 武久勝、木村源次、宗国碓、石黒正雄、木村照雄

昭和十六年四月四日、明德国民学校ト改称ス。

昭和二十七年十一月十八日、全校児童に対し完全給食開始す。

昭和二十九年二月十三日校舍新築完成し給食室を建築す。

昭和四十六年三月十三日 明德校舍卒業式

同 二十五日 閉校式

同 三十一日 明德校舎の歴史を閉じる。

(沿革誌 抜粋)

六月の梅雨の中を「体験集」の世話係の方が来られて、小学

校時代の思い出などを書くよう依頼を受けた。しかし、戦時下の生活であり、また平凡な小学校の活動でこれといって書くところが無い。それで、遊び中心の小学校時代の思い出のみ書かせてもらうことにした。

一、遊びについて

(1) ブチ独楽こま

当時の校長先生は、原校長で、子供心にもりっぱな先生と映っていた。或る日、その校長からであったと思っっているが、ブチ独楽の製作を教わった。来る日も、来る日も、また……。学校でも家でも、この面白さに夢中になった。この独楽は、直径約五糎くらい。長さ七〜八糎くらいの檜の木で作る。心棒もなにも無い。下を削っただけのもので、細い竹の棒の先に布をつけて、布というより紐というほうが適切かも知れないが、それで独楽を打って回す。上手になれば、何時間でも体力の続く限り回し続けられる。汗を流して、たたいて、たたいて夢中になった。日が暮れるのも忘れてやった。

また、独楽を作ることにも実に楽しかった。還暦を過ぎた今でも、檜の木の適当な太さの物を見つけると、ブチ独楽を想う。このおかげで、父親に叱られながらも大工道具の使い方や、刃物の研ぎ方を自然に身につけていた。

(2) グライダー

○先生という若い熱心な先生が、グライダーを担任の児童に教えられた。それがうらやましくて、教室の窓にはい上がって見たりしていた。グライダーが完成した。

先生のはドイツ型というスマートな機体、子供達のはヒゴを使った小さなものであったが、上の運動場から飛ばすのを見た。

先生のは一直線に風を切って飛び、運動場の横を軽々と越えていく。子供達はそれを追って取りに行く。大へん楽しく面白い経験であった。上昇気流とか、ストールという言葉や、どんな条件の時発生するかなど、科学的なことをその時知った。その頃自分達の先生へねだりにねだってやっと製作にとりかかれた。ぶち独楽からグライダーへといった日が続くことになる。

私は家の空き部屋を一室使用許可を取りつけて、グライダー製作にとりつかれた。後日、豆田河原の大会で優勝して当時の金で賞金一円をもらうことになる。

私は教職についたが、定年前は牛窓北小に在職した。クラブ活動のグライダー作りの時はよく参観した。また、自分でも作って見せてやったりもした。今でもりっぱなグライダーが作れる。子供の頃はなんでもいいから熱中して自分のものにしてあげば意外な所で役に立つものである。

二、その他

水汲み

六年生になると、男子は全校児童の飲み水を下の井戸から汲む、水汲当番をする。奉仕作業というところである。女の子はそれをお茶にたく。朝早く登校して行うのであるが、水桶にいっぱい入れ杉丸太の担い棒で急な坂道を運ぶ作業は、六年の子にとっては大へんな重労働であった。しかし、六年になり最高学年の誇りや、責任を果す喜びなど持っていたのか、その日が来るのが楽しみで、待ち遠しい気持ちであった。

まだまだ楽しい、そして面白かった思い出はつきない。

地藏院へ甘茶を飲みに行ったこと。裁縫室で義士祭に先生方から義士伝の講釈を聞いたこと。私達の修学旅行が戦前の最後の修学旅行になったこと等々いくらでもある。

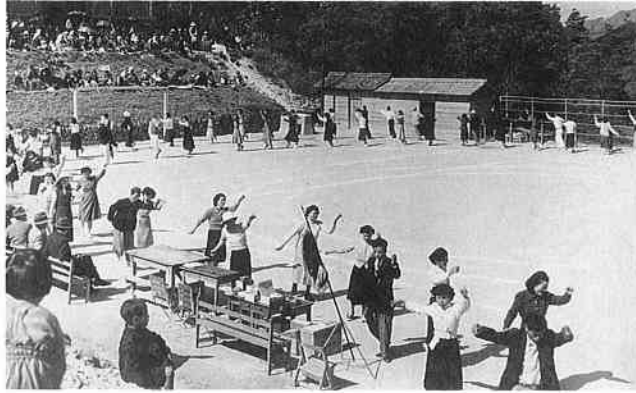
喜びも悲しみも幾年月というが、喜びのみ残って悲しかったことは静かに消えて行ったようである。

沿革誌の中にもあったが、昔から対外試合が大へん強かったようである。私達の頃にも伝統として生きており、緑の地に赤線の鉢巻を大へん誇りにしたものである。

また、古武博士、夢二等、全国的な偉人も輩出している。

我田引水という言葉のイメージはよくないが、お国自慢といえば、許してもらえることが多い。昭和四十六年邑久中に赴任した当時、本庄地区の子供達は優秀で、性格の良い生徒が多いと聞かされたものである。

小さな小学校ではあったが、幾多の卒業生は輝かしい伝統と美しい人情、そして、すばらしい教育環境に育まれて、それぞれがりっぱな社会人となって人々のために貢献しているのである。これから育ち行く青少年にも期待したい。そして、平和な日々が続くことを祈るものである。



▲ 運動会風景

▼ 優勝チーム



福田小学校と当時の体験



福 間 六 合 丸

- ・ 大正八年（一九一九）生まれ
- ・ 福 元
- ・ 元牛窓中学校長

○福田小学校の沿革

それより昔は知らないが邑久郡史によると、天正十九年（約四〇〇年前）長船刀剣の里・千軒を壊滅し邑久郡一円をひとのみにした吉井川の大洪水をはじめとして、この地方は今日まで十年に一度、時には年に数回もの洪水に見舞われていた。護岸のために堤に竹藪を作ったり、大土手を築いたりして人々は懸命に治水につとめたが、それでも洪水から逃れることはできなかった。

旧福田村は西に吉井川・東に千田川・香登川と津田永忠の手になる大用水（約三〇〇年前）に囲まれた約五十町歩の南北に細長い村で、北から八丁・豆田・四軒家・福元・百田・宗三・福中の部落からなっている。（図一）

(図1)



明治二十四年当時の村長・岡

勝治は村の中程の福元部落の大土手にある岩丘の権現様の藪の南側に高さ一メートル程の敷地を造り、そこに平家の校舎を立て洪水に備えた。その後のたびたびの大水にも学校が水害に遭った話は知らない。

学校の沿革については幸いにも、今の邑久小学校に三冊の沿革誌(写真1)が完全に保存されている。それによると創立は明治二十三年四月一日で

(写真1)

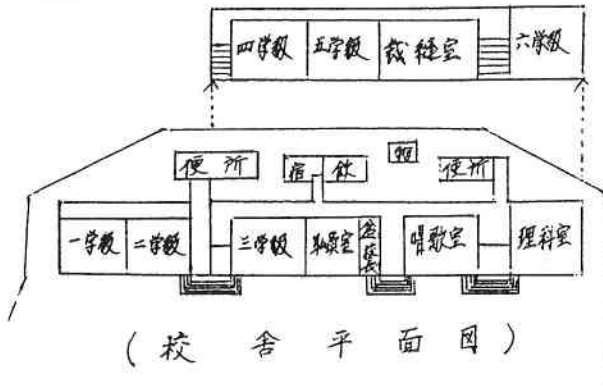


それまでは百田・宗三・福中は今城村大富・福山と組合して尋常星川小学校を設立し、豆田は笠加村笠加・箕輪・北池と組合して尋常淳風小学校を設立していたが、明治二十三年四月一日より福田村で一校を設立し、尋常福田小学校とした。後者は前記の土地に明治二十四年十月四日から翌五年三月十二日にかけて立てられた。

明治三十二年五月に裁縫専修科を併設、明治三十五年四月より福田女学校と改称し、修身・算術・国語・裁縫の四科目を科したが、村財政の逼迫により数年にして閉校されている。

小学校は昭和三年三月二階建ての新校舎に改築され(図2・写真2)、昭和四十四年四月邑久小学校に統合されるまでの七八年間、尋常福田小学校・福田尋常小学校・福田国民学校・福田小学校と校名は変わったが、常に福田村の子女の教育の中心となっていた。

(図2)



(写真2)



○学校時代の体験

奇しくも、明治十八年生まれの父は尋常福田小学校の第一期生として四年間（当時は義務教育四年）そして私は大正十四年四月から昭和六年三月までの六年間ちょうど校舎が改築される時に在学していた。

小学校時代からの思い出は一・二年ころまでは殆どないが、妙に担任の先生ははっきり記憶に残っている。一年は優しい鳥山淑子先生・二年は朗らかで目の大きな藤原愷野先生・三年は話のすばらしくうまい山本武先生・四年は外人のような片岡清先生・五年は謹厳な石井実先生・六年は音楽の上手な眼鏡をかけた尾崎三郎先生であった。

三年の時校舎の改築にぶちあたったが一年生は岡文治郎さん・二年生は岡栄一さんの養蚕室・三年生四年生は干田川の水門のそばの村役場の二階・五年生六年生は旧校舎が代理校舎となった。三年の私たちの教室は役場の二階であったが、話のうまい担任の山本先生に何かというとみんなでねだって話ばかりしてもらい場所が変わり珍しかったこともあって勉強はろくにしな

かった。

四年になると男子は柔道か剣道を週に一時間することになっていた。柔道は福元の赤木泰先生・剣道は百田の木村晶先生で教室の中の机や腰かけを廊下に出してその中で習った。こうして私の六十年にわたる剣道歴はこの時から始まった。

当時百田には有名な朝倉道場があり一般の剣道も盛んで、子供の私も時々かよって大人に混じって厳しい稽古を受けたものである。

六年の時、週に一時間二階の裁縫室で校長先生の合同修身があった。あるとき玄関にかけてある横額を読んでくるように言われた私は「人愛天敬」の四字を覚えて上り、黒板に縦書きに「人愛天敬」と書いた。校長先生はにこにこしながら、これは君子の教えで、「天を敬い人を愛する心を持たねばならない」という意味で、正しくは「敬天愛人」と右から読むのだと諭された。当時教科書で横書きのものは「算数・理科・唱歌」の本ぐらいで、それらは皆左から右に読んでいたから当然額も左から読むものと思っただけである。以来横額を見る度にこのことが思い出され横額は右からと肝に銘じたことであった。

当時は小学校がすむと邑久高等小学校へすすむことが当たり前で、岡山の中学校や女学校へ進学するものは極めてまれであったから入学試験のことなどまったく考えず勉強は実にのんび

り楽しくやっていった。宿題もほとんどなかったから家に帰ると「かばん」を投げ出して外で暗くなるまで飛び廻って遊んでいた。学校へ行く楽しみは二つあった。

一つは他の部落の友達と遊べるのがいちばんの楽しみで、少々の風邪や、何かの都合で学校を休まねばならなかったりすると、泣けるほど辛かった。もう一つの楽しみは昼の弁当の時間である。特に冬になると弁当ぬくめが出されたが、昼前になると漬物やいろいろなおかずの匂いがプンプンして食欲をそそられみんなと食べる弁当時間が待ちどろしかったものである。中身は麦飯におかずは漬物かせいぜい昨夜の残り物か、めざし、時には餅のつけ焼きやふかしたさつまいもなどがあったが、なかみは何でも良かった。友達と分け合ったり、にぎやかに話しながら食べるのが何よりの楽しみであった。

村を流れる大小の川・たんぼ・大土手とそれに囲まれた二十町歩余の桑畑や松林は、格好の遊び場で、水遊び・魚取り・ホタル・バッタ・トンボ・鈴虫・松虫・せみ取りから桑の実取り・茸ひきなど、美しい水・きれいな空気と無数の魚や虫たちや草花の中にどっぷりとつかった暮らして、今の子供たちには想像もつかない世界であった。

村は当時米麦作りの他に年に四回（春・夏・秋・晩秋）蚕を飼っていた。蚕は母屋の中で畳を上げて棚を作り、それに飼う

ようにしていたから、春から秋にかけての半年間は蚕と牛と人間が同居するので家の中は蚕と牛の匂いでプンプンしていたものである。文字通り夜も昼も寝ずに働く親たちの中で子供も勉強どころではなかった。当時学校は忙しい田植えと、稲刈り時期には一週間ほどずつの農繁休暇があったから、麦はこび・田植え・桑摘み・稲はこび・稲株きりそれにズイ虫取りなど汗みどろ、泥まみれ、時には雨でずぶぬれになって農作業を手伝ったものである。「ようやくしてくれるのう。」といってもらえた時のほこらしさ幸福感は実に何とも言えなかった。いたずらをしたり、言いつけを聞かなかったり、兄弟げんかをしてしかられたことはたびたびあったが、清らかな大自然の中で家族と一緒に暮らすうちに、知らず知らずの間に親たちの後ろ姿から、働くことの大切さ、人としての生き方を学んでいたように思う。

ろくに食べるものもなく、着るものも質素で、家は小さく粗末で、生活は不自由ではあったが、本当に心豊かで幸福な時代であったことをしみじみと懐かしく思っている。

淳風小学校の思い出



原 田 定

- ・ 大正四年(一九一五)生まれ
- ・ 北池
- ・ 元伊里小学校校長

◎沿革について

文久二年遠近の子弟教育のため発足した淳風館にその源をもつ淳風小学校、明治四十四年十月、淳風館碑除幕式当日制定された校歌に「昔この地に開けてし、学びの園の名を受けて、淳風よきの美さへ今に伝ふこの垣内かきつ」淳風を「よきならわし」と読ませ「淳」とは「情のあついこと」「淳風」とは「人情の厚い風俗」などと記されています。さしずめ今の言葉をかりれば「福祉の心」とでもいうべき人として大切な心情を校名とした子弟教育の場としての淳風館が存在したことに、地区民として誇りをもつと同時に、先覚者の方々に深甚な敬意を表すものであります。

◎小学校教育への協力

私はこの小学校へ昭和二十年四月から十四年間勤務し、更に学区の北池の住人でもあります。今回の記述が淳風小学校についてのこととなると、それは「父母と先生の会」の会員みなさんと共の活動した当時が頭にうかんできます。この淳風小学校父母と先生の会は、組織の中で子どもたちのために、親たちが勉強し知恵をしぼって、子どものもよりよい成長に役立つ親になるうと子をもつ親の考え方、あり方を勉強する「場」なのだとの考えで運営されていました。従って会員たちは先生を交えて子どもの実態を、村の実態を、そして当然のことながら親の実情、家庭の実情をさらけだし話し合いが深められました。ところがこの話し合いが「きっかけ」となり、淳風小学校父母と先生の会は研修、実践の場として各部落毎に五つの部落会を組織し、これを中心として活動を推進していこうということで努力しておりました。

時、あたかも昭和二十八年当初、県教委からPTA研究の指定を受け、一層この考え方に拍車がかかることとなりました。父母と先生の会の活動の據点となる五つの部落会は、それぞれの特徴をもっていました。その持ち前の特色を発揮しながら話し合い(協議、懇談)を深め活動を展開していきました。その地区には風光明媚な峨城山観光地があり、五月五日を中心に繰り広げられる児童福祉週間中の諸行事も部落会が中心になり実

施するなど、地域の実状にも恵まれたところでありました。

部落会活動の資金について村全体が農家主体であることが幸いして、薬の提出をお願いするとか、山地の植林作業へ従事するとか、自分の地区の田植を終り他地区へ集団で出勤するなど、親が体で汗しての活動資金の獲得方法でありました。

資金活用面については、部落内の子どもの遊び場の充実とか、周囲の柵の設置などして子どもが思う存分に遊べるように設備してやるなど、また夏休みを利用しての子どもの楽しい屋島への一日旅行、連絡船の中での船員さんから救命胴衣のつけ方など教わるとか、また頭島、大多府などの海水浴場へ、クリスマス夜の夜五目飯の調理、会場の飾り付けなど、親と子が共に行ない、そこでのなごやかな会食。子どもと親たちの「きずな」は言わず語らずの内に固く結ばれていきました。

なお、このPTA研究は、活動の実際をスライドに収録し成果の発表を計画しておりましたので、当時のスライドの解説をみると、PTA会員の教育向上の一面としての部落研究会の一風景がありました。これは、親が子どもにもと思つて工夫を凝らして作製してやった体験の発表でありました。「みかん箱の本箱」(当時は木箱にみかんが入っていた)この木箱に古新聞を二重三重に糊付けし乾燥、カーテンをつけて若干美的にした物とか、「木箱を使つての机の作製」これも木箱を利用し、布を糊付

けし坐つた膝の一部を箱の中に入れて勉強する机など、これは今の親の方の感覚では思いもよらぬものでありますが、当時としては物不足の時でありよい思いつきであった。我が子のおかれています現状をじっくりと眺め、それを一歩でもよい方向へ改善していこうとする親の真剣な思いが感じられ頭が下る思いがしました。そして、このスライドのまとめの部分には、このよ
うな解説がなされていました。「このあどけない園児たちの顔を、けがれを知らぬ神のような純真な児童たちの顔を、あたたかきPTAの愛情あふるるその手を、あたかも春に先がけ咲く水仙の花の香りは、二百有余の子どもたちの上に漂っているの
であります。

”木枯らしを耐えてぞ清き水仙の香りもゆたかに父母と師の会“
この研究は昭和二十九年二月二十二日淳風小においてPTA
研究発表会を開催、昭和二十九年十一月三日県教育委員会から
本校にPTAの表彰、その後県文化センターにおいて前後二回、
天満屋葦川会館を会場としての発表会、なお、その他の小学校
PTAの多数の訪問を受け、発表後も本校父母と先生の会の会
員に多大のお世話になったことを感謝し、淳風小学校父母と先
生の会の思い出の記を終わりますが、当時のPTA会長は下笠加
の齊藤祐圓氏、小学校長は小田理一氏でありました。両氏に対
しはるかに敬意を表しこの項を終わります。

◎校舎移転について

国鉄赤穂線敷設に伴い淳風小学校舎の全面移転と一部校舎の新築工事が昭和三十四年八月から約五ヶ月間の予定で実施されました。その間の授業については各部落の公民館などを借り分散授業、午前、午後に分かれて二部授業の実施などが行なわれました。八月の夏休みを利用してPTAの協力を得て机、腰掛け、塗板など直接授業に必要な物件の移転、九月からの分散授業に遺憾なきを期し、教員についても、午後の分散授業の終了後淳風小に集合し、翌日の授業の打ち合わせを行なうなど移転工事に協力、十一月四日にはすべての工事が完了し、従前の授業に復帰しました。その後校庭周辺の植樹にPTAの部落会は大いに協力、旧校地にあった樹木の移転、地区内から植樹物件の集荷、移植などすべて完了しましたが唯一カ所移転、移植をまぬがれた箇所がありました。

その場所は赤穂線の西側、地下道にはいる階段の南寄り檜の木の本木立株になってはえているその株全体は移植されていません。昔のままです。今かりにその檜の木が口がきけるとすれば、笠加村役場、旧小学校、一戸建ての独立校舎のあった時代のことを物語ってくれると思います。さて今は、小学校は亘久小へ統合、村役場もなく跡地に淳風トレーニンングセンターが新築され笠加地区公民館、同コミュニティ協議会が笠加地区の據点と

して活動を続けております。



淳風小学校全景

邑久町人物列伝



古 武 彌 中

- ・ 大正四年（一九一五）生まれ
- ・ 本 庄
- ・ 元美和小学校長

邑久は早くから文化の発達した土地であり、それだけに多くの人材が輩出していた。人物列伝を書くとき多数になるが、私は古武弥四郎、正富汪洋、竹久夢二の三人について書くよう依頼されたので書き残すこととする。三人は共に明治生れで夢二が十七年、汪洋十四年、弥四郎十二年である。亡くなるのは若い者から順に夢二が昭和九年、汪洋四十二年、弥四郎四十三年であった。歴史は風化し、人物評伝は色々脚色されるものである。

夢二は私が、幼少の頃大阪へ父を訪ねて来た時に会ったのが最初で最後となった。いわゆる蒲柳はりやうの体質で岡山のたくましい農家のおじさんでないと子供心に感じた。そして五十歳で信州富士見高原療養所で生涯を閉じた。私が夢二についてもっと詳しく知ることが出来たのは戦後明德小学校へ赴任してからのことである。当時関西学院大学に藤木教授がおられ、中世史学が

専門で日本では夢二研究の第一人者であった。従兄弥正（弥四郎の三男）が学部長をしていた。夏休みを利用して夢二出身地調査研究を計画し弥正に相談したことから私が一週間宿舎をすることになり、次年度も同様毎日自転車を借りて先生のお供をし、庄田の朝日寺で過去帳を見せてもらい夢二の母の生家種草家を調べ、武久家を調べた上、横尾山静円寺本堂を調査して、毎夜調査結果について話し合っていた。結論を言えば画才は母系によるもので、詩の心ロマンは父から受けていることが実証された。少年の頃夢二はよく静円寺で遊んでいた。奉納されている絵馬を見ても画才があり、絵の好きだった夢二はこの様な大画面に力一杯画いてみたいと思ったことを書き残している。夢二の父の献句が墨あせて読みとりにくいが発見出来た。

本庄の小さな村を捨てて家田畑を売り、広大な北海道で暮らしてみたい、とよんでいる。後年佐井田の家をたまたみ九州へ移り行く気配が感じられる。夢二研究上注目すべき人物は夢二が学んだ邑久高等小学校長服部全三郎である。長男が西大寺市場町に在住していることを聞き出して訪ね、いろいろと話をきかせていただいた。皮肉なことに夢二の絵は一枚もその家には残っていないかった。最近全三郎の絵が、西大寺川口の池上家で発見され、西大寺市文化資料館に展示されたと新聞が報じている。記事によると夢二自身が、「最初に最後の絵の先生。」と言った

と書かれている。かつて岡大で美術史を研究していた学生が明德小学校に伝わる夢二の鉛筆画のスケッチは美術史上貴重な資料であるから見せてもらいたいと訪ねて来た。

私が「統合で今は邑久小学校へ移されている。」と答えたら、すぐに邑久小を訪ね「その様な絵は無かった」と言ってきた。私が在任中新聞社が三万円ないし五万円迄は出すから売ってほしいと交渉に来たことが有ったので驚いたのは私の方で、早速校長に会い「統合による引越して混雑したものと思うがよく調べしてほしい。」と申し入れその後ようやく発見されたと聞いてほっとした。今はどの様に保管されているのかとにかく貴重な資料である。夢二初期の作品で畑から帰る農夫を鉛筆で描いたものである。藤木教授は「おそらく成人前の若い時の作だ。」と言っていた。晩年弥四郎は、「夢二は常師もなく自ら独自の画境をひらいた。」とほめたたえていた。宮本武蔵が「世に常師なし。」と言って天地自然から学びとった剣の道になぞらえて「夢二もまた然り。」と語っていた。美術史の研究者中には服部三三郎が自ら絵筆をとって夢二を指導したとは受取っていない者も居る。夢二の幼友達は「校庭で写生をしている夢二のそばでじっと見ながら『なかなかうまいね』とほめられていた。」と語っている。夢二も校長先生にほめられたことで大いに勇気づけられ自信を深めたいらしい。当時の図画と言えれば手本を見て最も手本に似て

描いたのが上手だとされた。実際に桜の咲いているところに行ってみながら描くことはなかった。服部先生が校庭へ出して直接写生させていたことは画期的な事であった。そのような教育を受けた夢二が家の裏畑で仕事を終えて帰って来た農夫を鉛筆でスケッチしたものが前述の絵であるが未だ名も出さず成人にも達していなかったと思われる頃の作としては線は全く無駄がなく正に天才の作と評されている。教授との研究調査が一段落して出版準備に入った頃奇しくも汪洋夫妻が父上の墓参に帰って来た。私が自分の母校である明德小学校に着任していることを聞いて訪ねてくださった。初対面の私に打ち解けている話された。その時記念に目の前で色紙に自分の詩を書いて残して帰られた。酒を酌みながらサトウハチローを育てた話をされた。この出会い後、亡くなるまで自分が主宰する「日本詩人クラブ」を送りつづけてくださった。内剛外柔と言う可きか接する人には温厚な優しさを感じさせる小柄な方で、たきの夫人は日本の典型的な戦前の女性だと感じた。三人の幼友達は何れも明德小学校から邑久高等小学校へ進み以後それぞれ自分の道を力一杯ひたすらに歩み続けた。古武弥四郎生誕百年祭が阪大で開催され、ハーバード大学より生化学の世界的権威ノックス教授が来日記念講演をした後、生化学の偉大な先輩である古武弥四郎の生誕地と生家を訪ねたいと急に言い出し、天王山へ登り弥四郎

自作自筆の歌碑を見て献花した。通訳から詳しく説明を受け深くうなずき一人つぶやくが如く「going my long long way」といったのが今も耳に残っている。遠い岡山への通学の道は同時に生涯かけたトリプルファンの長い研究の道でもあった。ノーベル医学賞の有力候補と言われていたノックス博士は弥四郎少年が通学した不屈の精神と長い研究生活に感動した様子だった。ノックス博士は帰国後間もなく心臓発作で急死、藤木教授も出版を見ぬ膨大な資料をかかえたまま世を去った。明治生の筋金が入っていた様に思う。弥四郎は医学者でありながら不思議に論語は殆ど暗誦していた。汪洋の詩の背景を考察する時これまた論語を無視する事は出来ない。特に夢二生家の東に接する国司丘の詩碑に刻まれた「柿の実に」の詩は、汪洋の偉大さを集約したもので汪洋の真骨頂を發揮している。

私は此の詩のバックボーンに論語子罕文九「三軍可奪師也匹夫不可奪志也」が頭の中に有った事は、ほぼ間違いないと思っている。最後に日本南画院理事長直原玉青画伯と天王山歌碑裏面の撰文を書いた市原博士のことにふれておきたい。玉青の傑作ぶどう棚の絵が本庄コミュニティハウスに保存されている。玉青は明治三十八年赤磐郡吉井町に生れた。夢二同様幼少の頃から絵が好きであり、俳句にも興味を持っていた。何時の頃から

らか弥四郎に心酔していた。自分の栄進の道を捨てて終生弥四郎の助教授をして離れなかった市原博士も玉青と同様気を一にしていた。或る夏二人が無人だった弥四郎の生家の戸をあけて暮してみたいと言い出した。私も呼び出されて三人裸で暮したことがあった。毎夜弥四郎、汪洋、夢二の話をしていた。その後展覽会で特選となったぶどう棚の絵を会が終わると自分で私のところまで持参して「明德小学校に寄贈する」と置いて帰った。玉青は今年数え年八十八才、洲本市名誉市民、日本南画院理事長、禅僧で淡路島西淡町の国清寺住職でもある。先年岡山市高島屋デパートの南画展に「謎」の大作を出して居た。平成二年元旦には心境を次のように述べている。「画を学ぶ有難さは禅を行ずると同じく大自然の心深く参入して仏の慈悲に触れることを得る也。水墨濃淡の理法を悟れば調和と秩序自他一如の道の尊さを知る也。美を愛し、禅を愛し、平和を愛し、社会人としての人間向上に一層の精進を誓うもの也」私は過日良寛遺墨展を見た上、瀬戸内寂聴の記念講演を聴いていたので此稿の執筆をしながら、良寛と玉青に相通ずるものが有る道は一つかと思つた。弥四郎が誠の字を多く揮毫した心も又同じかと思う。

大原桂南先生

小林 正 志

- ・ 大正十四年（一九二五）生まれ
- ・ 豊原
- ・ 元邑久小学校長

○天と親しむ

赤穂線邑久駅北百mの線路沿いに、大原桂南先生の書碑が約百㎡の庭園敷地の一角に「与天親」と丸彫り（みかん彫り）された碑石が建立されています。桂南・大原専次郎先生の徳風を景仰する多数の方々によって企画され、八十二歳の天寿を全う



大原桂南先生

されてから二
年後の昭和三
十八年十一月
に先生を敬慕
する人々の手
によりこの地
に建てられま
した。

この書碑に彫られている「与天親」の言葉は七十二歳の時、偏額に「与天親」と揮ごうされています。

昭和二十五年に書かれた作品ではないかと思えます。このころ私は邑久中学校の教員として勤めさせて頂いていたころでしたので、度々先生のお宅へお邪魔させて頂いていましたが、岡山で戦災にあわれ、御自宅や家財を消失されたのに、そのことにはふれられないで、御自分で編集中だった「漢詩集が焼けて残念だ」とか「書家は大勢いるが漢詩の作れる人は少ない」などと話しておられました。終戦後、岡山から郷里の下笠加に帰られた先生は、お会いする度に口癖のように「千町平野が美しい」「大雄山が美しい」とふるさとのよさ、特に大雄山の山並みの美しさを愛でておられました。岡山での戦災、終戦直後の世相、書道教育者・書家として書道一筋に生きてこられた先生の心境の一端が天と親しむご心境であられたのではないかと思います。

○人を愛する

明治四十三年から昭和十七年ころまで岡山県師範学校で書道教育にあたられましたので、県下の小中学校教育の充実進展のために尽された御功績は大きいものがあると思えます。師範学校時代に立派な書道教育者や能書家を育てておられますが、先生がしばしば言われた方に井上桂園先生（元広大教授・国定習



下笠加にあり

字手本筆者)、絹田岐陽先生(元岡山師範・岡大教授・故人)、大館桂堂先生(元岡山師範・岡大教授)、赤枝香城先生(書道家・邑久町)、森景桂翠先生(元邑久高教諭・邑久町・故人)、大森春陽先生(元西大寺高教諭・邑久町・故人)の名があげられ、先生方のご活躍を大変喜んでおられました。特に、大原桂南先生の後任で岡山師範の男子部に着任の絹田岐陽先生と岡山師範の女子部に赴任された大館桂堂先生については、いつも「絹田君と大館君が仲良くやってくればよいが…」と話されています。大原桂南先生の胸中には師範教育の一層の充実進展と岡山県書道教育界の発展のために仲良く和の心を大切に、自重自愛頑張ってほしいと念願しておられたのではなからうかと推察する次第であります。

御帰郷後は作品制作に御多忙でしたが、同郷の若い人達(小・

中学生も含む)へ書の道の手ほどきもされていました。現在書道界で御活躍の小崎桂舟先生(牛窓町)、赤枝桂峰先生(長船町)梶田桂苑先生(備前市)、横山様子先生(旧姓高田・岡山市水門町)、水田博子先生(長船町)や日展会員として御活躍になった港桂泉先生(邑久町・故人)らの先生方が桂南先生に御指導を受けておられました。桂南先生のお宅で皆さんにお会いしたのがつい昨日のように思われます。

大原桂南先生は「自分は書道界の花壇の番人だ。立派な花が咲いてくれるのが楽しみだ。」と申されたことがあるそうですが、すばらしい書道教育家の生涯であり、大教育者でありました。きっと当時御指導された方々のご活躍を喜んでいらっしやることと思います。また、昭和二十年代には邑久郡の小中学校の教育界では、岡山県書道協会(きび書道会)主催の七夕展の前、夏休みに郡内小中学校の書道講習会を開いておりましたが、大原先生や絹田先生・大館先生を講師としてお招きし、ご指導をいただきました。大原先生はご高齢にもかかわらず幼い子供たちのご指導を喜んでくださったことを想い出します。

この会には郡内小中学校の習字教育関係の先生方はもちろんのこと郡内講師として森景先生や大森先生・塾の先生方にもご尽力をいただきました。

邑久郡の小中学校の書道文化の高揚に関係者が情熱を燃やし



た楽しい思い出がよみがえってきました。

それから、邑久中学校は昭和二十年代に岡山書道協会主催の小中学校の七夕展覧会や書初展覧会に団体の部で連続優勝（在籍生徒数の一割以上出品した成績優秀校）をしたことが何回かありますが、桂南先生は優勝の情報を入れてくださり、平素の地道な練習のうえに、夏休みや冬休みを返上して、真しな態度で頑張る書道部の生徒を賞讃してくださいました。

邑久中学校の感謝祭には書道展を開いておりましたが、毎年、日本の書聖であり、岡山県書道会の重

鎮であられた大原桂南先生が自ら足を運んでくださり楽しそうに生徒の作品を見てください、生徒を激励していただきました。生徒を愛される慈顔愛語の先生のご風姿が懐かしく想い出されます。

○天衣無縫（「天人の衣服に縫い目がないように、詩歌などが、技巧のあとがなく完全である様子」三省堂、国語辞典より）

岡山県の書道文化の発展に尽された御功績は極めて大きいものがありました。特にふるさとの下笠加にご帰郷後は、地域の皆さんの御要望に気安くお応えになり、数多くの作品を書かれたり、若い人に書道の御指導をされるなど、地域文化の発展に寄与されること大でありました。

毛筆漢字の美の極致に到達された先生の作品は、非常に格調が高く、天衣無縫の境地を存分に表現された、実に堂々とした作品でした。鑑賞させていただく度に、先生がよく、「天衣無縫」という言葉を使っておられたことを思い出します。

「書は人なり」と申しますように、先生の書も日常生活も「天衣無縫」という言葉通りでした。名利を求めず、ひたすらに書道教育者として書家として御活躍になったすばらしい大原先生の御生涯でした。終わりに大原桂南先生の御冥福と大原家のますますの御繁栄をお祈りして、ペンをおきます。

大原桂南略歴

明治13年11月9日 岡山県邑久郡邑久町下笠加、大原敬藏氏の次男として生まる。

明治36年3月 岡山県師範学校を卒業。

明治40年2月 文部省習字科試験検定合格。

明治43年3月

岡山県師範学校勤務。

大正7年 第一回全国習字中等教員会を東京文理科大学にて開催。議長として奔走す。

大正8年

日下部鳴鶴翁の委嘱で大同書会岡山県支部長となる。

大正11年

近藤雪竹翁に入門。漢隸の指導を受く。黄微書道会(後の岡山県書道協会)会長となる。

昭和7年

岡山県師範学校教諭を依願退職。後、囑託となる。

昭和8年

岡山県女子師範学校囑託。

昭和11年

岡山県立第二岡山高等女学校囑託。

昭和18年

この頃第六高等学校書道部講師として指導にあたる。

昭和23年

山陽新聞の題字を揮毫。

昭和26年

岡山書道院(現、社団法人養和書道院)の顧問となる。

昭和28年

邑久町文化功労賞を受く。

昭和30年

岡山県文化賞を受く。

昭和31年

日本書道連盟岡山支部長となる。

昭和32年

日本書道教育学会顧問となる。

昭和36年

山陽新聞賞を受く。

昭和36年11月19日

心筋硬塞症のため下笠加の自宅にて逝去。行年82才。長春院禅林桂南居士。

昭和37年 日本書道教育学会より教育功労者として表彰さる。

奥田真須二先生を偲んで

赤 枝 秀 夫

奥田先生のお家は、士族の家柄であった。現在は廃止されている。槍二本座敷の欄間の横にいかめしく備えられ門屋の西半分では主の命を守ったであろう馬小屋が今でもそのまま残されている。門の東半分は長男・毅さんと私どもの勉強・遊び・理科実験等の子供部屋で、課題の青系統の検閲などは本宅の茶の間でご厄介になっていた。

先生は何十年の歲月、上品で愛想よくいつも徒歩で通われた方で自転車等に乗られた姿を見たことはなかった。先生の勤められた任地は邑久高等・邑久土曜学校・邑久実科高等学校・県



奥田真須二先生

立邑久高校とめまぐるしく変転の期間であったが、その時その時先生の取られた人事のご手腕は誠に鮮やかな



者であった。

先生はご一生のうち何十回も講演等に出向いて行かれたが、その原稿は慎重そのものでした。

朝トイレ時間の長きに亘ることがある。

おばあさんが「長いトイレだ。」と質せられると、「今日の講演の予行をやっていたん

だ。」と名弁士の誇り高い先生であるが、こんななまでに慎重に対処され、今日の講演は何点と反省の声を漏らしておられた様子、これは小原国吉学長・永井柳太郎代議士のご苦労に似通っている面があり敬服の他言葉がない。

学生は先生に小天狗のニックネームを送っていた様だが、これは先生がすばらしい実力を内蔵されていたこと、そしてまた

自然に下る先生への反省した言辭と思う。またこうした一日一日の営みが所謂邑久魂を育成したものと考えられる次第である。

奥田家の空き家は家族持ちの学校の先生へ提供するのが望ましいとの意向なので小生宅が家主代理で長年管理してきた。庭の大木・山桜も毎年開花して楽しみを与えてくれたが次第に老化して何とか処置せねばならない時も到来した。

また、明治の始め牛窓から入手された奥田家の用材も、雨漏りなどで維持費に追われ、取壊し、全面修理等の案で岐路に立った。私にも意見を求められたので、「この用材は牛窓の服部家から入手した用材で、牛窓から海路神崎へ、そして荷馬車で豊安まで、と由緒ある歴史をもつもの。」と赤枝九二太老人が語られたことを思い出し、私も愛着を感じるので全面修理を進言した。奥田家では皆さん慎重審議、尾張の柴田工務店が担当、屋根払い葺き、調理室、茶の間、手洗い等近代化された。その年昭和五十九年春、毅氏叙勲、そして岡山理科大学長ご就任とめでたい事柄が続出した。豊安部落一同は座敷いっぱい円座を作り声たからかに祝賀の盃を交わしたことである。先生のお子さんは三男二女あり

長男 奥田 毅 元大阪大学教授

元岡山理科大学教授

次男 片岡虎雄 元岡山大学教授

元就実大学教授

三男 奥田節夫 元京都大学教授

元岡山理科大学教授

現天山山脈水文調査バイカル湖共同研究団
長

長女 中谷道子 神戸市中谷家へ嫁す

次女 島 英子 東京都島家へ嫁す・日展書道作家



奥田真須二先生 頌 徳 碑

碑の題字…古武弥四郎博士
" 文…正田隆先生
" 書…大原桂南先生

◎奥田真須二先生略歴

- ・ 明治十五年二月十三日豊安に生まれる
- ・ 幼少のころより頭角を現し、閑谷学に学ぶ
- ・ 明治三十一年静修校（現在の豊小）に勤務、年十七歳

- ・ 明治三十二年邑久高等小学校に勤務十八歳
- ・ 大正三年青年教育に関心強く邑久土曜学校を開設す 無月給

- ・ 大正四年邑久高等小学校校長となる
- ・ 大正十年女子教育の必要から邑久実科高等女学校を兼務す
- ・ 大正十五年邑久高等女学校長となる
- ・ 昭和十年邑久高女退任、邑久郡教育会、邑久郡青年団長辞職、教職三十年子弟八、〇〇〇人
- ・ 岡山県補習教育視察員
- ・ 昭和七年社会教育功労者として観桜会に召される
- ・ 昭和八年七月正六位に叙せられる
- ・ 昭和二十三年四月邑久村長
- ・ 昭和二十七年四月邑久町長
- ・ 昭和三十八年三月邑久町名誉町民
- ・ 昭和四十年二月五日没八十四歳、町民葬

嘉数郁衛君のこと



古 武 隆 郎

- ・ 明治三十一年（一八九八）生まれ
- ・ 兵庫県宝塚市
- ・ 高津理容美容専門学校長

嘉数君は私より一つ下で、郷里の邑久町長を勤めること十六年間、大きな功績を残して勇退し、元氣そのものであったのに、五十八年五月にたった二ヶ月程の病気でなくなつた。彼ほど私の頭に去来する人は少ない。人格の廉潔なこと、このような人は少ないと思う。私の恩師奥田先生は、その高潔な人柄によって邑久町長に推されたのであるが、そのあとがまに町長になつたのが嘉数君なのである。邑久町長に推薦したのは、私の恩人岩井亮氏と竹馬の友であつた田中義雄君でそれに長田孝一ドクター、岡本岩雄、岸野満、秋山弘、木村孝雄の諸氏が同調してゐた。彼は恩師が果たされなかつたことを、十六年間の長期町政担当でよく改革したと思う。二期目であつたか、一度は落選したが、これが彼に幸いしたようで積極的な行政は町民の信を得るところなり、五度目は無競争当選の予想であつたが、彼は

そこで勇退した。この退き際は見事であつたと思う。昭和五十一年まで、四期十六年間も邑久町政を見たのだから、よく普通人の出来るものではないと思う。

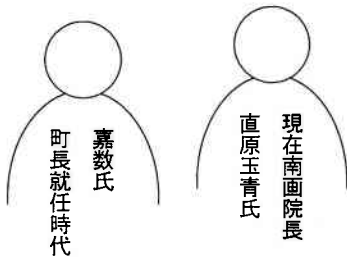
嘉数郁衛氏の略歴を調べてみると

- 大正 八年 三月 邑久郡邑久土曜学校卒業
- 大正 十年 四月 邑久郡書記
- 大正 十五年 七月 岡山県属に任命
- 昭和 十九年 七月 岡山県経済第一部長に任命
- 昭和二十三年十二月 経済調査官

昭和二十六年 六月 岡山県人事委員会委員長に就任
と学歴は土曜学校が、氏の最終の学歴となっている。かく申す私も氏と同じである。違ふのは私はこの学歴に常にコンプレッ



大平山より虫明の海



クスを感じていたが嘉数氏は、毫もそれを感じていないようだ。

私は彼の人物には土曜学校の時から敬服していたから、彼に、都会で働いたら君は成功すると思うから出てこい、と手紙を出したことがあった。これは彼の家庭の事情で果たされなかったのである。これは想像であるが、官庁は学歴による地位の格差が著しい所と聞いている。どのような伝手があつて県の役人になったのかついに聞いたことはないが、大正十年に邑久郡書記であつた氏が、大正十五年には岡山県属に、昭和十九年には、岡山県経済第一部長になつてゐる。その頃は日本国民の殆どが食糧難のために、飢えに苦しんでいた。私は大阪に住み、六人家族で時々食料補給のため故郷に帰り、農業をした。弟に厄介をかけたのだ。その時には必ず岡山県庁に嘉数氏を訪ね、課長席にいる氏の執務振りを見ていた。戦時態勢に入つていた頃で夥しい陳情者の数である。驚いたことに之を処理しているのは嘉数氏一人である。私はその人達を応対しながら事務を処理していた彼の敏腕と言うか、辣腕振りに圧倒させられたものである。役人はその頃から、仕事もせずブラブラして月給だけ取ると酷評されていたが、私は役人の中にこのような者もいるのだ。そしてこの人達が国を支えているのだ。と思うようになった。私は改めて氏を見直した。実にすごい人間だ。こんなことがあつてから、嘉数氏を尊敬するようになった。彼の家にもよ

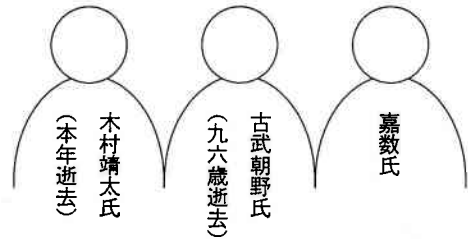
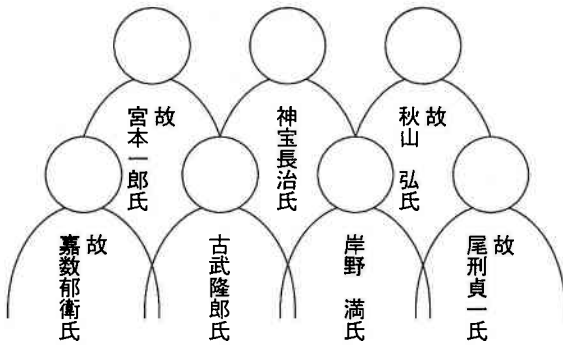
く行つた。県庁からは近い三番町にあつたのだが奥さんが美人でしかも初対面の人にもやさしいご対応ぶりに驚いた。子供は男ばかり四人であつたから、私のように女三人、男一人とは違い、騒々しいが明るい家庭であつた。私は泊めて頂いたこともあつた。

彼が町政を担当した十六年間は、彼が余りにも多忙であつたので交流は少なかつたが、勇退後は大阪、岡山と離れていたが、交際は密なるものであつた。帰郷した私が尾ノ村の人々と会合する時。邑久土曜学校卒業生会をする時。必ず彼は来てくれた。彼はその頃すでに最愛の奥さんを亡くしていた。美人薄命と言うが、四人の子供を育てた薄給時代から、町民多数の推薦からやむなく立つた邑久町長時代も。落選の憂目を見たときも。苦勞ばかりかけた糟糠の妻であつた奥さんが亡くなつたのだから、その時の彼の痛手はよくわれわれの想像する以上のものである。私は出来るだけ彼との接触を密にした。

最も思い出に残るのはカナダ旅行である。五十六年七月、本校後援会有志がカナダ旅行を企画した。かなりぜいたくな旅行であつたが、私の経営する高津理美容容学校の理事になつて頂いた事もあり、彼を誘つたら同行してくれたので、私は彼に矢立てと筆を贈り、行く先々で彼の作歌を色紙に書いてもらうことにした。彼は短歌をよくし、地元「麓短歌会邑久支社あけぼ



昭和57年2月28日 邑久町尾の村
嘉数氏よく尾の村に来て下さった
部落の人と食事を共にし必ず寸志を贈られた

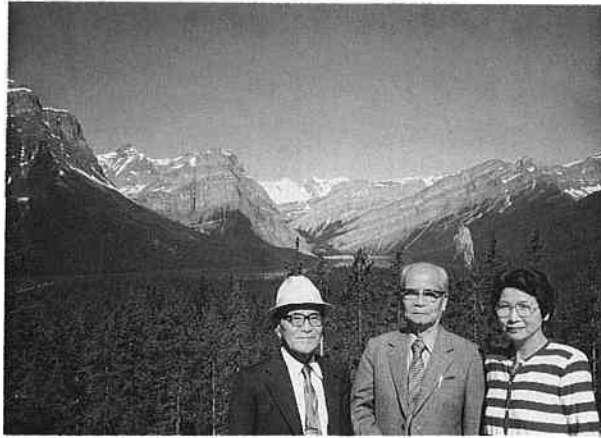


の会」の顧問でもあったからだ。
カナダ旅行は二人にとって、最高の海外旅行であった。現地でチャーターした大型バスは十八人乗りで、一流のバーの如き食堂があり、座席は坐り心地のいい応接間の大型セット椅子といった風で、最近では日本でもこれを真似した観光バスが出来ているが、そんなものは比較にならない豪華な車であった。米国人ではあったが運転手はご主人、サービスは奥様で実に打ち解けたものだった。そして最後の日は、運転手さんの家でお別れパーティをして頂いたのだが、家は森の中。玉突台のあるのに驚いたが、料理場、食堂はまるでホテル並、二日も運転してくれた主人がコック、サービスはここでは奥さんとお嬢さんであった。最後は全員が仮装してのエピログで、特に嘉数君と私の仮装振りは大喝采であった。そして二人は約束したものだ。呑気にやろうぜ。長生きをしようぜ。そして小さなことでもよいことをして世のため、人のためになるようにと、それなのに嘉数氏は昭和五十八年五月五日に逝去された。病気で入院したことも知らず、見舞いにも行けなかったのである。私の一生の恨事である。

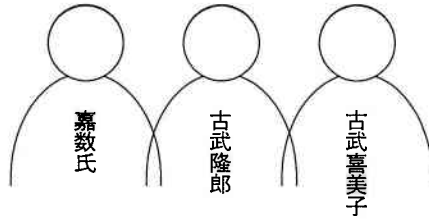
彼が私の傘寿祝いに贈ってくれた歌は、それから十年、今も私の家に掛けている。

八十路なお 百歳の道はるかなり

胸張りて行かむ 照る日曇る日



カナダにて



(喜美子は校長で私の次女)

竹田喜之助の思い出



伊原耕作

- ・ 大正十三年（一九二四）生まれ
- ・ 尾張
- ・ 時計店経営

私と竹田喜之助（本名岡本隆郎）の交際は少年時代だけでしたが、同級生の誼よしみでかかせてもらいます。

岡本隆郎君は大正十二年六月二十七日、当時の邑久村尾張七一二番地の、現在の岡本家から約二百米程東に尾張川がありましたが、その川沿いの中堅農業の長男に生まれました。当時の農村は経済的に貧困でしたが、祖父の周三郎さんが呉服商を始められ、岡本家は当時の村内では指折りの資産家でありました。後年人形師としての名声をきずいた隆郎君は子供の頃から村のエリートとして、岡山一中、六高、東大と進学されたわけですが、学業の面では、入学から卒業まで常に級長でした。当時は成績のいちばん良い生徒が担任の先生から級長に任命されておりました。

特に母親の多津恵さんは裁縫の先生をなさりながら、独学で

文部検定を受験され、見事これに合格し、教師の資格をとられて女学校の教師として奉職された程の、勉強家でもしかも大変な努力家でした。また、叔父さんの勇さんや英雄さん共に大学を卒業されておりまして、勉強には非常に熱心なご一家でした。

本人の努力は勿論ですが、勉強一途に打ち込める様な大変結構な家庭環境であつたわけです。家では呉服商を営んでおられた周三郎さんが、または父親の岩雄さんが店番をされており、不必要（？）な友人が遊びに来たら「隆は勉強じゃ」の一声で追い帰されておりまして。私もそんな訳で隆郎君の家に遊びに行つたのは、たった一度しか記憶にありません。そんなわけで遊びに行つた日の事は、今でも良く覚えております。新築された間もない頃隆郎君に立派な二階へ案内されました。最初に目に映つたのは、黒光りを放っている立派なピアノでした。これにはびっくりしました。私達の小学校でも当時ピアノは無く、オルガンが二台だけでした。これは英雄さんが音楽の方に進んでおられたので、必要な楽器であつたのでしょう。また立派な蓄音機も置いてあり、有名なクラシック音楽を何曲か聞かせて貰いました。私の生活とはまるで異なつた夢の様な一日でした。隆郎君は頭も良く勉強も一番でしたが、大変好奇心の強い人でした。東大在学中に全く別世界の人形劇の世界に飛び込めたのも、そんな性格が作用したのではないのでしょうか、そんな氣

がします。それで隆郎君の小学生時代の逸話を少し述べて見たいと思います。これは友人の林胖君から聞かせて貰つた話です。が林胖君（旧姓山崎）・隆郎君は生家が隣同士でした。三年生の六月四日の虫歯予防デーの日の事です。胖君の兄さんが胖君に「胖、虫歯があるか」と聞いたので

「あるよ」と言う

「見せてみい!!」と言われたので、口を開けたらいきなり塩を放り込まれて、後が大変だつた。と隆郎君に話して聞かすと、隆郎君手を叩いて笑つたそうです。隆郎君はその日の帰り道で早速その真似をしたのです。道端に底の破れた紙袋の中に、黒砂糖のついたカリン糖が落ちていました。隆郎君はそれを拾うといきなり駆け出した。見ると向こうから年輩の岡本角蔵さんがやって来りました。

隆「おつつあん、虫歯はあるか？」

角「年寄りじゃあもう、歯はありません。残つた歯も虫歯だらけじゃあ。」

隆「今日はなあ、虫歯予防デーじゃあ、見せえ。」

角蔵さんはいやいやながら口を開けた。すばやくカリン糖を放り込んで逃げ出した。さあ大変。

角「おどりゃあ、人に石を喰わしあがつた。待て!!」

と追いかけたが、隆郎君は一目散に呉服店へ逃げ込んだ。角さ

んカンカンに怒って

「待て!!待て!!」

と店の中に飛び込んだ。隆郎君は二階へ駆け上がった。角さん
藁草履のまま二階へ駆け上がろうとした。番頭をしていた周三
郎さんが

「コリヤ!!角さん馬鹿者!!隆が何をしたんなら!!」

と大声で怒鳴った。角さんひるんだが

「わしが悪いか、孫が悪いか、孫に聞け!!孫に!!」

と言ってなかなか収まらぬ。角さんはかいつまんで事の次第を
説明した。その後二人にはげしくしぼられたと言う話です。と
にかくやって見ようと思ったら、良きにつけ悪しきにつけ、す
ぐに実行する勇氣はその頃からの様です。以上の様な話は他に
も数件聞いていますが紙面の都合でタイトルだけ紹介しますと
〔パン屋のおじさんの頭の禿を確認するためにわざわざパンを買
いにいった話〕

〔考古学の先生が古墳を発掘した話を聞いて早速古墳を掘って頭
蓋骨を持ち帰って大目玉をくった話〕

以上の様に逸話の多い人でしたが、実行力の強さには敬服し
ます。

竹田喜之助としての約三十数年間に、世界を舞台に活躍され、
世界の喜之助として各国から数々の賞も受賞され、本当にこれ

から円熟の芸を期待していましたが残念ではありません。しかし
ながら喜之助フェスティバル等も開催される様になり、町民か
らもその偉大さを認められ、本年三月には町議会に於て名誉町
民に推薦され、邑久町五人目の名誉町民として去る八月十六日
その授与式も行なわれました。私達の郷土邑久町から、世界的
な人形師竹田喜之助が生れた事を誇りに思いますと共に、青少
年の皆さんも彼に続いて、立派な人間として成人される様祈っ
てやみません。最後になりましたが、本稿を書くに当たりまし
て、友人の林胖君から多大な御援助をいただきました事を申し
添えまして、感謝しながら筆をおきます。

太平洋戦争の思い出



嘉 敷 小 志 賀

- ・ 明治四十一年（一九〇八）生まれ
- ・ 山 手
- ・ 無 職

戦争の悲惨さ、むなしさをいまさらのように思い出します。

当時の日本の軍国主義と植民地拡大の政策、日本をとりまく世界情勢、危機感、その他もろもろの要素が重なって、日米の外交渉は沈裂し、日本海軍がハワイ真珠湾のアメリカ艦隊を奇襲攻撃し日米の戦いの火ぶたが切られ、激しい大東亜戦争となりました。

今、当時を思い浮かべる時、私は大阪に居住していましたが、毎日のように空襲警報によって夜は灯火管制で電燈にカバーをして薄暗くし、ほの暗い町中をバケツリレーし水をはこび、火消棒などで焼夷弾降下の際の対応に、町内団結で懸命に訓練を続けていました。

昭和二十年四月末日岡山県へ主人が転勤となり岡山市弓之町へ住居を定め、私と子供は邑久村山手真徳（実家）の母と同居

しました。

国防色の国民服に戦闘帽の主人の姿にも村の人はあまり関心もなく、銃後の守りも都会よりは緊張感が乏しいように思われ、いささかのんびりいたしていました。

そのやさき六月二十九日夕方、岡山市へ焼夷弾が投下され、いたるところが火の海となり貴い人命と数多くの家屋の焼失で悲惨な状態となりました。

真徳の私たちの目にも火柱が見え恐ろしさにおののきました。幸い主人も命だけは助かりましたが、ペンの一本ものこさず全財産を失いました。

戦いも次第と激しくなり、軍需品の不足を補うために政府の命令で金属類の供出が始まり、家庭内の鉄瓶・金火鉢・花器・刀剣類・窓枠・寺の梵鐘・お宮の釣り燈籠とうろうに至るまで献納しました。また衣類ほたんの釦等も金属から陶器へと次第に変わっていき、兵器の補給製造にわずかなりともお役に立てばと国民の義務として政府に協力しました。また一般家庭の衣料品は点数切符制となり人数に合わせて余分の品は買えないことになりました。しかし妊産婦等は点数では足りないために特別配給がありました。

子供等は点数が足りなく購入ができないため、古着の更生や仕立て替えでどうにか間に合わせました。

小さい子供までが「ほしがりません勝つまでは」の言葉に忠実でした。

乾パン・食料品・調味料・主食の米も農家といえどもほとんど供出し残り少ないので、芋・大豆・南瓜等と一緒に煮込み代用食として主婦のやりくりも大変でした。

あの店に行けば何品かあると聞き遠くまで労力を費やして買出しにと、主婦はまったくパニック状態でした。

子育ての牛乳は牧場の方の御好意でしぼり立ての牛乳をいただき大助かりでした。

農村の主婦も一致団結で、家業に頑張り通すにもかかなりの年齢の方まで出征され、銃後を守る私どもにいつそうの緊張を感じさせられ、不安の毎日を過ごしております時：

八月六日朝、広島に原爆が投下され恐ろしさに震え上がりました。市内全滅と聞き、日本人はもとより諸外国の人々も数多く犠牲者を出され、人類滅亡との噂に悲しみと怒りに燃えました。

続いて、間もなく長崎にも原爆投下があり、人類破滅の核兵器使用に、日本政府もついに停戦へと踏み切りました。

昭和二十年八月十五日。

天皇陛下の玉音もことのほか寂しく、停戦のラジオ放送を国民一同が涙を流して拝聴しました。そのお声が今もなお耳底に残っています。

今、過去を振りかえる時、真珠湾攻撃から五十年。敵国だった「アメリカ」が今は日本を味方に取り組んで、世界各国との交渉を図る時代に替わり、核兵器廃絶で平和な世界の到来を望んでいます。

敗戦と同時に全国民が日本魂を奮起し、大きな目標に向かって、経済復興を実践にと立ち上がりました。

私たち家庭を預かるものの任務として戦時中から、停戦後の貧しい食生活から脱皮し栄養食にと盛り上がりへの声を、当時の婦人会長であり生活改善教室長の赤枝豊子さんが役場・普及所・農協へ連絡の上、講師の派遣やら、講習にと尽力していただき隣組のみなさんと「助けたり、助けられたり」の歌の文句のとおりの楽しい講習会を今回も実行しました。

この影には諸先生の指導と、農協の別室を拝借して台所用具を保管させてもらい、小学校の運動場のすみの木陰での実習



当時の近所の方々と

もたびたびでした。

また普及所の指導で野菜作り、特に新品種のブロッコリー、当時は珍しく郡内でもトップ級の栽培でした。

隣組一同の団結で「教えたり、教えられたり」を実行しました。

今はなき大先輩の細川みゆるさんの指導で乳幼児の保健衛生の勉強も、実験談を交えて楽しく教えられ、郷土発展の道へと精進しました。

現在の日本は今や世界に誇る豊かな文化国家とまで成長しましたのも、国民総動員で一致協力の賜物と思います。しかし邑久町の農家を振り返る時、都会へと職を求めて走る若者の多いのに驚きます。

後継者不足で県北の過疎を決して笑えない状態になるのではなからうかと危惧の念を抱かせる現在です。

高齢者の私たちは、老齢年金が支給されありがたい時代と感涙にむせぶ今日この頃です。

時にふと考えますに「おとぎ話」の「乙姫と浦島太郎」が、のんきに遊び暮した生活に似ているのではなからうかと、時折考えさせられます。残る短い余生の生き方に精進を重ねる今日この頃です。

「坂道を越えて天命待つ余生」 小志賀

塩造りの移り変わり



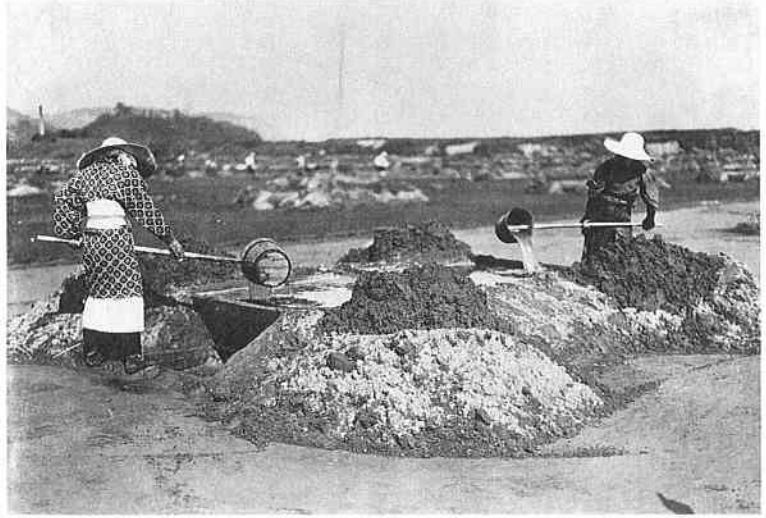
宮 谷 博 二

・ 明治四十四年（一九二二）生まれ
・ 尻海
・ 農業
二元玉津塩業勤務

我国は、塩の無限の宝庫である海に囲まれていながら、諸外国と異なり天然資源の岩塩に恵まれなかったために、昔から大変な努力と工夫を重ねて日本独特の塩造りが行われてきました。

土器で海水を煮詰めた原始時代の直煮法、海藻に海水を注いで、これを焼いて灰にし水に溶かして上澄み海水を煮詰めた古代の藻塩焼から、自然の干潟を利用した塩浜、満潮面より高い所の砂に海水を撒いて水分を蒸発させた初期の揚浜式塩田など、祖先の苦心の跡が偲ばれます。

こうした素朴な製塩法も鎌倉時代になると、陸地に粘土で海水の漏れない地盤を作り、細砂を撒いて海水を散布し蒸発させた、より効率の良い揚浜塩田となりました。そして、江戸時代には遠浅の干潟を干拓した砂地に海水を導き、太陽熱と風力により水分を蒸発させる入浜式塩田が瀬戸内海沿岸で発達しまし



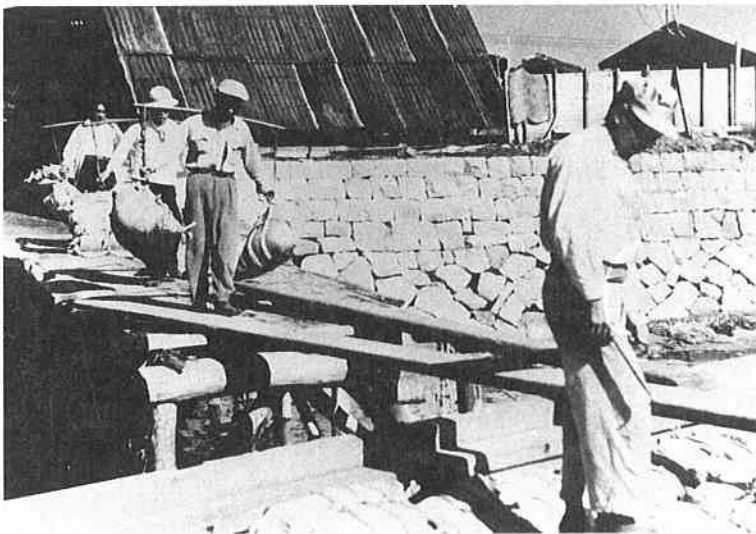
かん水（濃い塩水）のくみだし

塩水）を集めてポンプで汲み上げ、枝条架（笹の小枝を組み立て、海水を水滴にして落下循環さす装置）に流して、平面濃縮と立体濃縮を繰返す方式です。しかし、この流下式塩田に於ても、広大な塩田面積や多くの労務費を必要としました。また、気象条件にも左右されて安定した生産が行えなかったのです。この流下式塩田も、昭和四十六年末で廃止されました。

た。以来約三百年この形式で製塩が続けられましたが、昭和二十八年頃から効率の良い流下式塩田が発達します。これは、緩い傾斜の粘土地盤に小砂利を置いて、高い方から海水を流下させながら水分を蒸発させ、下流にかん水（濃い

代わって登場したのがイオン交換膜製塩法です。イオン交換膜操かん法への転換により、これまでの気象条件に左右された農耕的生産方式から、化学工業的な生産方式に大きく飛躍し、連続的計画的生産が可能となり、製塩設備の大型化で、集中生産性は一段と向上しました。そこで国の施策により、これまでの多くの製塩企業は廃止され、日本国内の製塩企業は現在の七企業となり、長い歴史を経た塩も、今日いよいよ国際競争の時代になってきました。現在巨久町の東端にある錦海塩業株式会社は、その七企業の内の一社であります。

さて、従来から尻海にあ



塩のつみこみ

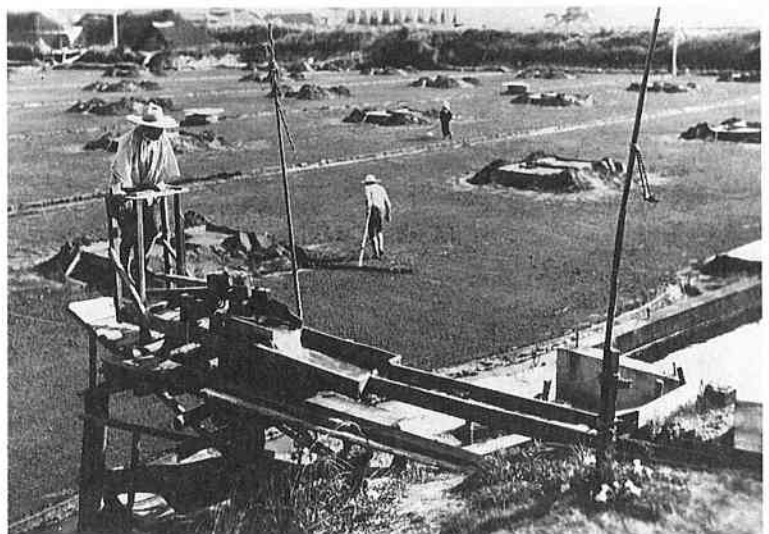
った入浜式塩田は、日本塩業史によれば、文化年間に八ヶ年を費やし工事が行われ、工事支配人は揚屋忠次郎と名主左左であったとある。面積六・四ha、稼働面積五・四ha、最初玉野市の宮原豊氏より秀一氏、その後大正二年には一・八ha当て三等分して神坂亀太郎、入江鉢郎、松井弥太郎の三氏が経営し、各塩戸ごと平釜式製塩場が附随していました。そして昭和十二年には、神坂家一族の神坂惣一、神坂林二両氏により、玉津塩業合名会社（代表社員神坂林二）として製塩を継続し、昭和三十四年十一月末日に錦海塩業が操業すると共に、この玉津塩業は操業を停止しました。以上、塩業の変遷を記しました。

三百年の歴史をもつ入浜式塩田とは、第一条件として汐の満潮面より地盤が低いということが挙げられ、堤防を造り、満潮時に海水を導入します。地盤に一〇m幅くらいに溝を造り、その溝に海水を導入し、縦横に暗渠水道を掘り、地盤の上に約二cm程砂を散布します。太陽熱と風力により、海水は蒸発し、ゆえに、下の暗渠水道から毛細管現象により海水が昇って来るようにして次第に濃縮され、砂に塩分が付着していきます。気温が上昇しきった午後二時から三時頃、その砂を一斉に集めて二aに一ヶ宛ある沼井という箱の中に入れます。沼井の中の砂を高くない様に平にして、上から溝の海水をかけます。その砂に付着している塩分を濾過して、沼井の下に埋めてある穴に落ち

てくる仕掛けになっており、その水をかん水と言います。ポーム比重計で調べ、塩分量がせんごう（かん水を煮つめて塩をとること）として採算のとれるくらいまで濾過して止めます。

その昔明治の初期、ポーム比重計の無かった時代、飯粒をかん水の中に落して飯粒が浮いている迄はよいと言うことで採っていたと聞いていたので、比重計で調べてみると一四・一五度くらい、海水の約六分の一くらいに濃縮されている塩水で、昔の人の知恵に感動します。

筆者が、昭和七年旧玉津塩業合名会社に入社した当時の給料



海水のくみあげ

私の戦中体験

業 合 隆 雄



・ 昭和四年（一九一九）生まれ
・ 北島
・ 元牛窓中学校校長
前邑久町立中央公民館館長
宮 司

は、一ヶ月二一円と米二斗七升の現物支給でした。当時、米は一升二二、三銭でした。労賃は物価に対して安かった。ゴム長靴を買うのに二日分の労賃では買うことが出来ませんでした。日雇に行っても一円前後の賃金しかもらえなかったのです。そのかわり、塩田は仕事が安定していたので良かったです。当時は働きたくても仕事の無かった時代です。でも、年間一七〇日くらいある採かん日（砂を集める日）には、真夏の炎天下の午後二時や三時頃からの作業であり、言語に絶する苦しい労働の連続で、今考えてもよく辛抱したものだと思います。子供を持った母親が、子供に勉強させるのに「お前、勉強せんと馬鹿になつたら塩田に行かずぞ」と言っただと吐いてたということを聞いたことがあります。それくらい過酷な労働であったのです。一日に現物支給される九合の米をその日に食ってしまうくらいでないと、一人前の仕事は出来ぬとまで言われたものです。

太平洋戦争の始まった昭和十六年、私は中学一年生、戦争の終わった昭和二十年は中学を繰り上げ卒業した年であったから、小・中学生時代は完全な戦中であり、学生時代は戦後の混乱期であった。その体験の中で主に小・中学生時代のことを中心にまとめてみた。古里での体験ばかりではないが、古里人の体験ということでお許しを願いたい。

私の生まれた昭和四年、中国北部では、進出しようとした日本軍と中国軍との間に紛争が始まっており、満州事変（昭和六年）も起ころうとしていた。軍部の力は強大となり、政治・経済・生活にも影響が現われ出し思想統制、軍国調の時代に入っていた。昭和七年には、五・一五事件が起こり、県出身の犬養毅氏が「話せばわかる。」の一言を残して海軍将校達に暗殺された。

満州事変・支那事変という中国との戦争が始まると、私の所の神社でも出征する兵士の武運長久を祈る祈願祭が行われ、小学校の校庭で歓送会のあと、村境まで出征兵士を送った。

武運や安全を祈る百社巡りや、婦人会や隣り組での千人針、慰問袋作成なども行われ、「小学生も兵隊さん元気で戦ってください。」との作文を作って慰問袋に入れた。

日本が中国へ進出するのを妨げるアメリカ・イギリス・オランダ等によって日本への経済封鎖が行われ、生産資材の鉄や燃料をほとんどこれらの国からの輸入に頼っていた日本では次第に物資が不足して、私の家でも銅製の火鉢、鉄の門扉、窓の鉄格子、父が記念にいただいていた金時計なども供出した。お隣の余慶寺の鐘は由緒ある鐘なのでやっと供出を免れ鉄砲の玉にならないで済んだ。その他鉄橋の欄干なども供出されて軍艦が大砲に化けた。旧永安橋や砂川の橋の欄干も戦後しばらくはその時入れ替えた木製のものであった。

主食の米麦を始め砂糖・マッチ・衣服・たばこなども配給（キップ）制がしかれて、服装や頭髮に至るまで規制され日常生活の締めつけも厳しくなっていたが、戦地の兵隊さんは、国のために命をかけて日本のため、皆のために戦っているのだから、このような不便不足はあたり前のことで、「欲しがりません勝つまでは。」と思いきみ、またそう教えられもして育った。

農家の子供は学校から帰るとすぐ家の手伝いをさせられていたが、それでも遊びたい一心の私達は、かばんを置くのもそこに日が暮れるまで野山を走り回っていた。子供の遊びは、戦争ごっこ・肉弾・陣屋とり……と勇ましい遊びが主であった。

中学は今のような義務教育ではなくて、進学には入学試験が行われた。六年生では進学の補習授業（予科）が行われ、月毎に全校一斉テストも行われ、好成绩の者は朝礼で表彰された。たしか座席も成績順にされた学年もあった。私は算数がにがてで妹の方がいつもその成績が良かったので家に帰るのを母が待ちかまえていて、予復習の問題を出して、それが出来てからでないと遊びの許可がおりない。かばんをそろっと縁側に置いて抜き足差し足で逃げ出すのも上手となったし、見つける母も上手となった。ある時、補習の時間、問題の解けたうれしさから「お母さんできた。」と思わず叫んでしまっ、級友や先生をびっくりさせ、後大笑いされた。補習の後の暗くなった山の道をかけ上るのはこわかった。

中学は岡山の中学へ通学することとなった。西大寺まで自転車、今のバスセンターの所から西大寺軽便鉄道で東岡山（財田）経由で後楽園駅に、そこから徒歩。先生や上級生の指示命令は絶対で、汽車で遙か向こうを通られる先生や上級生の姿を見ても挙手の礼の挨拶をさせられた。授業も教練という軍事訓練が

加わり、配属の将校が指導に当たっていた。不細工な私は歩調のとり方が悪い、揃わない、やれ姿勢が悪いとか言われて次の授業が始まっても何回も何回も校庭を回らされたり、「元気が無い。飯食つとるか。」と叱りとばされもした。

中学生生活にもようやく慣れかかった一年生の十二月、太平洋戦争が始まった。霜柱の立った校庭に集められて校長から日米開戦（日本海軍のハワイ真珠湾攻撃）を告げられ、身の引き締まるような緊張と不安な気持ちであったのを覚えている。次々と景気の良い戦果発表とは裏腹に、物資の不足や生活の締め付けはいつそう厳しくなり、バスや西大寺軽便鉄道も木炭を焚いて走るようになり、東山峠の坂道を登れないバスを乗客が押し上げることも再々であった。級友の中には志願して予科練習生という航空学校・海軍兵学校・陸軍士官学校へ途中進学する者もあり、これを誇りとして勧められ、志願しない者は卑怯者・非国民呼ばわりされた。

戦後私は、教員となったが、その時志願して行ったこれらの同級生が復学して生徒に、一方は教員として教壇に、という珍現象も起こった。

農繁期は出征兵士の農家へ勤労奉仕に、中学二年ともなると、市内の工場・岡山駅操車場への奉仕があり、ある時そこで昼食に、こうりゃん（唐きび）弁当が出た。一見赤飯ふうで喜んだ

のだがとても食べられない味であった。当時久しぶりに家族で後樂園に遊び、天満屋の食堂で巻寿司を食べたが、それは米の代わりにうどんを使った寿司であった。

中学三年の夏から、兵庫県相生市の播磨造船所へ学徒動員として働くことになり、学年全員が四年生の三月（繰り上げ卒業）まで勤労動員という強制労働奉仕となった。その間授業は一時間も行われなかった。しかし全国どの中学でも同じ様な状態であったから淋しいとも思わなかった。激化していく太平洋戦争に勝ち抜くためにはこれも仕方のないことだと思っていた。

播磨造船所では、当時一万トン級のタンカー・駆逐艦・人間魚雷といわれた一人乗りの潜水艦などが造られたり修理され、軍の機密の場所できまりも厳重であった。要所、要所には憲兵の見張りもついていた。囚人達や捕虜となった黒人の豪州兵達が働いている部署もあった。

私のついた銅工どうこうという作業は、タンカーのいくつにも分かれた油槽の底にあるパイプを型取り設置する仕事で、大人の職長や組長の下で物の運搬とか労力の補助、朝から夕方までの重労働であった。一日の日程は、六時起床・洗面・点呼・訓示・校歌斉唱・体操・朝食後全員整列して学校別に隊伍を組んで寮を出発、軍歌や「花もつぼみの若桜 五尺の命ひっさげて 国の大事に殉ずるは 我等学徒の本分ぞ ああくれないの血は燃ゆ

る」を毎日毎日歌いながら工場までの山道を勝利の日を信じて通った。労働の後は朝と同じように帰寮、夕食就寝の繰り返であった。食べ物といえば、三度の食事だけでヘギの上のった玄米半分豆かす半分の飯、塩水に少し色のついたような汁と付け物であり、十四、五の育ち盛りの私達にはとても辛抱できなかった。毎日が空腹で、夢にまで家での時々のお腹が浮かんで来る始末、家に手紙を書いては「お母さんお元気ですか。腹がへっています。〇〇を送ってください。さようなら。」農家でもない我家ではもちろん食物不足、雑炊ぞうすいやいもを食べ、食い伸ばして我が子かわいさで何かと送ってくれた。小包が着くと同室の前で包を開き平等に分け合う。人間飢えると浅ましいものでごたごたも起こる、交友にもひびが入る。食物が原因というわけでもないが、同級生間のリンチや同僚の兵庫県の学校との暴力沙汰もあり、先生方も苦勞せられた。

そのうちに、無欠席で勤務のよい者から日曜帰宅が一日許されるようになったが、許可のない者は山陽線の切符が入手できないので帰れない。そこで、時には朝夕に点呼を友人に代返たいへんしてごまかしてもらって暗闇に紛れ無賃乗車して帰る。東岡山駅東の踏切で飛び降りる。もちろん代返のお礼には食べ物を持参する。きかない話だが、帰宅し、たらふく食べて帰寮し嘔吐おうとした物をまた食べることもあったと言う。風呂も十日に一回も入

ればよい方で、石けんもなく、重労働の汗と脂まみれの着たきり雀であったから垢まみれの襟、下着の縫い目にはびっしりとしらみの卵が付いて、休日には日向ひなたで裸になって石の上でたつき潰つぶした。厚めの下着などは家へ洗濯に送るのだが家では仰天していた。熱湯で殺虫してもらっても寮の押し入れの中はしらみの巣となっているのだからどうすることもできなかった。栄養失調と重労働で病気になるかと回復が遅れ幽鬼のようになって帰宅療養となる者が続出した。

四年生の十二月、上級学校入試のため迎えに来た父と上京した。当時の旅はアメリカ空軍の主要都市・軍需工場への空襲もあり命懸けで、弁当も二日分くらいは梅酢をつけて握った焼き目のついた握り飯を持参、向うでの生活のための食糧も持参した。東京まで二日で行ければよい方。渋谷駅で切符を買うために脱いだ毛糸の手袋の片方を、さっと横から掏すられるような物騒な時代であった。

その後、私も栄養失調で帰宅療養となり、やっと地獄のような生活から抜け出せた。卒業式にも参加できなかった。式は、寮の食堂の薄暗い土間で校長、引率教師、残留卒業生だけでひっそりで行われたという。

その年には岡山空襲もあり、体調が好転して父の任地九州へ移動中には広島原子爆弾の洗礼をも受けた。悪夢のような体験

であった。同級生達はこの学徒動員を播磨地獄と呼んだ。

今も相生駅を通る度に四十数年前のそのころのことが思い出される。

戦中、戦後の生活では、食べられる物は何でも食べた。河原や藪を開墾し、小学校の校庭もいも畑と化していた。なんきんの収穫期には、なんきん飯になんきんの煮付け、なんきんの漬物、それが続くと目まで黄色になった。戦後しばらくはなんきんを見るのもいやであった。塩不足で吉井川河口で潮水を汲み調味料とした。岩かきや蛭しじみは上等な食べ物であった。鶏に卵を抱かせ、屋敷の中に放し飼いにして雄鶏は肉用とした。鶏も自然に還るとかなり飛ぶことを知った。嚴重に配給制度を守った警官が餓死したニュースもあった。

このような時代、親は子のためにと自分を犠牲にして子を育てた。戦争は今のアニメやゲームで見えるような安易なかつこよいものでなくて、戦う人も、家族にも地獄である。再び私達の体験したような戦を繰り返してはならないし、人間が人間らしく生きられる今の世のありがたさを子達にしっかり伝えて行きたいものである。

今の豊かな自由な生活や子育てを見るにつけ、自分達の体験した苦しみを子や孫に味あわせたくない気持ちが強くて、子ども達の心や体を鍛えることがおろそかとなり、その我儘わがままを助長

しているようにも感じられ末おそろしくもなる。

卒業式らしい卒業式の無かった昭和二十年度の同級生、平成二年十一月、六十一歳を迎えたのを記念して、旧中学校で卒業式を行い四十数年前の戦中の中学校生活・播磨地獄を回想し、なくなった仲間達を偲び、この平和な世に生かされている幸を感じ合った。

錦海湾干拓について



木 下 友 次

- ・ 大正四年（一九一五）生まれ
- ・ 福 元
- ・ 前邑久町長

一、錦海湾名称の由来とその今昔

小林久磨雄氏編「邑久郡誌」の「錦海八景附多麻の浦、尻海八景」の項の「長浜村古老聞書」に「神功皇后三韓御征伐時代、このわだを錦海浦と名付け給ふ」とあり。「ほのぼのと立登る日の浦波は海士の小舟も錦なりけり」の和歌が併記され、また別の項には万葉集卷十五の「ぬまたまの夜は明けぬらし多麻の浦

にあさりする田鶴鳴き渡るなり“の和歌も載せられている。これらの点を考える時、この地域が風光明媚な海域として古くから知られていたものと思う。そしてまた、尻海の地が錦海湾という良港によって海運業でも栄えていたことが史実に明らかである。しかし、時の流れ世の変わりは何れの地も同じである。近代に至り、錦海湾を基盤として沿岸漁業に励んでいたこの地域の漁民たちにも、時代の変遷の波は押し寄せてきた。その様な社会情勢のもとに、この地域の農漁民の生活安定のための施策として、昭和五年から約五年間で玉津地区東端の通り山開墾が実施され、約二一haの農地が造成され、主として尻海敷井の農漁業者に配分し、その耕作により生活基盤向上を図る為の施策が図られた。

折しも敗北に終わった太平洋戦争後の不況下にあつて、特に日常生活に欠くことのできない食塩の需要が非常に窮屈となり、小学校庭の少しの空き地を利用し塩田の真似事をして水をつくり、その要を達するようなことも行われる状況下にあつた。以上、往古からの錦海湾を振り返ってみたが、比較的穏やかなこの湾内で生計を樹ててきた漁業者は、他の地域の同業者がある程度遠隔の地へも出漁していたのに比し、そのほとんどが錦海湾での漁法に終始していた。しかし自然環境の影響による漁場の変化、また漁法や漁具の進歩により、従来のような錦海湾

内のみの操業では、満足を得がたい情勢に変わりつつあつたのもまた事実であろう。

なお、この錦海湾の最奥部になる長浜湾は、すでに大正八年十一月に干拓工事が実施され、農地として活用されていた。また尻海の入浜式玉津塩田約六haは、天保八年(約一五〇年前)すでにできていた。

以上述べたような状況下にあつて提起されたのが、錦海湾を干拓して東洋一の大塩田をつくる構想であつた。なお、述べるまでもなく昭和二十七年四月邑久町政が施行され、同二十九年には玉津村も邑久町に吸収合併され、その行政の一切が邑久町において処理されることになつていた。

二、錦海湾干拓の議興

この一大事業を構想し計画を樹てられたのは、当時(昭和二十七年)香川県坂出市商工会議所会頭であり、塩業界では岡山県塩業連合会長、香川県塩業連合会理事、その他塩業会社代表として活躍されていた坂出市の田畑久宣氏(後の錦海塩業KK社長)であつた。

錦海塩業KKの資料によると、当時田畑氏は、常に想を日本塩業界の将来に馳せ、国民生活必需品として最も貴重な食塩の絶対量確保の必要性を力説し、機会あるごとにその抱負を提唱されてきた。折しも政府において、国内塩自給に関する国策が閣

議決定をみるに至ったので、田畑氏の新塩田開発に対する熱意が不動のものとなり、瀬戸内海を扼する四国三県はもとより、山口・広島・岡山各県の海岸線を長期にわたり隈なく調査の末、邑久町尻海と、牛窓町師楽、及び長浜の海岸を抱擁する錦海灣五〇〇haが、氏の夢を託するに足る最敵地であり、その干拓こそが畢生の事業であることの確信を得るに至り、時の岡山県知事三木行治氏に新塩田造成の構想を披瀝し決意の程を開陳、三木知事より力強い賛意と激励を受けられたということである。

三、干拓の実現について

錦海灣を干拓し塩田にするということは、換言すれば主として尻海の、また長浜・師楽の漁業者の操業の場をなくするということであり、当然に反対運動があり、種々の意見も出てきたが、尻海・長浜及び牛窓の各漁業組合と企業側の熱意ある交渉の結果、大筋において計画同意に達し、企業側は昭和三十一年三月日本専売公社の許可を得て、錦海塩業組合を設立し、ここに錦海灣干拓の第一歩を踏み出したのである。もちろんこうした基本的な問題のみでなく、錦海灣が干拓されれば当然に尻海や師楽の港は無くなり、ただ単に従来通りの漁業経営ができなくなるばかりか、農業者の農産物積み出しその他海運の便も無くなり、地域住民の日常生活に及ぼす影響は、相当大であることが想像できた。しかしながら、前述したような当時の漁業を

主とした当地域の社会情勢からして、企業側の言う如く人間生活に欠くことのできない食塩を、それも東洋一の大製塩工場を設立するということは、此処に従業員として勤務できる可能性のあることは、一つの大きな魅力であり、干拓同意の主因となったことも当然であろう。しかしなお、一部漁業を継続する漁業者もあり、これらの人との漁港の問題等種々の交渉が行われ、ひとつひとつ解決への努力が続けられたのである。

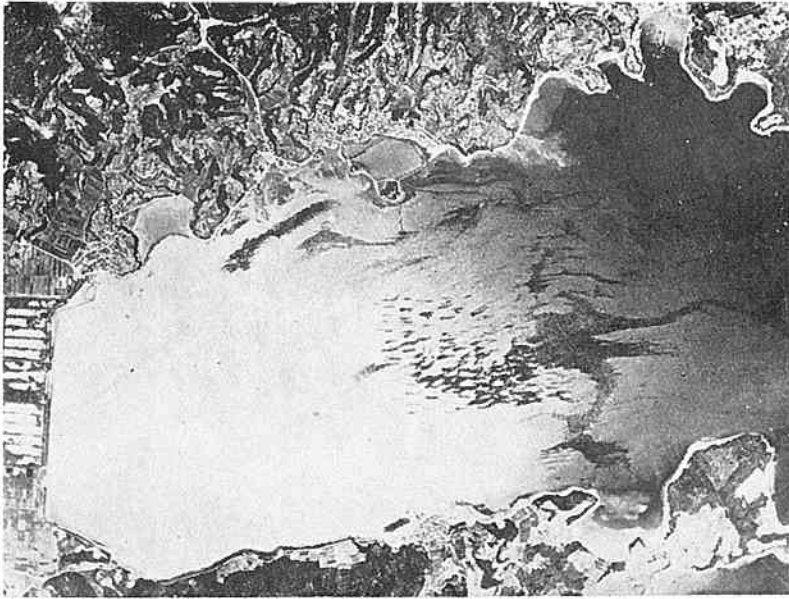
一方企業側は、錦海灣の海底が三〇mに及ぶ軟弱粘土地盤であることから、塩止め堤防工事の困難性を察知し、当時世界土木界に出現した米国の土木新技術サンド、ドレン工法を採用することとなり、米国を直接視察して確信を得、昭和三十一年一月十八日堤防築造の起式が行われ、三十三年五月二十六日、二、〇〇〇mに及ぶ大堤防築造ができたのである。その後八月十二日、突然堤防中央部三七〇mが沈下する大事故が起きたが、短時間に修復され、製塩工場の建設とかん水採取の枝條架が設置された。しかし枝條架で濃縮されたかん水が風に飛散して、周辺の農地や農作物に塩害を与える心配がもたれ、この件に対する関係者の対策協議等、種々の問題がなお続き、町執行部・邑久町議会錦海灣塩田化対策特別委員会・関係住民と企業側との交渉が持たれ、問題が一つ一つ処理され、錦海灣干拓が成就し東洋一の製塩工場が完成したのである。

四、付記

以上錦海湾干拓が関係者の非常な熱意と努力により成就したその概要を述べたが、最後に次の事項を付記する。

①昭和四十二年四月八日天皇・皇后両陛下下行幸啓

昭和三十四年七月五日秩父宮妃殿下御台臨



埋立前の錦海湾



堤防締切完成歡呼



錦海塩田全景

昭和三十七年十月二十一日高松宮妃殿下御台臨

②イオン交換膜採鹹法により五〇〇haの塩田は使用中止となった現在、一日も早く企業側は勿論、関係地域発展のため塩田跡地が有意義に活用されることを願うものである。

③この記録を書くに当たり錦海塩業KK並びに尻海の小山秀一氏(当時の町議会議員で特別委員会委員)より資料並びに助言を戴いたことを、付記し感謝する。

空襲と女子挺身隊



山崎 房子

・大正十三年（一九二四）生まれ
・福中
・愛育委員
・農業

爆音を微かに耳にしたのに、空襲警報が出ない。不思議に思
いながらも手さぐりで、身支度をして外に出た。山に囲まれた
小部落の一隅から、伸び上がる様にして四方を窺った。山と山
の間の狭間からの西空が昼の様に明るい。瞬間バラバラと花火
が降っているような光景が目に入る。一段と西方全体が白色に
輝いた。夜空に美しい光の乱舞に我を忘れて見とれていた。昼
間の空襲に逃げ廻っている私には、想像すら出来ない異様なま
での心理状態だった。焼夷弾投下を受けた昭和二十年六月二十
九日の岡山空襲の様子である。忘れもしないこの日は、工員
の給料支払いを済ませ、公休で帰郷していた夜の出来ごとであ
る。

真珠湾の奇襲で始まった太平洋戦争は、高女を卒業した年の
十二月八日である。初戦の輝かしい幾多の戦果に、神国を信じ

ていた国民は、唯ただ新聞紙上や号外の報道に酔いしれていた
と思う。シンガポールの陥落が報ぜられて間もなく、米陸軍機
による日本本土初空襲が報ぜられ、ミッドウェー海戦以後から
戦いは不利な状況へと追いこまれていった。でも日本は神国だ
との、元寇の役における神風を思い起させ、敗北は微塵も考え
られなかった。

その頃学校では、軍需産業奉仕と、南方の皇軍兵士の労苦奮
戦を偲びながら、暑さ避けの帽子の垂れ一途にミシンを踏んで
いた。規格寸法厳重だった。

日中戦争にも北支に従軍し、太平洋戦争にも一年余り北満方
面に出征していた父も、復員してからは銃後の護りに精出して
いた。区長という世話役をしていたある日、勤労挺身隊動員の
人選を受けて帰った。二十五歳未満の未婚の女性との条件が広
まると、勤めに出る、婚約したなど動員を嫌う話が耳に入って
くる。

應召の軍人と同じように小学校校庭で盛大な壮行式を挙げて
頂き、牛窓、鹿忍、裳掛、行幸の四ヶ町村二十余名揃って、昭
和十九年二月二十日に三菱重工業水島第七製作所に入所した。
荒壁の寮より点呼を受けては、挺身隊の歌を合唱しながら、実
習工場へ行進する。工場では馴れない手に、ハンマーややすり
を持って基礎実習に精を出す。「勝つまでは、勝つ日まで」と一

生懸命だった。汗を流しながら働き、夕方帰る寮は、昼間の様子話を話す者、流行の歌などを歌う者と、家庭的な雰囲気があった。当時の水島は埋立地で、現在と違い寒さむとした所で、霜焼けした皮膚が紫色となり、崩れて幾日も水が使用出来なかったのは生れて初めてのことだった。実習工場も二ヶ月くらいして、それぞれの持ち場へ配属されて、一緒に入所した友達とも別れてしまった。工場内は組立工場がいちばん遠い所にあり海に近かった。私は給与課で工員の賃金計算の仕事が与えられた。

戦況は次第に激しく、サイパン島の守備隊の玉砕が報ぜられる。大都会からの学童の集団疎開が強制され始める。マリアナ沖、つづいてレイテ沖海戦には、大きな打撃を受ける。

明けて二十年には東京大空襲があり、原爆を除いては、最も大きな惨害であったと伝えられる。空襲が本格化した十九年十一月から終戦までの九ヶ月半、日本空襲に飛来したB29は、延一七、五〇〇機、投下した爆弾は一六万トン等恐るべき数字である。

重工業である故、覚悟はしていたものの、毎日の様に警報が出る。空襲のサイレンで外に飛び出る。少しでも工場より遠くへにげなければと、皆一目散だった。記憶していないが或る日、空襲で飛び出すと、頭の上にB29が二―三機、黒い大きな機体が不気味で、上目づかいに飛行機との角度を計り胸を撫でる。

付近の野菜畑の中に腹這いに伏すが、何の物陰もない所である。この日工場内の重要な箇所投下があり、被害も大分あった模様で、事務関係はもちろんのこと、寮の人も安全な方面へと移転していった。空襲の場合の逃げる方面もたび重なる程に変わっていった。最初は山の方へ走り少しでも繁みの中へ、機銃の時は川の辺りがよいなどと、水辺の草むらに隠れて警報の解除を待っていた。空襲と言えはあの黒い巨体が覆い被る様で、死にもぐるいに逃げ、今思えば友達のことなど考えられなかった。でも死を恐れるゆとりもなかった。

八月六日のB29が投下した五トンの原子爆弾一個が、広島を一瞬のうちに粉ごなに、一面の焦土と化した。放射能は人も建物も焼き、爆心地では壁に影しか残らない高熱であった。長崎までは行けない人でも、広島へは日帰り、資料館や慰霊碑に冥福を祈られたことでしょう。原爆は戦争を終結させ、世界の歴史を変えたが、被爆者に悲惨なケロイド、貧血、白血病などの原爆症と、死への恐怖が残された。ノー、モア、ヒロシマは世界の平和運動の合言葉となった。

昔から日本本土が戦場と化したことのない国民は、悲惨さをも身を持って体験した。平和憲法を守り貫き通すことが、世界に対しての我国の使命である。

楽しい希望を持って、友との交わりを深めながら過ごしたい

と思っていた青春は、戦いに始まり戦いに終わった。過ぎ去った日々の事ごとはほとんど薄れて五十周年。幸いに戦争での被害は受けず千町平野は豊かである。激動する社会情勢、高齢化の進んでいる今日、緑の美しい山野を守り、老いも若きも、お互いが相手の痛みを分け合える心のゆたかさを培い、安らぎのある文化のかおりを次代へ引き継ぎ、後世に伝えたい。

この様な体験は町内の方の中に大勢いらっしゃると思います。他町生れの私が依頼をお受けして申し訳なく思っています。

邑久公設市場物語

上 山 富 士 夫

・ 大正二年(一九一三)生まれ

・ 岡山市(元・尾張)

・ 元県経済農業協同組合連合会

畜産部長



昭和の時代は激動の時代といわれ、語り継がれている。経済不況から満州事変、十年代には支那事変から日米戦争と不幸な時を過ごしてきた。

私は昭和二年不詳月薄井正雄邑久村長によって誕生した。そ

の名を邑久公設市場と申します。農村地帯におけるマーケットとしての役割を果たすことになったのです。

衣食住を満たすため流通のメッカとしてそれぞれの商店が入居した。

*一番に紹介したのは、洋服仕立てをされていた長瀬警氏(邑久村大字山手一四八一)。彼のところには、村の考古学に興味を持つ仲間があつまって土器の破片をいじり眺める様子をよく見かけたものだ。

*八百屋さんといえば、むこうハチマキの勢いのよい人を想像するものだが、もの静かな大声ひとつださない人・河本重吉氏(旧雄神村河本出身)が奥さんと経営、毎日毎日が忙しい。市場の中を活気づけて頂いたものだ。河本氏は政治活動もかなりなもので、もの静かに党员としての活動は誰しもが知るところであった。黒田寿男代議士、太田敏兄先生もよく市場に出入りされてきたのが強く印象に残って居る。

*菓子屋とは駄菓子から高級菓子、カリントウ、ポーロ、大正生まれの人はみんな懐かしいものばかり。店主・立岡義夫氏(邑久村山田庄)店員は常時二名で営業、美人の看板娘は店の繁栄をもたらせたものだ。昭和三年から四年当時の運搬は自転車か、リヤカーが一般的に使われていた。立岡菓子店の生菓子は西大寺市金岡の山下製菓店より入荷。毎日同じ時刻に、お尻に荷台

のついた自転車にモロブター〇枚から一二枚を積み重ねてとある菓子屋のお兄さんの様相はひとつの風物詩であった。

店主・義夫氏は晩年白内障で視力が低下したため弟の立岡豊氏に店舗経営を委譲した。

*大島唐器漆器茶舗として京都から九州別府まで名声の高い店であった。店主・大島直義氏（邑久村尾張）は高級料亭向きの漆器が並び、店舗で静かに玉露茶を飲む姿は温厚な人柄像を伺うことができた。その人柄を慕い村内の名士がよく彼を訪ねてきていた。

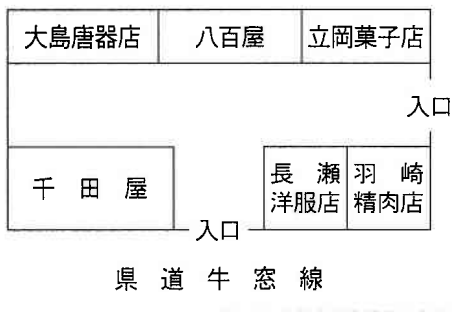
その話題は政治経済と地域振興、生活環境であったようだ。いま風にいうならば邑久村の永田町とでも言えるであろう。行政批判が論議されていた。

*公設市場に入って、左側に酒類・荒物・雑貨・種物の店として我が千田屋が位置していた。石橋をたたいてでないと渡らないほどの性格を持った店主・上山喜代治と妻の鶴子と二人で経営。特に妻の鶴子が店の切り盛りは任されていたのと、素朴な性格が人気を呼んで九十歳になるまで店を守り続けた。

そのバイタリティには敬意を表したい。

*羽崎精肉店・骨格隆々とした大柄な店主であった記憶しかない。

*店舗配置略図



*開設以来六十年にわたり邑久村を中心に周囲の村の物流拠点としての役割をはたしたが、そのあいだには満州事変、支那事変、大東亜戦争と続き厳しい世相に当面した。

そうした中で経営は、困難を極めていった。

毎日のように滅私奉公の白ダスキの若者が戦場へと送られていく時代、商売繁盛とはいっておれない。生活物資の不足時代を経験した。

「供出」という言葉は、その時代の我々をいかに戦争に駆り立てたことか、勝つまでは負けられません。

あらゆる金属の供出、通信機材・電話機・農耕用の馬までも

徴収されていた。すべての物資は統制下に置かれてチケット性の物流機構に耐え、昭和二十年終戦を迎えた。それからが大変。九月には吉井川決壊、大洪水に見舞われ困窮この上ない。

昭和三十年代になって、ようやく正常な商業活動、経営に向かったが店主の高齢化は世代交代を余儀なくした。

長瀬洋服店の閉鎖にともない、その後は大島唐器店陳列場として生まれ変わる。

立岡豊氏継承の五月人形・雛人形の陳列棚は市場内を華やかにしてくれた。

羽崎精肉店は長男によって引き継がれたが間もなく工場勤務で店を閉鎖。

この頃指庄とマッサージ営業を西大寺の岡朝吉氏開店。

河本重吉氏のかわりを林真一氏が丸一青果店として営業を始めた。また、表装・表具師山本鼎氏によって文化的営業をもたらした。

県道邑久・牛窓線の整備拡張計画（昭和六十一年一月）が岡山振興局から示され、これに協力することを地権者一同が賛成、現在の個人商店として生まれ変わったのである。

昭和二十年の大水



日下 喜美子

- ・ 大正十三年（一九二四）生まれ
- ・ 北島
- ・ 主婦

毎日の降り続く雨で、大水が来なければよいがと年寄り達が言っている。大水の経験がない私は、まさかと思っていた時、昭和二十年九月十八日の朝、吉井川の堤防が切れたという情報が流れてきた。

食糧、布団、衣類等必要な物は、家の二階や、近くの高い所にある親戚の家にリヤカーで運んで預かってもらった。

ちょっと落ち着いた頃、部落の人達は誰からともなく、私の家の西の小高い稲荷山に登り、東の方を見た。千町平野が水で白く見える。「水だ、水だ、あれが水だ。どのくらい来るかなあ。」と言いながら、まだしばらく見ていた。大橋の近くに水が来た頃、家に帰り片付けを始めた。

どうしたら良いのか分からない。畳を台の上のせ、次々と家財道具を台の上ののせる。

一時間もすると(午前十時過ぎ)水は音を立てて侵入してきた。

それから、あつと言う間に、水はぐんぐん増してきた。台の上ではどうにもならない。台を上にとあげた。そのうち、どうにもならなくなった。

東隣の家の女、子供達五人が避難を始めた。私の家と隣の家とは五十mぐらいある。家と家の間は急流となって、東北から南西へと流れている。そのとき、大きな堆肥の山が流れてきた。

危ないと思った時、五人は堆肥もろとも流された。

私が助けに行こうと泳ぎかけると、父が「おまえではだめだ、共に死ぬ。」と言う。私は二階にかけあがり、大声で「隣の者が流された。」と何度も叫んだ。山際に待機していた部落の青年達が、川舟で助けに行った。一方、阿部先生

は、長い竿で子供一人を助けてきた。そして、舟の方も全員を助けてきた。

そのうち、水は私の胸のあたりまできた。私は、母と祖母の手をつなぎ、棒の杖で溝や川を探りながら、おそろおそろ高台にあるクラブ(田淵部落の公会堂)に避難した。家を出る時、台所の戸棚等が、ゴロゴロ、ガラガラと音を立て、ひっくり返っていた。

クラブの窓から外を見ていると、堆肥に人が乗って流れてきた。その人は、私の家から二軒東の太田さん方の建前をしたばかりの家に乗り移った。部落の人達は、また舟を出して、その人を助けた。と同時に、その家はポカリポカリと流された。後で聞くと、門前まで流れていたという。

戸、家財道具、竹、木、鶏、牛、等々なんでも流れてきた。山



当時避難した田淵クラブ

際の人達は、いろいろのものを拾って、風呂焚きがたくさんできたと言っていた。

私の家の前の阿部さんの家は、最後まで片付けをしていたので、家から出られなくなった。そこで、部落の青年の人が山際の木に綱をくり、片方を阿部さんの家の裏の柿の木にくり、屋根の上から出た。子供はおんぶして、綱渡りで三十mぐらいのところを避難した。その間も大きな物が流れてくるし、ものすごい急流なので、部落中の人で声援した。

夕方頃、水は天井までできていた。

夜は、二階住まいの人々のともすローソクの明りと、こうこうと照らす月の光で童宮城のようだった。

二日たっても、三日たっても水はひかない。その間は、部落のつかっていない家からや、舟で支給されるお握り弁当と軍隊の支給した毛布でごろ寝の籠城生活だった。

六日目に、やっと家の中に入れた。家の中は戸棚も家財道具も水浸しで、散らばり、ひっくり返って、足の踏み場もなかった。天井には、浮き草がいっぱい付いていた。一部屋一部屋、中の物を外に引っ張り出し、門いっぱい広げて、何日も何日も干した。

今年米がだめだからと、各地区の農業倉庫の濡れた米を少しずつ貰ってきて、干して食糧にした。私の家は、父母が百姓

だったので、食糧には困らない方だった。各地からの配給もあった。

大水の後は伝染病が出やすいから注意するよとの回覧板が回り、なるべく煮物を食べるようにした。

畳は無し、座敷の上に薄べりを敷き、毎日の片付けでごろ寝同然の夜が続き、みんなは疲れはてた。

やっと落ち着きかけた十月七日、二度目の大水が出た。水の高さは、床上一mぐらいだったが、雨と風で壁が全部落ち、外の焼き板をはがすと、ギイス小屋のようで、表から裏まで見通せた。今度は片付けも早かった。

稲秋も近づくし、みんな一生懸命復旧に頑張った。

その年は米も取れず、終戦直後でもあり、二三年は苦しい生活だった。

大水は、まだ何年か毎にやって来ている。早く大水が出なくなることを祈る。

昭和五十一年 大水害の回顧

木 下 友 次

当時の記録によれば、昭和五十一年九月三日のグァム島南東の洋上に発生した熱帯性低気圧は、翌四日十五時に台風十七号に発達し、ゆっくり北西進しながら次第に勢力を強め、八日九時には中心気圧九一〇mb、最大風速六〇m/sの大型で非常に強い台風になった。その後、九月十三日頃まで、太平洋上の、あるいは大陸の気象状況に影響されながら、ある時は停滞し、また北西進を繰り返し、特に九州南西部の海上に長時間停滞したため、中国地方東部にも連続的に大雨を降らした。その影響は、当然邑久町にも大きくおよび、昭和二十年終戦直後の吉井川堤防決潰の際の大水害に次ぐ、大いなる被害をもたらしたのである。何しろ、大雨注意報が岡山地方気象台から発令された九月八日午後から、警報解除になった十三日午後までの降雨量の集計は、邑久町役場五六二mm・虫明観測所七八五mm・長島気象観測所九七六mm・正味五日間で、実に一ヶ年分を越すような大雨が降ったのである。

こうした当時の異常な気象状況と、これによって蒙った災害の状態と、その対応の次第については、二年後の昭和五十三年

九月に「台風十七号の災害記録」と題した冊子を発行し、邑久町内の当時の全世帯に配布し、将来の災害に備えるべく対処したのである。

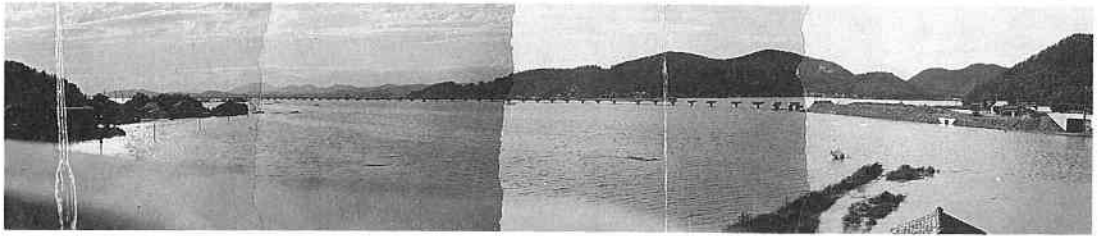
この災害記録によれば、九月八日十五時三十分岡山地方気象台より大雨注意報発令、そして十日八時二十分には大雨洪水警報に変わり、こうした情勢に対応して町役場も、当日七時から水防警戒態勢をしいていたが、十七時には邑久町災害対策本部を設置して防災に備えた。そしてこの頃から(十日十七時)次々



と被害の情報連絡がはいりだしたのである。
まず一番にはいった連絡は、虫明地区の小河川氾濫による池田部落に浸水被害が出始めたこと、そして消防団裳掛分団の出動であった。これより九月二十日九時災害対策本部を解散し、平常業務に服するまで、まさに戦場のごとき明け暮れを過ごしたのである。

海岸地帯はもちろん、山間部・平野部を問わず町内全域に家屋倒壊や浸水被害あるいは山地崩壊・道路決壊・河川氾濫等あらゆる災害が起き、電話によるこれらの連絡通報と対応指示のため、昼夜を徹して酷使した電話機が、遂に故障を起こす程の状況であった。今そうした当時のことを想起する時、誠に無量の感慨を覚えると共に、いろいろの事態が思い浮かんでくるのである。今それらの中から特異なもの幾つかを次に挙げる事とする。

- 一、九月十二日災害救助法適用決定。
- 二、千町平野全域の浸水（佐井田消防署西



前の県道上、俗に水越しという位置では、道路上の水深一・八メートル）また山地崩壊箇所が相つき、町内の交通が非常な被害を蒙った。

三、自衛隊の出動を要請し、救援活動を受けた。

四、長島愛生園・邑久光明園とも、がけ崩れ等のため病棟・家屋倒壊・水道管破裂のため断水、停電、県警無線隊が町役場を中継地として連絡・自衛隊・玉野海上保安部・消防団による救援活動。

五、九月十二日から十七日の間、倒壊家屋・浸水家屋の住民四

一人、延べ一、七二八人を避難所（町内の中学校・公民館・地区公会堂その他計二九ヶ所）に収容保護、延べ二四、九八一食分を炊き出し供給した。

六、河川堤防決潰や山地崩壊防止のため、土のう・杭・山土等の確保配送に非常な努力を要したこと。（土のう三二、〇〇

〇俵余）

なお、被害の数字的概況は次のとおりである。住家全壊二四（うち愛生・光明一〇）半壊四七（同一四）床上浸水四五六、床下浸水一、五二六（同一三七）土木関係では河川五五ヶ所、道路一〇八ヶ所、その他農地や農業用施設（水路・ため池・橋など）にも約三〇〇ヶ所近い被害が出た他、治山・林道関係で三三ヶ所また玉津・裳掛の教育施設にも被害があった。この他折しも開

花期であったため、甚大な影響を受けた水稻の被害は町内全域に及び、流失、埋没、冠水により一、〇九七ha当時の算定被害額約八九八、九三三千円その他、野菜・家畜等はもちろん商工関係では商品の浸水・流失で甚大な被害が出た。

以上は被害状況の一部の概要であるが、これに対しその事後措置もまた大変であった。先ず防疫のための消毒を約二、〇〇〇世帯に実施の他、し尿・ごみの収集・障害物の除去等の他、産業土木等関係法令に従っての事後の救援対策に努力を重ねたのである。

以下災害に対する反省と事後措置についてその概要を述べる。

一、邑久町の地理的な面から見た今回の風水害について思う時、特異な点は千町川は海拔零地帯を東西に緩流し、堤防の無い用排水両用の川であり、水稻成育期は川水の調整が非常に複雑である。幸いにこの時制定された「河川激甚災害対策特別緊急事業―激特事業―」の対象になり、河口での強制排水施設、河道の拡副、用排水分離対策等、抜本的な改良工事が進められつつあり、一日も早いその完成が待たれる。また千田川については、放水路、河道の改修と強制排水施設が施工された。関係地域の人々の用地提供その他の協力があつた。

二、岡山ブルーハイウェイの建設工事中であり、排水に支障を与えたのではないかと町民の方々に心配を掛けた。

三、千田川等堤防決潰、あるいは堤防上の溢水を防ぐため、両側の堤防上に土のうを築いたので堤防の両側の集落のかたがたに非常な心配をかけた。

その他書けばなお多くのことがあるが以上で止め、最後にこの際の大災害に対して、県内外から寄せられた多大の義援金品（義援金二三、七九七、九五〇円の他毛布その他）をうけたこと。自衛隊・国・県の関係機関の懇篤なる救援活動等、いまもって忘れることはできない。そして、消防団を初め町内の関係各位のご協力に、衷心より感謝申し上げる次第である。

赤穂線開通迄の経緯



太 田 孝

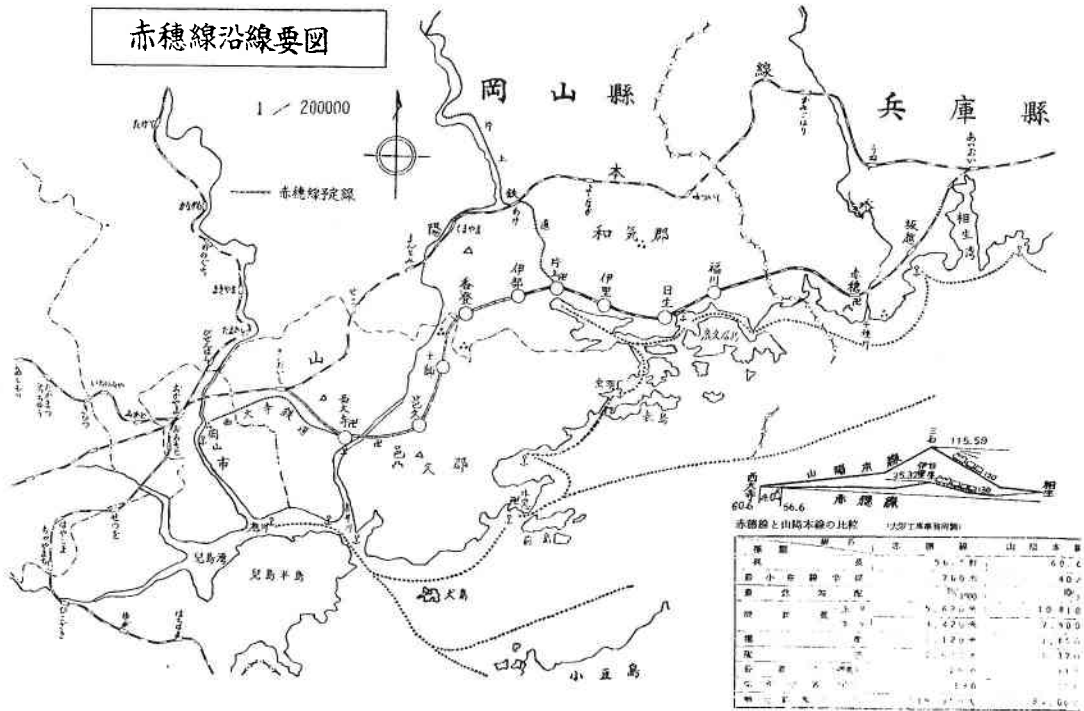
- ・ 大正十三年（一九二四）生まれ
- ・ 大 富
- ・ 農 業

赤穂線は、山陽本線相生駅から分岐して、赤穂、日生、備前、長船、邑久、西大寺を経て山陽本線東岡山駅に至る延長約五七kmの路線です。昭和十二年にその建設計画が議会を通過して以

来、戦局に災いされて昭和十八年相生〜赤穂間工事中に中止され、戦後昭和二十五年に工事再開、二十六年十二月相生〜赤穂間が開通しました。引続いて、昭和二十七年八月赤穂〜日生間が開通され三十年三月開通し日生〜備前伊部間着工、その後、長船、邑久、西大寺、東岡山と一括工事が出来、昭和三十七年九月全線が開通しました。

かねてより噂になっていた赤穂線延長工事が岡山県内に入り備前市に達するようになった昭和二十九年十一月頃、長船町、邑久町、西大寺市、岡山市の予定路線の概略が判明すると、路線予定地及びその周辺の人々の不安が募り、各部落で反対運動の気運が起りました。そして、地区が連合して「邑久町農地擁護連盟」をつくり、町と国鉄当局に「我々被害者の生活権擁護の為、鉄道敷設反対」を申し入れ善処を求めました。当時、農地は農民の生活の基で米は命でした。その農地が無くなり住む家が立退きになることは、「国鉄、県、市、町」民多数の為とはいえ、耐え難いことでした。

反面、誘致促進派の人達は、昭和二十八、九年頃より「赤穂線促進期成同盟会」をつくり、会長に岡山県知事・三木行治、副会長に西大寺、赤穂、岡山、備前、相生の各市長を、常任委員に邑久、長船、牛窓の町長及び各町議長を置き、国会、運輸、国鉄に強力な誘致運動を行っていたのでした。すなわち、赤穂線



は地区を挙げての請願線であるという訳でした。

町当局も議会に赤穂線特別委員会をつくり、各地区に地区審議会を置き、度々会議をされ問題を検討、その都度回答されましたが反対同盟の納得するに至らず、邑久町農地擁護連盟は、考えを同じくする西大寺農地擁護連盟と一体となり、昭和三十一年一月二十七日代表を上京させ、本庁の宮沢計画課長に面接、反対陳情を行い、二月一日邑久町長並びに西大寺市長に対し赤穂線絶対反対を申し入れたのです。

二月四日国鉄大阪工事事務所の小田所長より促進期成同盟会に「地元の反対陳情書を取り下げざるかぎり、本年度予算を考慮し得ず。」との本庁の意向伝達があり、驚いた西大寺市、邑久町当局は、擁護連盟に反対陳情書取下げを要求してきました。

この促進派、反対派の一番緊迫した時、幹旋調停に乗り出してくださったのが黒田寿男弁護士でした。早速帰岡された黒田弁護士は、邑久町農地擁護連盟の会合に出席され、連盟員の意見を聴かれ、「自分の考えとしては、赤穂線は県民、郡民、町民が町議会、県議会、国会に請願して通すことになった路線であって、今、絶対反対運動を推進してもどうにも成らないのではないか。むしろ、被害者の生活権擁護の条件闘争に切り替えてどうか。もしそうなった時の要望事項はどう言う事か。よく考えてみていただきたい。」との話があり、出席した連盟の人も

静粛に聴き入りました。

昭和三十一年二月十三日の夜、西大寺会場と邑久会場で同時に会議が開かれ、誘致側の市町当局と農地擁護連盟、幹旋調停の為出席くださった黒田先生（西大寺会場）、黒田先生の代理の野崎先生（邑久会場）を交え、黒田幹旋案で徹夜で検討され、双方この幹旋案を受入れる事で了承しました。擁護連盟側は絶対反対陳情書を取り下げる、町当局は連盟側の要望事項を受入れるという事で、二月十四日早朝妥結しました。

後に出された要望事項の一部を書き上げます。

- 一、被害農民に代替地を確保し必ず与える事。
- 二、残地補償を行う事。
- 三、立退き家屋、側近通過家屋に十二分な補償。
- 四、買収用地の課税は、国鉄が町が負担する事。
- 五、鉄道敷設によるあらゆる施設面は、地元の意向を十分尊重取入れる事。

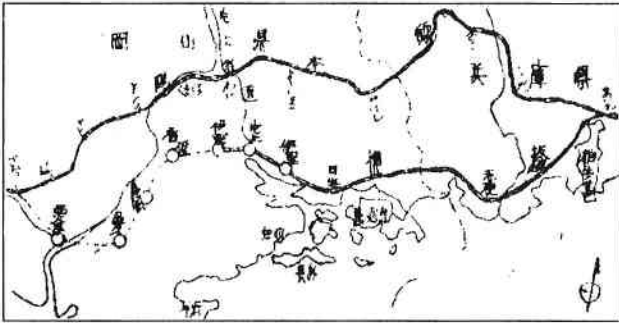
六、その他、町当局に手渡した契約書の締結事項並びに要望事項も、必ず実施の確約を致す事等。

これで赤穂線敷設問題も大きな山場を越え、その年度の予算も取ることができ、敷設に大きく踏み出す事になったのです。その後も代替地配分問題、淳風小学校移転問題、大富県道陸橋、大富簡易駅設置問題、水利関係など、いろいろの事が山積みし

ていましたが、農地擁護連盟の各役員の方々が国鉄、町当局の方と協議を持たれ、最善を尽してくださいました。その人達も、今は大部分の方がこの世を去られました。ご冥福をお祈り致します。

なお、赤穂線全線開通は、昭和三十七年九月でした。農地擁護連盟もそれと共に消えて行きました。

まだまだ書き足りない事が多くありますが、紙面の都合で筆を置きます。



ランプ



出 井 艶

- ・ 明治四十一年（一九〇八）生まれ
- ・ 上山田
- ・ 無職

ランプというあかりのことを考える前に、ランプとはいつころから言い出したものか。日本古来の名前ではなくて、昔は洋燈といったらしい。ランプは油を入れるつぼ（容器）、じざい（吊す）、笠（光を上のがさない）、ほやで役目を果たすわけで、ほやには二分、五分の別があり二分の芯、五分の芯、芯は布製で特別のものだったらしい。芯の幅により火の大きさを暗い明るい別の別ができる。どこの家庭にも昔もののランプのひとつくらいは残っていたと思う。

けれど、現在のような日進月歩の世の中では、むかしの遺物として厄介もの扱いになっていることだろう。これらのことは、今を去る七十七、八年ほど前、明治の末期から大正の初期のことと思う。

カンテラに比べランプは格段の進歩で重宝なものできたも

のと、当時の人達を喜ばせたものだった。日が暮れるまで野良仕事をして帰ってくる大人や両親を、外の薄暗いところで待つ心細さ。

やっとランプに灯がつくと、急に明るくなって、おのずから気分も晴れたものであった。

ランプにはつるすランプと置きランプがあった。置きランプは少々高級で、今の電気スタンドの前身とも言いますか。つるすランプには、ほやの大きさにより、二分のランプ・五分のランプがあって、平素の家庭用の二分のランプ。五分のランプは何事がある時（部落の集会とか御客様の接待とか）。

日常には、ほとんど二分のランプを使っていた。

このランプのほやも石油のかがりで、すすがつき光をさえぎるので、ほやの掃除は子供の役目であった。紙をもんで柔らかくして細長い筒の中の掃除は、子供なりに頭を使う。棒を入れて紙と一緒にグルグル回したり、時には『ほう』と息を吹き込んだりしたものだ。五分のランプの掃除は筒の中が大きいので、私は掃除はお手の物。私の手が細くてやせているものですから、ほやの中にすっぽりと手が入り、くぼんだところまで手先が届き、きれいに拭けたことが自分なりに嬉しかったことを今でもよく覚えていいる。二分のランプでも結構よなべをしたり、私も本を読んだりしたもので、二分と五分のランプは当時の生活に

はなくてはならないものであった。

その後大正八年頃電灯がつく時節となり、何と便利なものか。日が暮れかかるころともなれば何もしなくても各戸に明るいまばゆいような電灯（十燭光）があつた家にもこの家にもまばゆいほどの光を放ち、何とありがたいことか、もったいないと思う気持ち、今も思い出される。

私どもの年輩ならこそ、こんなありがたいさを味わせてもらえ

る。
明治、大正、昭和、平成と今日まで生かされたありがたいさに感謝しつつ今後の明るい社会に住まわせていただきたいものである。



昔の服装



原 田 道 明

- ・ 昭和三年（一九二八）生まれ
- ・ 北 池
- ・ 農 業

テレビの時代劇を見ると江戸時代の土農工商といわれた当時の服装が一目でわかり楽しい。

その服装は、農民の場合昭和の初期まで続いた。私ども子供の頃、江戸末期から明治初期の生まれのおじいさん、おばあさんの衣服は、時代劇のとおりであった。私も大きくなったら、おじいさんのような格好で百姓をするのかなあと思ったものである。

当時のおじいさんは頭にすげ笠をかぶり、シャツは木綿の長袖で、詰め襟のものを着て、その上に七部袖で尻がかくれる程度の胴着をはおり、細帯で腰を締めていた。下着は越中褌で、股引をはいていた。この股引に特徴があり、小用をするにも大便をするにも一切腰紐をゆるめることなくすんなりと用たしができる、足首は紐でゆわえてあるから蟻やむかで等虫が侵入するこ

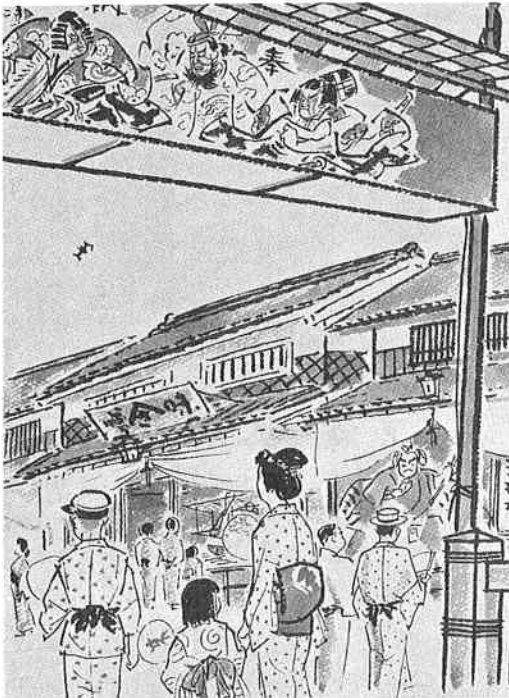
とがなく、冬分は風予防になり、とても便利であったが、一つの欠点は姿勢によっては越中褌がのぞき、それがずれておれば中身が見えたりしたのだが、風通しはよく非常に衛生的であった。足に藁草履を履くから、これも健康によく、水虫なんか寄りつかない。しかし山などへ行く場合は大変だったと思う。このような服装も、満州事変、支那事変と時代が進むにつれ変化し、兵隊さんの服装が農民にも普及して現代の様相になってきた。しかし大工さんは、江戸時代と変わらぬ腹当てにはっぱを着て、麻裏草履で、粋な姿が戦後も見られた。

私も海軍に入隊したとき股引を支給され、冬分ははいた経験はあるが、昔のとは違えば腰紐を解かねばならなかった。前垂れない褌は洗濯に手間をとらず、シラミの退治も早くできた。また胴着は、戦後何年かは綿入れのものを冬分には外套がわりによく着たが、百姓には大変便利なもので仕事の能率に大きな効果があった。

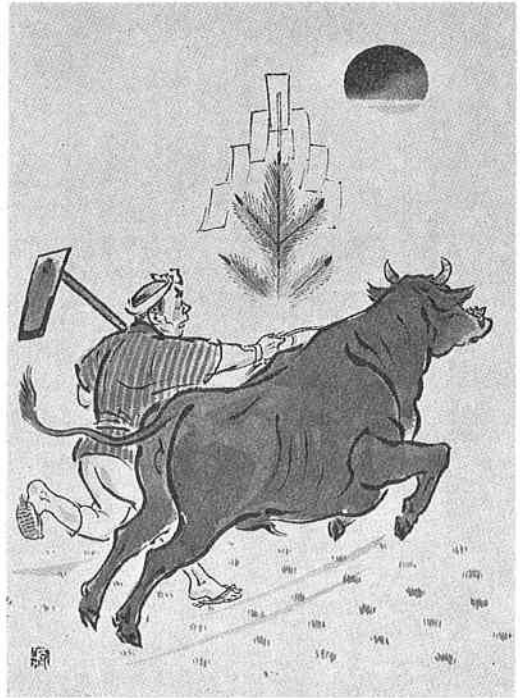
女の場合、百姓姿で特に印象深いのが田植えの衣装で、今でも後楽園等の御田植え祭の模様をテレビ等で見るが、あの様な派手な腰巻をのぞかしたのではないが、若い人もお年寄りも緋の着物をすねまでに着て、櫻をかけ、脚絆をつけ、手甲をはめ、横へ横へ手早く苗を植えていったものだ。大きな田んぼでは、途中で一服するとおばさん連中はその場でジャージャーと

音を立てて用をたしている。まことに便利なものであったが、このスタイルも戦争が進むにつれ紺のモンペ姿に変わり、戦後はおばあさんだけのものになった。百姓のおばさんの下着といえば、木綿の肌着に腰巻きだったから、洗濯竿は満艦色でにぎわったものだ。戦前の子供の服装については、「二十四の瞳の映画」で見ることができたが、幼稚園児は白の前掛に名札を付け楽しく遊んだ。女の和服は、昔も今もあまり変わらず、伝統が守られている。今では男の着物姿はあまりお目にかからないが、私ども子供ときは風呂から出ると、金時の印のついた腹あてをして、寝巻きを着せられ床に入った。また小学校へ入学してからは、やはり風呂あがりには、夏は浴衣、春秋には単衣、冬には綿入れの四ツ身着物を着て勉強した。そして、十五歳の正月には部落の青年団に入り、初めて羽織を着て宴会にも出席、生まれて初の酒を呑んで着物を汚したものだ。

冬、部落にはいろいろな講があり、月に一回連中が寄って会食していたが、その時の衣装が四季それぞれの着物で、くつろいで世間話をし、腹一杯喰ったものだ。和服は模様もいろいろで、ゆっくりくつろげる特徴があるが、洗濯が大変で仕立て直しも時間がかかり、手間のいったことで農作業で疲れた夜、夕なべで暗い電灯の下で、さるこを着て背を丸めて着物を縫っているおばあさんの姿が目につかぶ。



夏祭りの浴衣姿



男の野良着姿

家電製品の普及



本 田 智

- ・ 大正十三年（一九二四）生まれ
- ・ 大 富
- ・ 電気店経営

大戦で物と心のほとんどを失った日本人は、勤勉さを資本に基礎的な衣食住の回復を目指して働きつづけました。苦節十年、それらが少し好転して来ると、今日の経済大国をきづく先見の片鱗を見せて私たちが先ず選んだのは、まだ一部の国にしか存在していないテレビ放送へ。人々は充分でもない衣食住を置いて高度な知識と情報を得ようとしたのです。「兎小屋によりあつまってテレビに夢中の日本人」と題した漫画が世界中で話題になったとか。某西欧知名人が「衣食住の言葉をもちながら、冷蔵庫よりも先にテレビを選ぶ不合理」と語った話も有名で、必ずしも立派な番組ばかりではないこともあって「一億総白痴」との批判も多く、夢多き若いテレビ技術者は目標に塗られた泥を拭う思いで「見ている。今に一億総博士」と胸を張ったものでした。

貧しい中で国民のこの選択が誤りでなかったことを今更に世界へ誇りたい気持ちです。

工業製品世界一は、いまだしの当時、県下第一号第二号はアメリカ製二三インチ。技術よりも物の力で作られ三五万円とか、数少ない保守技術者が月八千円の時代です。やたら重くて修理に助手が付き、年数回は当たり前で壊れる物量国の未熟な大物に頼ったのも束の間、この頃国産開発の意欲はものすごく三年後に、元町長奥田真須二さん宅へやって来た邑久町最初のシャープ一四インチは、小型ながらも充分の性能で、風土にも合うのか故障に至っては比較にならぬ堅実さで、技術者等を良くぞと唸らせました。

大阪局受信の大きなアンテナを高々と上げ、給料の一ヶ月分を越す一四万円以上とまだ高嶺の花でした。岡山市で外国製を見ることもありましたが、「国産はモデルチェンジが早過ぎて」と叩かれながらも、恐ろしい速さで性能を延ばし、岡山開局の三十二年末には立派に輸入品を越えたものが、値段も六〇七万円と手の届くところとなりました。

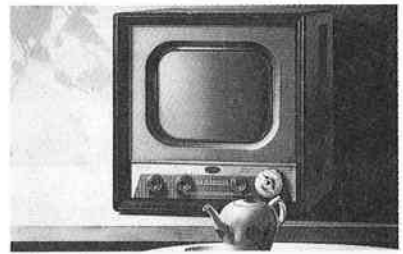
更に皇太子ご成婚のブームに乗った三十四年春には所得の伸びもあって年計画で求めるものではなくなりました。ご成婚の大きな儀式が中継され全国は画面に釘つけて、皇室に新しい風を入れられたお二人に新時代の親近感を感じつつ限らない祝福

を送る一方で、感激と興奮を見事に伝えたテレビ報道の威力を知ったのです。我が町にも既に部落に数台が普及していて、一四型白黒テレビ一台に、近所や親戚案内のない人までもが多いところでは数十人と集まって、持ち主の方もいささかのエリート意識に、お茶が出るお菓子を振る舞う、家によってはお握り弁当やお祝い酒まで揃い、盛り上がった大行事を思い出します。バイクに修理かばんを積んで約五〇軒のお得意回りの私は、こんな光景を随所に見ることができました。いつか外国製テレビに触れることはなくなり、汐が止まればやがて逆に流れるの理に従ってメイドインジャパンは質と量の力で逆流して行き、今も続いて想像もなかった行き過ぎの問題が深刻化しています。

三十五年にカラーが四十四年頃からトランジスター省エネ化、近年は高度なリモコンが完備し壁かけ型・ポケット型と目まぐるしく新型が出現し、画と音は益々大きく美しく、改善の速度が日をおって早くなります。この項を書き始めた三年八月ハイビジョンも問題の二〇〇kg・四五〇万円の壁を数年でクリアーか、とした常識が半年後の三月、一〇〇kg 一〇〇万円の発表に、業界自身が驚き執筆者も一年間に三度の書き直しで、誰の見通し絶えず前に狂います。この次は何が出てくるのでしょうか、何が欲しいのでしょうか私たちは。ふと無限の星でもあるかの錯覚から覚めてイギリス人でなくても、もう少しゆっくりがいい

1953 (昭和28年)

テレビ受像機の量産を開始。
この年、NHKがテレビ放送を開始。



1960 (昭和35年)

カラーテレビの
量産を開始。
日本でカラーテレビ
本放送が始まる。



国内発売第1号テレビ

よと思うことがあります。

過度のモデルチェンジや開発が資源を酷使し、企業の儲け競争のためであっては困ります。地球を潰す前にエネルギーの無駄遣いを慎み、省エネと環境保全の為にこそ更なる開発が進められるべきでしょう。テレビが教養と知識をもたらした立役者なら、戦後靴下と共に急速に強さを増した日本女性に時間を贈り、活躍の場に出る手伝いをしたのは洗濯機の登場です。毎日の貴重な時間を洗濯板でゴシゴシやっていたなら、女性の社会進出はずっと遅れたでしょう。テレビ誕生後にその影響もあってか、家事労働から時間をの要望に応え、大型家電品の二番手です。いろいろなスタイルが模索され、それぞれに特徴もあったが淘汰を経て、構造が簡単で値段が安く、静かに早く洗え



発売された頃の洗濯機（1991、現在も動きます）

る良さが、洗濯物を痛めない長所をうたった他の形式を退けて定着、基本構造は今ほとんど変わっていません。やがてローラー絞りが遠心脱水に変わり近年はマイコンの導入で、水・洗濯・時間の節約、布痛みや洗いむらの軽減等々、複雑な動作を難なくこなす自動洗濯機が主流を占めて、テスト機関の評価もかなり良いようです。「大きいことは好いことだ」の時流に乗り、洗い量が一・五kgから二・五kgへの成長に二〇年かかったものが、最近は異常な程の大型化があふられて、一気に八kg超へとエスカレートして、大き過ぎる事もとの反省もチラホラ。動作の理論や構造がテレビに比べて簡単ですが粉石けん対策その他に改善の余地の多いもので、太古から女性に定着してきた重労働

働からの解放と余暇獲得へ、洗濯機が画期的な役割をはたした功績と引き換えに、科学洗剤多様による悪名高い家庭用排水の対策こそ急がれます。（四年九月粉石けん使用をかなりクリヤーした自洗ができました。）

「暮らしが潤ってくると食品の保存と家庭でも水を。」の願いから冷蔵庫への関心も高まって、洗濯機の次にはと言ったパターンでやや緩い出足で増えて行きましたが、独立した冷凍室の二ドア式が出ると後は大型化あるのみで、一〇〇ℓに始まり容量で大体の年式がわかるくらいに大きさと普及度が伸びて行き、今までは四〇〇ℓが普通にドア数は好みで、各室の規制温度の正確さと消費電力の効率などが、メーカーの真面目な技術力の見せ所です。

オイルショック直後大変な省エネ努力があり五十年から六十年へ消費電力が1/6としたメーカーもあって戦前戦中派の古品大切組は痛いところでは。冷蔵庫が特に外へ出て働く人へ食生活の改善と買い物計画のゆとりにもたらした功績は大きなものがあります。

昔の服装



入江清子

- ・ 大正九年(一九二〇)生まれ
- ・ 箕輪
- ・ 商業

日本の美、伝統を守り伝える「きもの」の世界、四季のいろいろどりの模様を柄に描き精魂こめた美しい着物。何十万、何百万、なかには一千万以上の家が建つ程の高級品もございます。でも一人の女性としてその着物の前に静座する時、感慨無量で気持ちの上では何も語れない心境になり自分の気持ちを言い表すことはできません。

なぜならば、私は着物が大好きだからです。

明治、大正、昭和、平成と時代はうつりかわりました。結婚式の着物も昔よりはだいぶん派手になり、白無垢とか打ち掛けとか、お色直しとか、最後にはウエディングドレスで花嫁さんは忙しい位着せ替えに大変ですが、出席者の方はあたたかい拍手で美しい花嫁を迎え目を楽しませてくれます。

でもお葬式の服装は今も昔も変わっていません。変わってい

ると言えば、女の人は昔は着物、下着、長襦袢を着ておりましたが、今は下着を着ません。したがって着物と長襦袢だけを着ます。

男の方も紋付の羽織袴から今はモーニングか略礼服にかわりました。

昨年は天皇、皇后両陛下の即位の礼が宮中で行なわれ、昔ながらの十二単衣の着物姿も、ういういしくテレビで放映されました。その皇后陛下の着られた同じ柄のお召し物が、岡山の高級呉服の展示場に飾られてありました。

地合、柄合共に上品で奥ゆかしいお召し物でございました。

今から六十年前、私達が小学校の頃は、まだ時折、着物を着て学校に通っていた頃を思い出します。女学校になり、通学服は冬は紺サージのセーラ服で二本の白いコードを襟に縫いつけてありました。夏は綿のギンガムの生地で、ワンピースでした。

男子の制服は黒の、詰襟で今も昔も変わっておりません。邑久小学校の制服は紺のブレザースーツに変わっています。

流行と言うものはおそろしいものです。Gパンが最初に出た頃、私は商人でありながら、なんだくあんなもの、車引きのズボン見たいなもの。格好の悪い。あんなもの売れるもんかと三年程売る気になれなかった。それが一向にはやりが終らない。それどころかだんだん売れだしてあれからもう長い年月がたち



ました。デザインはつぎつぎと変わっても、Gパンは若い人には人気がよくて、作業用に、レジャー用にと、きつてもきれいな存在になりました。

私が女学校を卒業して、昔はお裁縫の塾に通っていた頃は、着物を着て其の上に紺色の純毛のサージのはかまをはいて、自転車で西大寺まで通っていました。着物の袖丈とえば、一尺八寸（六八センチ）が普通でした。娘の子が八人位長い袖の着物をきてその長い袖が風になびいて、ヒラヒラと美しい蝶々のように舞う姿が今も頭の中に、なつかしく、よみがえってまいります。

また、私のお父さん達は昔は外出着と言えば、着物の上に黒の「インバネス」を着て出かけておりました。作業着と言えば、作業シャツの上に冬は綿を入れた胴着と言う、しま模様の今で

いえば、裨天によく似た上衣を着て農作業をしておりました。

田植の時も娘さん達は緋の着物に赤い裾除けを、一〇センチ位出し、赤いたすきをかけて、田植をしておりました。本当にきれいでした。

時折その昔の姿をテレビで放映しておりますが、あの通りでした。そして女の人は着物に前掛けをかけて百姓をしておりました。

また、私が大阪に出て商売をしていた頃、今の長男が二歳と次男が零歳を連れて銭湯に行っておりました。お風呂から出でて、次男の赤ちゃんの方へ着物を着せたりしなくてはなりませんので、お兄ちゃんの方は後廻しになります。そうすると、寒い時は黒の五文位の別珍の小さい足袋をあぐらをくんで、こはぜをあわせて、一人で小さい二歳の長男は、はいておりました。その可愛い姿が今も思い出されて、とてもなつかしく思います。

足袋が靴下になり、下駄や草履が靴や運動靴、長靴に変わり、裾よけがショートツヤズロースになり晒木綿のフンドシがブリーフやパンツにかわり、肌着、特に女性の肌着は高級品がどんどん売れ出し、ファッションもアクセサリーの宝石も本当にぜいたくな世の中になりました。

戦時中の苦しい時代を生きぬいて来た、大正生まれの私達が今現在の生活を認識する時、本当に夢の様です。

また、夜のねまきも着物から、パジャマ、ネグリジェと変わりました。お布団も昔は木綿の格子の表に裏は紺の布で綿の入った重い布団でした。それが今はテトロン綿が入った軽い、きれいなふとんに変わりました。

そして最近羊毛ぶとん、羽毛ぶとんと高級品がよく売れるようになりました。

邑久町の歴史の中で今一番脚光をあびて誇りと思っていることは、本庄の地区に生家を残して観光バスも立寄る、有名な竹久夢二のあの美しい情緒たっぷりのきもの姿の絵ではないでしょうか。

私達はあの立派な絵がテレビに写される時、郷土のほこりをしみじみと感じさせられます。昔はみんな着物でした。

五十年前、私達はお嫁に来た時は間筆筒と言って大きなタンスに着物をいっぱい詰め嫁いで参りました。洋服ダンスは主人へのお土産として持たしてくれました。

昔は木綿と毛と絹しかありませんでした。

木綿は肌着、足袋、着物、布団、あらゆる製品に使われてきました。

毛は学校の制服、毛糸、モスの着物、絹は多くの着物に使われてきました。

でも現在ではナイロン、テトロンという合成繊維が非常に多

く、皆様方もご承知の通りだと思えます。

百年の歴史は服装、生活、住居の衣食住を、本当に大きく変えました。

日本も今は世界の一等国になり、海外旅行も夢ではなくなりました。

私達は日本の国に生まれ、また、豊かな邑久町の住民として一生を送ることを感謝するとともに、邑久町がこのような体験文を大勢の方から募集され、意義ある体験記を後世の人に残される事を、感謝しつつ筆をおきます。



当時の作業着

食生活の流れ



朝倉都穂美

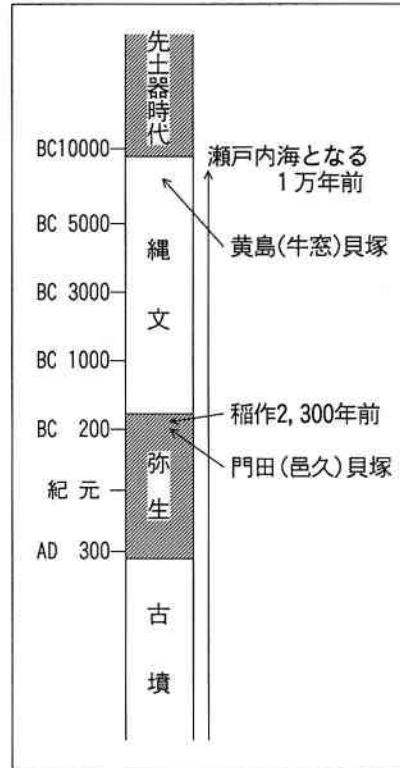
- ・ 大正十二年（一九三三）生まれ
- ・ 尾張
- ・ 無職

—— 弥生土器と食生活 ——

我が家の改築時、出土した弥生土器の底には、米のこげついたような炭化米が残っていた。弥生人が直接米を炊いて食べたものか、あるいはこの土器の中に貯えていたのだろうか。人口が増加すると貝や木の実の採集生活から農作物を栽培し、野性の動物を飼いならして家畜として飼育する農業が始められた。人間は採集、貯蔵、調理などの必要から土器を発明した。

この千町のあたりも瀬戸内海の後退（約一万年前）によって干あがってるところとどこころに大きな沼や川筋ができ今の尾張付近は吉井川の自然堤防のような中州であったらしい。そこには多くの人々が住みつき集落なども残っている。やがて西方から稲作が伝来し、この付近にも沼のほとりや川ぞいは干拓されて稲が栽培されたと思われる。門田貝塚や、我が家の下から出

た弥生土器は、縄文土器に次ぐ土器であり、最初の「農民の土器」といえる。



—— 日本型食生活の始まり ——

弥生人も魚好きで、定地網、地引網の魚法も、発達したと考えられる。また、鹿の角で作ったヤス、モリ、釣針で魚を取った。

門田貝塚をはじめ邑久平野周辺に点々とある貝塚からはたくさん貝類や魚骨が、出土した。そこには、ハイガイ、カキ、ハマグリ、サザエ、アサリ、ニシ、シジミ等が、層をなしており、当時邑久一帯は、海に近かったことがうかがえる。

原始古代に盛んであった獣肉食が、佛教の影響により、しだいに食生活から忌避され、穀類、豆類が増産され魚食文化、米食文化が発展した。また、水田の裏作には麦作が奨励され、後

にはパン食文化が伝来し、フランスパン、サンドイッチが流行した。

—— 戦中、戦後の食糧危機と代用食 ——

昭和六年に始まった満州事変以来、翌七年上海事件、同十二年に日華事変、そして同十六年には太平洋戦争に突入し、戦時非常体制となり食生活においては、食糧生産の担い手の多くを戦場に送ったことにより、労働力不足となり、食糧の供給が激減し、食糧事情も悪化した。時の政府は、米の搗精度を制限して、精白米を禁止したり、国外生産を混入させた。また、「ぜいたく」とみられる食品、食物の購入を禁じ、米飯と梅干だけの「日の丸べんとう」を奨励した。(昭和十二年)

食糧に対する切符統制、配給制を導入した。当時配給制では、栄養失調で命を落す者が続出した。昭和十七年には代替食品として押麦、こうりゃん、うどん、乾パン、いも類が配給された。麦やいも、豆等を炊き込んだ糲飯まじりめし、雑炊、すいとん、いもや大豆粉、とうもろこし粉の蒸しパンや、だんごが主食で、野菜や果物の皮、葉、茎、根や種等を利用し、野草も活用した。こうした食材料の乏しさから、人々は庭や空地を菜園として、さつまいも、かぼちゃ、まめ等を栽培して自給自足の生活を送った。貴船神社の馬場周辺に植えてあった桜も楓も切り倒され、いも畑として、人々の耐乏生活を助けた。

主食のみならず調味料も配給制となり、味付が思う様にならず、代用品を考案した。

例えば、代用しょうゆ—海草を海水で煮だす。代用甘味料—野菜水飴、さつまいもと麦芽を混ぜたもの、さとうきび作り—自宅で黒砂糖を作った。

牛乳の代用として—米粉や小麦粉を煮て上ずみをすくい取った、米汁を飲ませた。

子供に残したいくらしの主な行事と食べ物

一月

一日 雑煮：新年を祝い家族の健康と繁栄を願ってお餅を食べたり、大根、人参、さといも等野菜を煮た煮しめを作り、おとそ(さんしょう、ききょう、につけい等七種類をまぜた物のみりんで浸した飲み物)で祝う。

七日 七草 七草がゆ：七草(せり、なずな、ごぎょう、はこべ、ほとけのぎ、すずな、すずしろ)を入れて粥を炊き、無病息災を祈った。

十一日 鏡びらき：神様に供えた鏡餅を槌で開いて食べる。

二月

三日 節分 豆まき：大豆を炒り無病息災を願って豆まきをする。年の数だけ拾って食べる。

三月

三日 ひな祭り…女の子が美しく、幸せになるよう成長を祈る。ひし餅、ひなあられを供える。

二十一日 お彼岸…彼岸だんごを仏壇やお墓に供えて先祖を敬う行事。

四月

八日 花まつり 甘茶…お釈迦様の誕生日を祝って甘茶をかけて祝う。

五月

二日 八十八夜 草餅…立春から数えて八十八日目で春と夏の境目。八十八夜のよもぎを摘んで餅に入れると中風にならないといわれる。

五日 端午の節句（子供の日） かしわ餅…子供のすこやかな成長を願って、鯉のぼりや五月人形を飾る。米の粉でかしわ餅、ちまきを作り男の子の成長を願う。

六月

しらもあえ…海の幸に恵まれた、海辺地区では、しらも料理を作り季節を感じる酒の肴に最適である。

しらみて…梅雨の中を田植が無事にすみ、家ごとに祝う。海辺地区では粥を炊き、にらを十分入れたにら粥を作り、千町辺ではちくの子ずしをつくった。

一日…ロッカツシターといって小麦粉で流し焼きを作り、慰労した。

七月

七日 七夕祭 ばらずし…笹竹に願いごとを書いた短冊を吊す。ちらしずしや季節の野菜や果物を供える。

二十日 土用うし うなぎ…ビタミンや脂肪の多いうなぎをたべてスタミナをつけ、暑い夏を元気に過ごせるように願う。

八月

十三日～十六日 お盆 迎えだんご…先祖の霊を迎えて供養するため、米の粉を丸めただんごを供える。十六日には送りだんごを供える。

九月

十五日 お月見 月見だんご…秋の収穫を心から感謝して、静かな一夜を過ごす。（芋名月）

二十三日 お彼岸 彼岸だんご…先祖に彼岸だんごを供える。暑さ寒さも彼岸といって季節の重要な区切りとする。

十月

中旬 秋祭り…はれの日の代表料理として各地で、ばらずし（ちらしずし）を作って秋の豊作を祝う。

十一月

十五日 七五三 赤飯…三五七歳の子供が、氏神、鎮守様に

お参りして子供の成長と福運を祈願する。

中下旬 秋あがり 五目飯：秋の取り入れが終ると休養日を設け、温かい五目飯で労をねぎらう。

十二月

二十二日 冬至：かぼちゃを煮て食べると、風邪や中風にかからないといわれ、かぼちゃ料理を食べる。

三十一日 大晦日 年越しそば：日本そば、うどんを食べ一年の区切りをつけ、くる年を祝う。

—— ふるさとまつり ——

◎国司神社の草目

佐井田の国司様の御祭神は大黒天である。御神体は七合五勺の枡である。一月十四日の早朝に当屋の庭で粥を炊く。どんどの中へ、しの竹の管を五、六本入れて少し焼く。しの竹の管を当屋に持ち帰り、粥の中に入れ約一時間煮て取り出し、お厨子にお供えして冷す。そして包丁で削り管の中につまっている粥の量を見分け、今年の上穀の作柄を占う。

◎神田稻荷神社修正会（餅まき会陽）

尻海の神田稻荷神社では、修正会として旧暦一月十四日の夜に裸群数百人による神木陰陽二本の争奪戦が行なわれていたが戦後になって、餅まきに変わった。上山田の古布乃木天神社に

もあるが、時期は十月の第三日曜日の午後である。

◎高星神社の子供まつり

佐井田の高星神社は、子供の鎮守神である。

毎年四月二日が大祭日である。午後二時頃佐井田地区の子供全員が参拝し、神事にうつり、夕刻から子供達は、ふごをかつぎ太鼓を打ちならし、大声で、よーもぎもーちやいーらんぞえーもちゅうくーだんせーと叫びながら餅を貰って歩く。竹久夢二もこの行事に参加して、拜殿に馬の画を残している。

◎お接待

虫明にある黒井山等覚寺では、旧暦三月二十一日に、御影供養会が行われ、地区の青年団が弘法大師の遺徳をしのいで施行する。各地区のお大師堂でお餅やお菓子を婦人会が接待している。

◎大雄山大賀嶋寺の権現まつり

大雄山大賀嶋では、毎年四月二十四日を大祭日と定め、山車だしに乗り、しゃぎりを奉納する。現在四月二十九日が変わっている。

◎尻海だんじりまつり

江戸時代には、千石船を常時五、六十艘持っていた。江戸時代から続くだんじり祭りがあり、しゃぎりが奉納される。

亥の日

旧暦十月最初の亥の日（十一月十日前後）に、田の神が山に帰るため農家に帰ってくる。この日餅をつき、神を祭る。この

日ついた餅を食べると無病息災で暮らせる。

ふな料理 ふな飯

尾張の用水には、ふな、なまず、どじょうが多く、特にふなは、十月から二月頃までが美味しい。大きなふなは、煮たり、くずしにしてかけ飯として食べると美味しい。

ずがに（もずくがに）取りも面白い。かごを仕掛けたり、田舟に乗って石垣の穴から引き出す。なまずでつくったちくわは伊勢講にはなくてはならない料理だった。大きなあたり鉢（すり鉢）ですりつぶし、味付け、竹の棒へくっつけて焼きちくわの出来上り。

てんごえび（小型のえび）を、よく掬いに行った。天ぷらにすると美味しい。田じゃこの佃煮も忘れられない味だ。



昔の器

錦海丸の起源 南備海運の経歴




山下 達雄

- ・ 大正五年（一九一六）生まれ
- ・ 平成四年三月没
- ・ 尻海
- ・ 元南備海運勤務

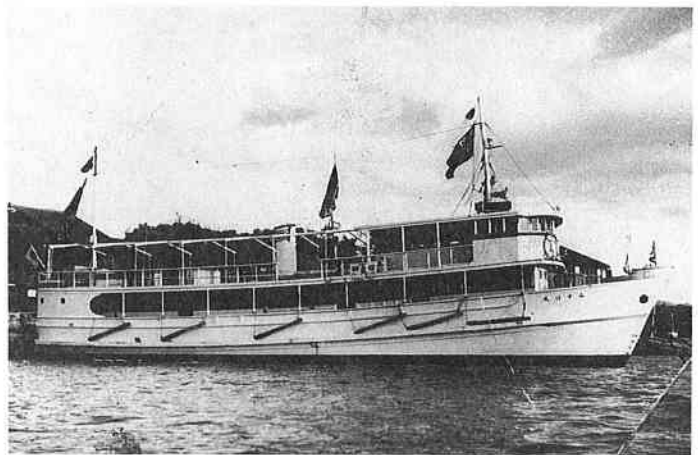
錦海丸の歴史は古い。隆盛時は天明年間（江戸中期）であろう。この湾名をつけて第一号錦海丸が（大正十年）誕生する。船主は尻海香々登屋水野梶郎と、山下屋山下丈治二名の共有貨物船であった。当時は陸運は不便で、主に海上輸送に頼っていた。水野梶郎は青果問屋で尻海近郷の野菜等を集め、岡山阪神方面への輸送に従事していた。船の大きさは約五十屯、乗組員は三名で、香々登屋が青果を集荷し、船は代々続いている山下屋が担当し輸送に当り、両者共意気投合助け合い、笑顔で商売は順調に運び、両者共に利益が見えて、時の流れと共に両者独立する。香々登屋は陸、山下屋は海運業を引き続き、貨客船第二号錦海丸を造り、尻海より岡山京橋間の定期便（大正十二年就航）を新設する。船の大きさは約二十屯、エンジンは十五馬力のヤキダマ機関、尻海港を基地とし、朝出航し毎日岡山へ一往復。寄

港地は牛窓、鹿忍、子父雁、東宝伝、西脇、西宝伝、犬島、久々井、切石、外波、小串、阿津、宮浦、三幡、福島、平井、二日市、終点は岡山市京橋、各寄港地に扱店を依頼し、お客さんがあれば白旗を揚げる仕組。所要時間片道約三時間半、それでも陸運はバスもなくなかなかの繁栄ぶりであった。親子三人年中無休で日曜、祭日、盆正月は特に忙しいが苦勞が笑顔に変わる。その頃敷井部落に西瓜作りの川野嘉次郎さんが上出来の西瓜を岡山青果物市場へ出荷されていたが、僕は小学生の頃早起きして、定期便出港までに敷井港へ行き、貨物室に西瓜を満載、積み込みの手伝いに毎日行った思い出があります。積荷中に西瓜がわかることがあり、駄賃として美味しい西瓜を腹一杯食べて、喜んで小学校へ登校。汗を流し味わうあの西瓜の味、今でも思い出す。僕は冷飯食いの三男であり役に立つ事が出来なかったが、兄妹五人で家業を助けよく手伝って来たと思う。兄二人は特に立派な兄であった。子供の頃楽しかった思い出は、正月休み夏休みに必ず岡山へ「チャンバラ映画」を見に連れて行ってくれたことが思い出される。悲しかったことは、冬の寒い大雪の日であった。晩に船が帰り手伝いに行く前、頭が痛いと言っていてコタツに入り仮病を使って行かなかった。おやじが帰り大目玉、寒さで腹痛なら許すが、怠慢だと厳しく言われ涙を流す。母が中に入り助かった。その後は勉強はあまり好きではな

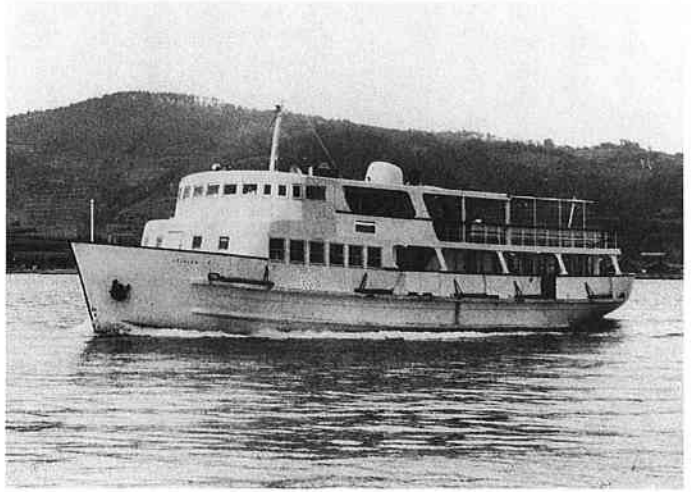
かったが家業の手伝いは励んで来たと思う。第二号錦海丸就航以来家族総出協力のかいがあり、幸運に報われ、昭和二年当時では最大の客船第三号錦海丸新造船就航繁栄を家族一同喜び合う。今までは船も小さく屋根はテント張りであったが造船技術が向上し総デッキでおやじが紋付衣装で嬉しい顔をしている写真がある。大きさは約三十屯、エンジンは単筒の三十馬力。京橋入港客船の中で初めて反転なしのギャークラッチで勇ましかった。時代の流れで牛窓の同業者市山森二、山本茂両氏とおやじ山下丈治三名お互いに客船五隻を持ち寄り、南備海運台資会社を設立（昭和三年七月）社旗も三者を表現し「」三ツ輪とする。これが現在の両備運輸の生い立ちである。その後、航路も拡張し、日生、虫明より小豆島小江、土庄、四国高松と延長し基地を牛窓に置き京橋までの定期航路営業は順調に延び犬島、小江、土庄より京橋入港の多くの客船を吸収し繁栄を続ける。そのころ日生港より対抗船日生丸が出現する。船主は日生町財閥の有力者である。我々南備海運代表三者の財産を持っていたもびくともしない。熾烈な闘いが始まった。午前六時日生港を同時に出港し、スピードを競い料金も日生、京橋間僅か五銭、それに両船共タオル、ラムネ等を進呈し客の奪い合い。おばあさん連中が孫の子守がてら弁当持ちで岡山京橋へ日帰り乗船、国立公園瀬戸内海の島々を望め京橋に着くと市内見物復

路に向う、人気上々でお客さんは増大するが船の経営は赤字が増すばかり、両船とも苦しい年月が続く。それを見兼ねた岡山市会議員の方が仲裁に入り、お互い損をするばかりで共倒れになるより手を握り合いなさいと提案されたが、両者共に後に引かず、相手の船日生丸の船主は、お金を前提に他人ばかり使い、当方三者は共に家族、親族の力で運用する。苦しい闘いはお金よりも家族の団結、お金より優っていたと思う。その後三年余続いたと思うが両者共疲れ、共存共栄の時来たりで南備海運と日生丸合併、名称は南備海運株式会社。合併（昭和二十五年）後も営業は順調に進行、次々に新造船進水大型化し、航路も拡張し県下最大の海運業に達成する。戦争当時召集軍人が次々出征の際、尻海港新波止場より出征軍人がデッキの上で挨拶、陸では大勢の見送りの人が小旗を振って、海上を三回廻り勇躍して各部隊へ入隊したものです。この時期にはまだ陸運があまり発展していないので、海運に頼るしかなかった。時は流れ戦争のため油が不足しだし配給制になり、客船も尻海入港を締めざるを得ず、悲しいかな廃止に追い込まれる。そこで僕はおやじの後を継ぎ南備海運株式会社本社勤務として入社、船員に籍を置き整備員として一生懸命勤める。かいあって尻海く牛窓間の小型連絡客船錦海丸「約五屯」復活、尻海を朝六時四十分発、牛窓七時半発の大型客船に連絡し、八時より本社整備員として勤

務、汗と涙の闘い、他の社員は休日があるが、僕は仕事の都合上一人で年中無休、幸い健康に恵まれ与えられた使命を守り頑張りました。嬉しかった事は定期船故絶対時間を守り、毎日毎日が時間の繰り返し、敷井部落の人々が朝早く畑で農作業に励んでいると錦海丸が出航ポイント船の姿が見え、朝の時間が分かる。晩には毎日同じ時間に牛窓半島東沖に姿が見える、季節によっては「もう仕事を終わりにしましょう。」と皆んな錦海丸を朝晩の時計代わりにして戴き、あだ名も「達ちゃん船」と名付けて貰う。同じく牛窓造船の舟大工さん連中が朝晩の時計代わりに造船に頑張っている、僕の耳に入り、心の中で嬉しく勇気が出ました。半公益事業であることを考慮し、先祖からの歴史を伝承し、父母の後姿



S.25年 みずほ丸



S.26年 しょうどしま丸

の教訓を認識し、自分の子供（男四、女二）五人の家庭教育は主に妻にまかしていた。父母の教訓を学び子供達には小学三年生になると毎日晩の荷物の集荷、配達を妻と共に手伝わした。リヤカーの後押し、またはガッチャン

ポンプで浴槽の水入れ、女の子は炊事の手伝い各々担当を決めよく手伝ってくれた。正月休み、夏休みには岡山へ映画を見に連れられて行った楽しかった思い出を引き継ぎ実行。また年末には五人の子供へ気前よく頑張ってくれたと賞与を出し、妻の内助の功をも感謝して「この賞与は主として学用品に使うのですよ。」と渡す。現在五人の子供は父母の後姿を見て成長していると思う。長男と次男二人は南備精神を引き継ぎ現在両備運輸

に勤務しています。昭和四十四年日の丸タクシーと対等合併、これが両備運輸です。錦海丸の起源から両備運輸の生い立ちまで僕の体験記を述べさせて戴きました。錦海湾を愛し、海上生活の楽しさ、厳しさを体験し毎日変る海上の天候風の日には極楽、一つ違えば一寸下は地獄と昔の人の語り草、海上生活の皆様、レジャーの皆様、風の日でも海を甘く見ないよう、空をよく見て天気予報を聞きもう一度先輩の言葉を再認識し歴史の伝統、文化を見直し、教訓を生かして、楽しい町づくりに頑張りたいものです。

尻海神田稻荷神社 横尾山静円寺の修正会(会陽)

川 野 多 喜 夫

修正会とは古くは各寺社が旧暦正月元旦から三七日(二十一日間) 国家の隆昌を祈願する修法の事であるが、現在は二七日(十四日間) 寝食を忘れてご祈念申し上げ、その結願の日(十四日目) に多くの人々が参拝するので御供え餅をふるまっていたが、後に結願日の行事として「会陽」が行われる様になったのであろう。とは、真白のあご髭を胸の程まで伸ばしていた尻海の幡中登神職の話である。

さて、当日は夕暮れ前から境内に露店が並ぶ。鉛を売る店、鉛筆を売る店、パッチン、ヨーヨー、ケンダマ、ビーダマ、オハジキ、凧、こま、ゴム鉄砲、写し絵、絵本、講談本等子供の遊び道具を売る店はガスランプを焚いてあかあかと商品を照らしだしていた。各露店商はしわがれ声を張り上げて、「サアサアーお父さんお母さんお子さんと見てちょうだい。この鉛筆の名はトンボ鉛筆、芯はエイチビイ(HB)で木はラワン、一本買えば五厘だが今日はおまけだ。一銭で三本。サアー手に取って見てちょうだい。」と言う様な調子で呼びこみをしていった。子供達は喜んでおねだりしたのもこれらの店先であった。

各露店商も十時が来ると一斉に店仕舞する。境内は子供が奉納している行燈の光のみとなる。この頃序押(子供会陽)に参加する小学校高学年の子供達が三三五と境内に集まり、百人前後の渦が出来る。十時半提灯の灯が消され、渦に向って神木(宝木)が投下される。消防団の人々が渦を遠巻きにして危険な方向に動かぬ様に誘導している。元気な女の子は同級生の男の子の尻をたたいて、「ソレ行けエー、ソレ行けエー」と励ます景色が眺められるのも序押の面白さである。序押は二十分も押すうち神木は抜ける。子供達が散会する頃提灯に灯が入り、本押を待つ。この間約一時間。

真白な木綿の腰巻き、その上に白木綿の長襦袢を羽織り、一反の白木綿を腰から胸に高々と巻き上げ白鉢巻を後ろでくくり、ずっぷりと水垢離をとり、手に神田大明神の御剣先を握りしめ四本柱を潜りぬけ神前にぬかずく。そして何回か四本柱と神前を往復する光景は、武運長久を祈念する戦時下の若妻や母親の会陽の夜の厳肅な姿である。

十一時半を過ぎる頃本押を待つ若者がその夜世話になっている知人の家を裸姿で垢離(あがり)とり場に向かう。垢離を取った若者が八人十人と四本柱をくぐり拝殿前に集まり、「ワッショイ ワッショイ」ともみ合う。垢離をとった濡れた体は、何時の間にか乾き、温かくなってゆく。提灯の灯が消される頃には二、三百

人の渦が出来、「ワッショイ ワッショイ」の懸声が荒々しく響き渡る。

神官の姿が「神木」の投下口（御福窓）に乗りだす。「ウォー」と渦がおたけぶ。その瞬間「クシゴ」「神木」の順に投下される。渦が揺れる左に右に、ゆっくりと前に後ろに!! 渦の中心から外れた者が中に潜ろうと中の者の禪を引っ張るが、なかなか動かない。渦の中心で神木を握っている者は渦の動くのを待つ。二十センチ程の神木を何本も手が握り、その手の上を手が握っている。香を焚きこんでいるので、いい匂いが鼻につく。腕と腕がからんで腕がしびれてくる。こんな時水を打ってくれると蒸し風呂から出た時の様な心良さである。若者を送り出した「宿」では箕の中心に一升枡をすえ、高々と米を盛って神木を持ち帰るのを待つのもこの時間帯であろう。この様に武運長久、家内安全、国家隆昌を念じて会陽を行っていたが戦後は足袋をはいて会陽にはいる人、消防団の警備にさからう者と統制がとれず、横尾山寺では昭和二十二年頃取り止め、尻海神田様では昭和三十年頃餅まき会陽に変化した。

貴船山の思い出



小林 進

- ・ 昭和六年（一九三二）生まれ
- ・ 尾張
- ・ 牛久保交番警察協会の会長
- ・ 邑久町立邑久地区公民館長

旧邑久村山田庄部落（現邑久町山田庄）の北に、標高五十mの貴船山があり、その頂上に貴船神社をお祀りしてあります。

山頂に立つと、黄金波打つ千町平野を一望し、西には吉井川の清流と備前富士（芥子山）の雄姿、さらには児島大橋を遠望する一大パノラマが眼下に開けています。

そこに鎮座します貴船神社の由来について、現宮司の大森二郎氏の説明によりますと、「社記には、御祭神は高お神と素盞鳴尊をお祀りし、創立年月は不詳であるが、本社は山城国愛宕郡（現在の京都市左京区）官幣大社貴船神社の御分霊にして御鎮座の年代は極めて古く、早稲田休所（現在の山手西）の小高い丘付近に鎮座せし従五位上稻都神社の縁起書によると、当社に祀りし貴船大明神（後に貴船神社と改号）を宝龜二年十月（七二二年）に貴船山に奉還せりとあり。当時この付近は尾張の保

と稱していたが、慶長元年三月（一五九六年）、山田庄村、尾張村、山手村と分村して、その後、山田庄の総氏神として広く信仰をあつめている。」と話して下さいました。明治、大正、昭和、平成と生活してこられた方達のあまりの移り変わりに、貴船様は驚いておられる事でしょう。

私達の子供の頃を振り返って見ます時、あのいまわしい大東亜戦争（第二次世界大戦）の以前には、神社の裏山に馬場があり、その両側に美しい桜並木があっ

て、邑久尋常小学校（邑久国民学校から現在は邑久小学校）に入学すると、新生が貴船山に上り、神社に参詣し、桜並木の前で記念撮影をしております。

また、桜花咲き乱れる頃ともなりますと、邑久人絹



山田庄・青年団 開墾記念

工場（現在の邑久町役場新庁舎と邑久町農協本所を併せた総敷地に工場が建っていました）の女工さん達や、その後を追うように尾張、豊安の若者が、一升瓶を肩に花見見物に上り、時には、奇麗所のお姉さんの三味の音などが聞こえていた、のどかな風景を思い浮かべます。

昭和十六年十二月八日大東亜戦争が始まってからは、毎月一日には小学生全員が貴船神社に戦勝祈願に参りましたし、出征兵士は武運長久を祈願に詣でながらも、還らぬ人となられた方々も大勢おられます。

当時は厳しい供出による食糧難という事で、貴船山の東の半田山に学校農園を造り、五、六年生は、家から肥桶を持ち寄り、学校の便所の下肥をよく運ばされました。

そのような中で、十二月十四日の赤穂義士の討ち入りの日には、学校で野菜の品評会があり、良品のものは公設市場へ売り、売れ残ったものは、その日、米一合と茶わんを持ち寄り五目飯を炊き、昼食の時間に食べ競争を行い、最後まで残った二名が前に出て一位を決めていました。夜に入ると、五、六年の男子は小学校の講堂に集り、先生から非常にこわい怪談を聞かされてから肝試しがあり、貴船山、避病院（現町立病院）、どんどこから百枝八幡宮、山手の西の碑、学校の三階の理科準備室等数ヶ所に別れて順番に一人ずつ行かされるのですが、平生おとな



支那事変 出征兵士の祈願

しい先生お氣に入りの子は近くの恐ろしくない場所に、私のような意地悪っこは一番恐ろしい遠くの場所に行

かされ、五年生の時は、貴船神社の狛犬の所に旗を持って行かされ、次の人が私が帰ってから、その旗を取りに行かされるのです。当時は民家もまばら

で、戦時中という事でもあり灯火管制で外に光は全く見られず、あたり一面は真っ暗でした。電池は持って行くのですが、その光で辺りの物陰が非常に大きく写り、坂道を下りるのが非常に恐ろしく、自分の足音で後ろから何かが付いてきている様で、一目散に参道を駆け降りますと、勢いが付いて一番下の曲がり道が曲がりきれず、竹藪の中に飛び込んで非常に恐ろしかった事が今でも忘れられません。

戦局がだんだん厳しくなってきました、農家でも人手不足となり、収穫時ともなりますと、勤労奉仕という事で出征兵士の家の稲刈りや株切り（全部手仕事）等の日が続き、あまり勉強をする時間はありませんでした。それに比べ、今の子供達は恵まれ過ぎていると思います。

戦争も敗戦の色が濃くなって食糧事情も極みに達する様になり、農家でも昼は麦飯（米麦半々は良い方）で、夜は芋がゆの日が続き、学校でも芋茎の干したものでイナゴなどをよく食べさせられました。

そこで、桜見物などは非国民という事で、貴船山の桜を切つて芋を植え食糧増産をしようと、桜を全部切つて芋畑にしましたのが昭和二十年のはじめ、その年の八月十五日に終戦となり、その後何年かは、地元の方々が畑として使用されていたそうです。あれから四十数年間そのまま放置され山林になってしまいましたが、この度のふるさと創生という事で、「夢よもう一度“桜を咲かせようという事と、今、巷では生活が豊かになるにつれ、年々さびれて行く人の心を取り戻そうと思ひ立ち、ここに貴船山ふれあい広場を造り、今度は梅、桜、紅葉を植栽し、四季を通して地区の皆様にご利用いただき、ふれあいを深めると共に思いやりのある暖かい心を一日でも早く取り戻してもらおう為計画しましたところ、地元山田庄部落の暖かいご理解と邑久地区

皆様のご協力を得まして実現する運びとなりました。

ここは邑久町の中心でもあり、邑久保育園、幼稚園、小学校
低学年の遠足、落葉拾いの場所ともなっている現在、これから
は、町内の幼児から高齢者までの憩いとふれあいの場としてご
利用いただく為、一日も早い邑久町貴船公園の実現を願って筆
を置きます。

長島愛生園と光田健輔



加 賀 田 一

- ・ 大正六年(一九一七)生まれ
- ・ 虫 明
- ・ 無 職

邑久町名誉町民で、初代長島愛生園長光田健輔先生は、山口
県防府市に生まれ東大病理選科を卒業、東京養育院に勤務中、病
因不明のため業病だ、遺伝病といわれのない偏見差別にさいな
まれ、家族と別れ故郷を追われ、浮浪徘徊して行倒れ、担ぎ込
まれたハンセン病(らい)患者を見て、この世の地獄ともいえ
る悲惨な姿に心を打たれ、医師としてこの病因を究明すること
が、自分に課せられた使命であると心に誓い、生涯をハンセン
病の予防と救済事業に尽粹された功績は、第一回文化功労金受
賞者に決定、文化勲章、米国ダミアン・ダットン賞その他数多
くの受賞は、当然真の人類愛に徹した結果と言えましょう。浜
沢栄一氏を初め多数の政財界人の協力で「らい予防協会」を設
立し、時の内務大臣安達健造氏に国立療養所設置に関する意見
書を提出、ハンセン病の救済を一部外国人宗教家に委ねている



研究中の光田健輔先生

ことは、日本国の恥であると訴え昭和二年三ヶ年計画の予算で、国立らい療養所の設置が帝国議会で決り、ハワイのモロカイ島を例に沖縄の島々が候補に挙がったが、光田健輔先生は、気候温暖で風光明媚な虫明沖に浮かぶ、長島に決定されるよう内務省に具申された。

内務省松崎留吉技師が現地視察をされて、当時の状況を「長島開拓」に次のように書き残されている。地元裳掛村議会漁業組合では伝染病で世間が嫌い汚い、らい療養所の設置には強い反対運動が起こり、暴力沙汰も起こりかねない状態であったので、虫明の旅館に宿泊することができず、光田先生とともに偽名を使って変装をして、漁船で長島に渡り岡山市へ帰途、バス

に四、五人の青年が乗り込んで来て「この不況時に虫明には国立らい療養所ができるような、虫明は仕事が増えてええのう。」と大声で語り合っていた。これで青年達は安定した職場が確保され、地域の発展につながることを夢みたのであろう。六十数年を過ぎた今日、昭和九年室戸台風で潰滅した、大阪外島養養院が邑久光明園として、長島の西端に移転して、名実共に長島はハンセン病の島となった。

長島が開園当初医務員一三名、傭員六〇名であった職員は、現在両園併せて八五七名に増え、殆んど邑久町民で町外の職員も定住化が進んでおり、扶養家族も含めると邑久町人口の一五%近くが、長島と関係をもつに至っている。また長島両園の国家予算は年額七〇億数千万円に達して、邑久町予算をはるかに上回る相当量の予算額が、町内に流通していることを考えると、当時の青年が「虫明はええのう。」と言った将来を見通した言葉が裏付けられる。

光田健輔先生は、村民反対の矢面にたって、土地の買収、説得などに尽力され、建設の途中で倒れられた東原新次裳掛村長のご努力に報い、村民との交流を深め、融和を図り理解を求めするため、東京全生病院から連れて来た患者の中に、歌舞伎芝居の役者がいて「愛生座」を結成、春秋二回の公演に村民を大勢招待し、歌舞伎全盛時代であったため、盛会を極めていた。ま

た裳掛小学校からは毎年学芸会の慰問があり、故郷に残した子供を思い出し、女性療養者の涙をそって交流を深めていた。

光田健輔先生は世界的に知名度の高い医学者で、特にらい菌の研究には寝食を忘れ没頭され、日夜顕微鏡をのぞいておられ、奥様にらい菌を埋め込まれるほど熱心で、その行為をご長男が怒って家出される事態に進展したことは有名である。その成果、レプロミン反応（光田反応。とも呼ぶ）光田抗原として、世界らい学会が認めることとなり、治療の指針として、現在も一千万人の患者がいるといわれる東南アジア、インドなどで、相当の治療効果を挙げている。また先生は医学者だけでなく、大事業家でもあった。長島愛生園長に着任されたときは、既に五十歳を数え、当時としては定年を迎え、悠々自適の余生を楽しむ年齢である。明治の気骨というか八十二歳で退職されるまで、あまりにも少ない国の予算を補うため、救らい事業に御仁慈の深い、貞明皇后のお歌の趣旨を民間に訴え、十坪の住宅寄付運動を起こされ、職員患者の献身的な協力があつたとはいえ、長島の山を切り開き、道路をつくり、世界に誇る大規模なハンセン病患者のユートピアを築きあげられた。実に驚異的な人物であつた。事業推進にあたって強引なところがあつて、一部には批判があつたが、苦悩の極限にある患者を救済しようという発想からであつて真の人類愛に基づくものであろう。入所者の生

活は貧富の差を無くして、人間性豊かな生き方を送らすため、職員患者は大家族主義、同病相愛、相互扶助の精神を愛生園のモットーに、軽症者は重症者を看取り、弱い人の世話を奉仕（ボランティア）を自ら喜びとするよう指導し、患者の楽園建設を目標とさせる。

不治の病と言われるハンセン病も特效薬プロミンの出現によって、治癒可能となり、長島からも社会に帰って行った者も多い。現在、我が国のハンセン病の新発生は沖縄に少数の発生があるものの、本土の新発生患者は皆無に等しく厚生省の推計で二〇三五年には消滅すると言われ、長島愛生、光明園の一、二、三名の現入所者は、二十一世紀を迎えたとき七六五名に減少することになっている。患者の減少は即ち職員の減少につながり、邑久町将来の緊急課題になって、その対策が急がれる。

入所者の悲願であつた長島架橋も、地元の方々のご協力で実現した今、この橋は入所者の謝恩の意味を込めて、地元発展の核となることを念願している。長島は立派な国立医療機関として、完備され保険医療も行われている。我が国には未だ病因の解明されていない、筋ジスなど難病が数多く発生しており、町民の職場確保のためにも、ハンセン病の島から福祉の島への転換を図ることによって地域の一層の発展を希^{ねが}っている。それが光田先生が長島を選んだお心でもあろうと思うのである。

邑久光明園と今田虎次郎



原 田 禹 雄

- ・ 昭和二年（一九二七）生まれ
- ・ 京都市（虫明）
- ・ 邑久光明園名誉所長

今田虎次郎は、安政六年九月十五日、岡山県邑久郡本庄村の今田幸次郎の長男として生まれた。今も下山田には、かなり傷んではいるが今田虎次郎の生家と墓が残っている。明治十二年、同郡裳掛村虫明の士族、平野長芳の長女の小満津と結婚し、五男一女に恵まれ、明治十六年から警察官として兵庫県と大阪府に奉職し、警視に任じられ、曾根崎警察署長を命じられた。

明治四十年、法律第十一号（らい予防法）が公布され、それにもとづき、明治四十二年にわが国に五ヶ所の連合道府県立のらい療養所が設立された。大阪府西成郡川北村外島には、近畿北陸十二府県の第三区連合府県立外島保養院が開設され、今田虎次郎は、その初代院長に就任した。今田は、患者の慰安と幼児の教育のために患者慰藉会を作った。また、大正四年には、院内に患者自治会を作ること認可した。わが国における患者自

治会のさきがけである。昭和十一年八月、長島愛生園で、自治を求めて患者が騒動し、大騒動が起こったが、これにくらべて外島の自治が、どんなに早い時期から始まったかがわかるであろう。外島の患者は、「相愛互助」を自治のスローガンとし、その外島スピリットは、今もなお、光明園に伝えられている。今田は責任感が強い反面、非常に優しい人柄であった。若い医師は、今田の院長宿舎で食事をよばれたり、洗濯をしてもらったりした。警察できたえあげられた今田にとって、若い医師はとても可愛いおぼっちゃんにみえた。大正二年頃、モルヒネ中毒の患者が大暴れをした。警察はこれを不問にしようとした。今田院長は、らい患者といえども国民である。正しい法のさばきを受けさせるべきだと主張して、その患者は裁判をうけ刑に



今田虎次郎（大正15年退職時）

服した。それまで、何をしてもらいのゆえに法的に正しく処置されないことをいいことにして、かなりひどいことも院内にまかり通っていたのが、それ以来秩序が生じ、自治会の活動ともあいまって、外島保養院は、高い秩序と高い教養のらい療養所となった。

大正十五年四月二十三日、十八ヶ年外島保養院長をつとめた今田は退職した。連合府県立の五ヶ所の多くの院長は、ほとんどが警察出身であった。しかし、ほんの数年で医者が院長にかわっている。十八ヶ年という長い間警察出身で院長をつとめたのは今田虎次郎だけである。退職後は、堺市に家をかまえた。

大正十五年から昭和八年まで村田正太が、そして昭和八年から原田久作が外島保養院長になった。隠退後も、昭和のはじめ、長島愛生園ができるとき、内務省と光田健輔の頼みによって、今田虎次郎は裳掛村へ行き、村長と村会議員たちに、長島に国立らい療養所を誘致する根回しをした。この今田の協力について、光田健輔は何も書き残してはいない。愛生園は、今田の陰の根回しもあり、昭和五年に開園した。

昭和九年九月二十一日、室戸台風とその高潮のため、外島保養院は壊滅した。在院患者の一七三名と職員三名、職員家族一名が殉難した。四二四名の生存患者を各地のらい療養所に分散委託し、院長の原田久作は復興に専念した。昭和十年八月に

なって、長島の西部に復興と決定した。もともと長島は、大正十五年に千床拡張計画にともない、大阪府が移転先として、海水浴を装って測量をしていた。長島に目をつけたのは、今田であったことは明らかである。彼の妻が虫明の人である。しかしこの移転は実現しなかった。それが十年後、外島保養院が長島に復興されることになったのである。今田院長の生まれたのと同郡内の、今田夫人の生まれたのと同村内に移転復興することとなったのは、不思議な因縁といわねばならない。

昭和十年、愛生園の光田健輔は、大阪府の外島復旧事務委員を嘱託された。そして、外島復旧に関して強い発言力を発揮した。原田久作は、患者の不自由になることを予測して、長島の山を切り開いて平地を造成するよう主張した。光田は反対した。予算がかかりすぎるといのがその理由である。しかし原田は主張を引っ込めなかった。光田の反対で、平地の造成は二段の落差のあるものになった。原田は、瀬溝に橋をかけること、木島を買収して、そこに患者の遊園を作ることを主張した。この二つは大阪府も光田も無視した。患者の将来を思う原田と、予算の削減しか思わぬ光田と対立は深くなった。

昭和十三年四月一日、長島に新設された施設は、第三区連合府県立光明園と改名された。原田久作が初代光明園長になった。同年四月二十七日、被災患者がまだ一人も帰っていない光明園



昭和13年創建当時の光明園

で、工事落成式が挙行された。出席した厚生省の勝俣課長を岡山駅へ送っていった原田園長は、駅で課長から辞職を言い渡された。たった二十七日間の光明園長だった原田は、「長島の森を去りゆくほととぎす 瀬戸の浦まの 夜明けなればに」の一首を残して長島を去った。光明園の職員も患者も誰一人知らぬ間に、厚生省と大阪府と光田健輔との間で、十分にねりあげられた人事であったのであろう。翌二十八日には、光田の愛生園から、神宮良一が園長として赴任した。幸い、神宮園長は温厚篤実の紳士であった。だが、光明園に復帰した外島患者は、原田園長の「ほととぎす」の一首を決して忘れなかった。原田久作が主張した橋は、五十年後に見事に瀬溝にかけられた。

今田虎次郎は、堺市の自宅で、このような外島保養院と光明園とのうつりかわりを静かに見つめていた。警察奉職以来四十年余にわたる功績により、正六位勲五等に叙せられた。昭和十五年七月四日、堺市の自宅で病没した。行年八十二歳であった。威徳院義徹憲章居士とおくり名され、墓は下山田の今田家墓域に建立された。墓誌は、愛生園の光田健輔が供した。

今田が逝去した翌年、昭和十六年七月一日、光明園は厚生省に移管され、国立療養所邑久光明園と改称された。邑久こそは、初代院長誕生の地なのである。

岡山県立邑久高等学校新良田教室



香原 鎮 雄

- ・ 大正十一年(一九二二)生まれ
- ・ 北島
- ・ 元邑久高新良田教室教頭

新良田教室の設立

国立らい療養所内高等学校は、昭和二十八年に設立した新しい「らい予防法」によって設立が可能になった。しかしそれが

愛生園に設置と決まったのは、愛生園が日本の中央に位置するからだと言われるが、当時の三木行治岡山県知事が厚生省の出身者であったことも、深い関連があったようである。この後、厚生省と岡山県との間に度重なる交渉協議が行われ「派遣教育・定時制」という大筋が決定した。派遣教育というのは、岡山県教育委員会が教員を派遣し、これに要する費用や学校の建物施設等学校運営に必要な経費は、国が負担するというものであり、定時制というのは、病気の治療と高校教育との両者を並立させるゆとりのためには、昼間定時制の形態が最適だという意味であった。実際の開校は昭和三十年九月にずれこんだが、第一期工事は既に着工されており、八月には完成した。このあと逐次増設が行われ、三年後にはすべてが完了した。

学校の変遷

三十一年余にわたる学校の歴史は概括すると、ほぼ十年ごとの三段階に分けることができるので、この立場からまとめてみたい。

第Ⅰ期 昭和三十年から三十八年 充実の時代

三十年入学の一期生から三十六年入学の七期までは、一・五倍から二倍を超える志願者から選抜されて定員一杯の三〇名が、さらにそれに続く二年間は二四名の入学者があった。その年齢

は十五歳から三十歳にわたる幅広いもので、学校の設立がいかに待たれていたかが推察できよう。それだけにこれらの生徒は学習意欲に燃え、八畳の部屋に四人暮らしという寄宿舎生活に耐えて勉強し、教員もたじろぐような学力を持つ者もいたという。備品や器具や図書を購入も三ケ年で完了し、当時の高校としてはハイレベルのものが揃えられた。これにともない課外授業も活発であった。各種文化クラブの中には、今も語り草となっている演劇やバンド演奏が行われ、多くの立派な文芸誌が残されている。ハンセン病の特効薬DDSの合成実験では、県下の読売科学賞を受賞した。一方運動面での活動は彼等の活力の源泉であり、外部との隔絶を余儀なくされていた生徒達は、その若いエネルギーを爆発させて青春を謳歌した。学年対抗・出身地域別対抗などと銘打って、機会あるごとに各種球技大会が、さらには園の職員・一般入園者との交流試合も盛んに行われたものである。

まさに、活気溢れた絶頂の時代であった。

第Ⅱ期 昭和三十九年～四十七年 変化の時代

一、この時期の第一の特徴は、各年度の入学生が一〇名前後となり、生徒数が急減したことであった。この間昭和四十年には、米占領下の沖縄からの生徒の受け入れが公的に認められ、例年数人の入学者があったにも拘らず、このような現象をみたので

ある。これは、生活レベルの向上やハンセン病に対する多くの特效薬の開発による新患者の減少、適齢者の社会復帰の増加等がその要因であろう。大変めでたいことではあるが、一方では大きな影響を学校に与えることになった。その一つは授業への影響である。一クラスの人数は二五人程度が最適であるという研究がある。それは、生徒が授業に参加することによる集団の力が、彼等自身を教育するからだという。生徒数が少ないということは、教員の手が行き届く反面、集団の活力を失わせるものである。二つめは、予算への影響である。対象となる生徒数の減少は、学校に対して与えられる予算の減少を伴う。校舎や施設備品の補修とか、新しい教材器具の購入等が困難になって来たことから学習への刺激が乏しくなっていた。

二、第二の特徴は、教育活動の校外への進出である。昭和四十二年山陽女子高校での部落問題研究会に参加したのをはじまりとして、四十八年から全校的規模で邑久高校尾張校舎との交歓が行われ、四十九年には鳥城高校に招待されて岡山市内の定時制三校との間に交流が持たれた。五十年には、開校以来はじめての修学旅行が行われ、以後毎年、修学旅行とスキー教室が実施されるようになった。このことはハンセン病に対する社会的偏見、取り扱われ方の改善の方向と並行した現象と言えよう。

三、第三の特徴は、生徒の経済問題である。患者としての生徒

には、慰安金と称して手当が支給されていたが、その額は当時月五百円であった。貧しい家庭出身である生徒の大部分には、家からの仕送りは殆ど望めなかった。食料もそう豊富な時代ではなかったが、たとえあったとしても購入不可能であった。彼等の旺盛な食欲をそれなりに補ってくれたのは、PTAを自称された愛生園の入園者であり、生徒はそれぞれに甘えられる家庭を持っていたようである。しかし、手当は、昭和三十五年以降次第に改正されて四十七年には月一万円となり、彼等の経済状態もようやく安定した。

第三期 昭和四十八年～六十一年 終焉の時

昭和四十八年以後は、入学者がゼロから四名の時代であった。この時代の授業はまったくの寺子屋式であったが、施設内の小中学校で十分な教育を受けられなかった生徒にとっては、かえってこれが幸いしたようである。さらに昭和五十五年には、これら全国の施設内中学校がすべて廃止され、本教室の閉鎖も間近のことと思われた。実際の閉校は六十一年度末となったが、これは過年度卒の社会に出ていた者が、新しく発病して入学してきたためである。

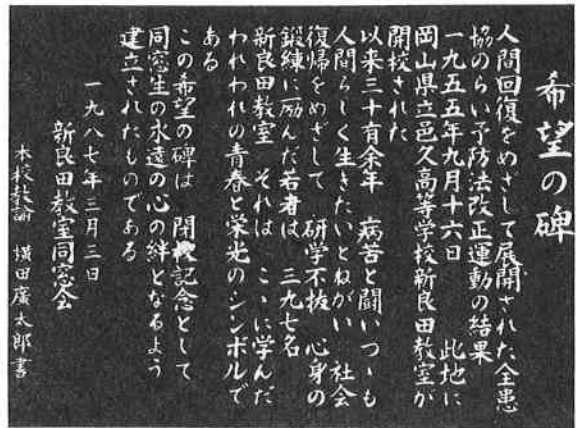
おわりに

新良田教室から巣立っていった者は三〇七名にのぼるが、一

般の高校へ転校した後卒業した者を加えれば、その数はさらに多くなる。このうち社会復帰した者は、医師・薬剤師・看護婦・電気技術者・建設技術者・作家・歌人・デザイナー・検事・牧師・教師その他の公務員・各種自営業者など、社会の広い分野でも活躍している。また療養所内に残った者も自治会の柱石となって活動を続けている人が多い。そういう意味からいっても、この学校は、めでたくその使命を達成し終えた、ということが言えるのではなからうか。



記念碑
揮毫者 長島愛生園長 友田政和先生



希望の碑（裏面）
揮毫者 横田廣太郎教諭



邑久光明園 忘れ得ぬことども



上 森 晴 太 郎

・ 昭和六年（一九三二）生まれ

・ 虫 明

・ 元国立療養所邑久光明園

事務部長

昭和三十年頃の邑久光明園は、隅から隅までよく手入れが行き届いて、まるで公園のような印象であった。その頃まだ食生活も十分ではなかったので、空き地は耕され、山は家庭の燃料用に下刈りされ、道端はいつも短く刈られていた。職員も入園者も勤勉に働いていた。世の中全般がそうであった。

当時邑久光明園のような性格の施設は、外からも内からも閉ざされた施設であった。そこは不治の病と恐れられ、家族からも地域社会からも身を隠し、孤独と絶望に耐えて生きていく人の生活の場であった。訪れる人の中には、そこに入所している人は、人生の苦勞であるから、その日常はひそやかで、よどんだ明け暮れであろう。と知っている人も多い。

しかし、実際に訪れた人は明るくよどみのない雰囲気意外などという感想と、なにかしら安らぎを覚えるようである。それ

はさまざまな苦勞を克服して、ある境地に到達した人が持つ明るさか、それとも時代環境によるものかは私にはわからない。ただ日本全体がぐらいい陰うつな時代から明るいびやかな時代に移り変わり生活も豊かになったことは確かである。

ここにはほかの国立医療機関とは比較にならないくらい訪問者が多い。

その中には戦中、戦前のらい療養所の話や記録から当時の抑圧された状況を知って、それを現在の感覚で判断し、厳しく批判する人たちもいる。そしてその矛先を現在療養所で働いている職員に向けてくる人もある。

園長は言われる。

「五十年前の日本人の平均的な考え方はどうであったかを考えないで決めつけてもらっては困る。その頃普通の人の人権は守られていたであろうか。また批判している人の両親や祖父母といった人達のハンセン病に対する考え方や行動がどうであったか、そのことを知っておいての話でないと世間にはとおりにくいものになる。」

かつて、韓国籍の医師が勤務されていたころ見学に来所した医師の一人が「韓国の療養所では医師が足りなくて困っているというのに、国立の療養所が韓国の医師を雇って韓国の医師不足を助長している。」と非難した。園長は「自分もそう思う。だ

から日本人の医師であるあなたが、この光明園に勤務してください。さればあの先生は母国へ帰れるのですが、代わりの人がいないので、そうしたくてもできないのです。」と実情を話された。その医師は黙って去った。しかしいまだに「韓国の先生の代わりに働きたい。」と行って来所したという話は聞かない。

昭和五十五年七月三十日は邑久光明園にとっても虫明の漁業者にとっても悪夢のような日であった。この日未明から早朝にかけて邑久光明の燃料タンクからあふれたC重油は折からの雨のって排水溝を南へはしり海岸へ流れ落ちた。そこから海上へ拡散し潮流に運ばれて木島に当たり更にはるかあなたにかすむ西方の海面を黒々と覆いつくした。この時流出した重油は推定で二五kℓ〜三〇kℓ、ドラム缶で約一五〇本分に相当する。

静かな漁港の町は一夜にして変貌したドス黒い海を見て大混乱に陥った。今までに経験したことのない大規模な油の量であった。何をしていたのか、どこから手をつけたらいいのか誰もわからないまま、東備消防組合から送ってもらった油吸着マトを漁船の協力で現場に運び、油の海に撒き散らかした。

おびただしい量の資材が調達され、何十艘もの船が海上清掃に何日も沖を駆けめぐった。

それが一段落すると島の海岸や木島、遙かな岬の浜辺に付着した油の清掃と汚れた土砂の回収と果てしない明け暮れが続い

た。回収した吸着マットや土砂の袋が藪池のグラウンドに山と積まれた。

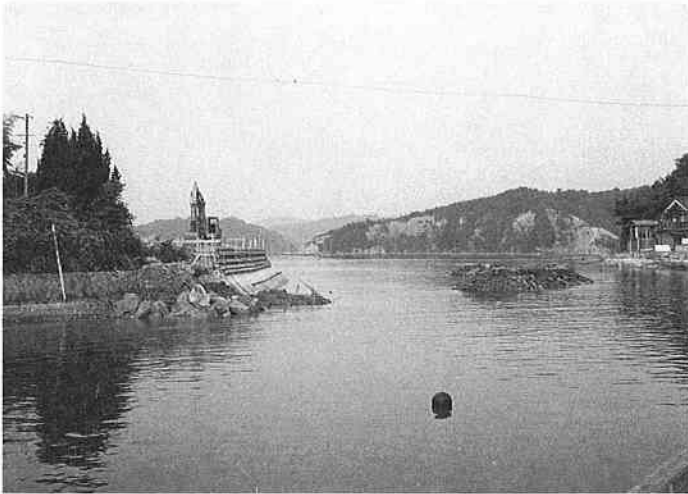
それから二ヶ月長い雨の多かった夏は終わった。

流れた油が潮流の関係で虫明湾内に入らなかつたのが救いであつた。この間虫明の漁業の方々をはじめ地元邑久町からいただいたご協力は忘れられないものとなっている。

昭和六十二年十月九日 この日は邑久光明園に橋が架設された日である。入

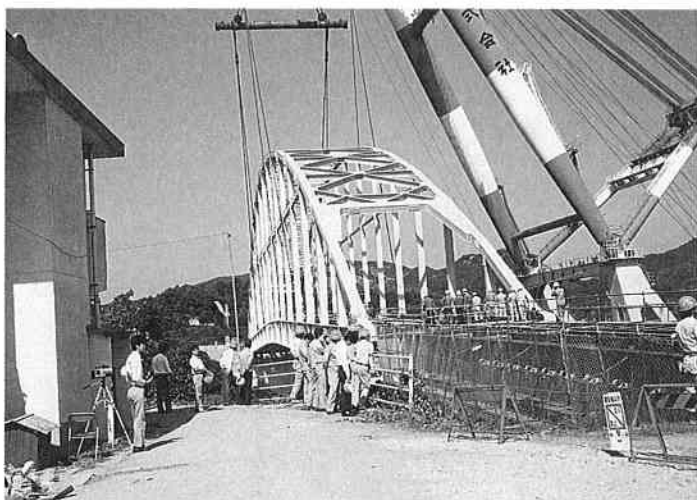
園者の長い長い架橋運動と『島に橋をかけたい。』という関係者の気持ちが漸く形になったのである。

重さ六〇〇トン、長さ一三五メートル、櫛のかたちをした橋桁を水平につるした巨大なク



S62年6月 拡幅掘削中の瀬溝海峡

レーン船は、前日の十月八日兵庫県播磨町新島の岸壁を早朝出発し、高砂・姫路・相生・赤穂の沖を通過して夕方長島東の沖合いに停泊した。このクレーン船が満潮時にどうにか一艘入れるかどうかといった狭く浅い小川のような海峡が作業現場である。しかも、そこから先へは海幅が狭くて通り抜けもできない。現場でクレーン船が座礁したら、たちまちバランスを失い転倒ということも考えられる。転倒したら橋桁で沿岸の住居はつぶれてしまう。また何かの手違いで作業が手間取ると海は干潮に向かい架橋はできてもクレーン船の脱出ができなくなり、次の日まで海峡は封鎖されてしまう。こういった危険が起こりかねない作業であった。当日は逃えた



S62年10月9日 邑久長島大橋架設

ような好天気のもと、作業は順調に進み、予定通り橋は架けられたのである。当たり前といえは当たり前のことではあるが、この日もまた忘れ難い日となった。

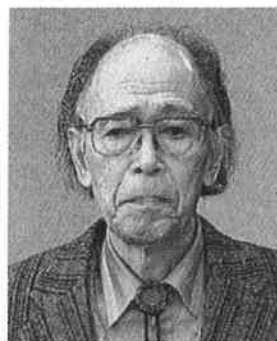
島内は山が削られ、谷が埋められ、海もまた道路用地だけ埋め立てられた。道路建設で静かなたたずまいは様相を一変した。地元虫明地区でも同様な道路建設が進められた。昭和六十三年五月九日華やかな邑久長島大橋の開通式が行われ、橋の共用が開始された。

しかし、その華やかさの陰で、さまざまな形での犠牲者が強いられたことを忘れてはならない。

廃業せざるを得なくなったフェリー。そして橋となる道路用地のため、多くの人が望むと望まざるにかかわらず、先祖から受け継いできた土地を売り渡さなければならなかった。この土地取得の任に当たった担当の人々もまた多くの苦労があった。

橋によって島と本土は陸続きになった。が島と本土との地理上の最短距離は架橋前の一二mが倍の二四mに離れた。つまり離れた距離だけ島を削り、海峡を広げ、海底も深く掘り下げたのである。これは橋を架けるに際しての、地元への反対給付の一つであったことも、また記憶されなければならない。

虫明焼きの今昔



黒 井 一 楽

- ・ 大正三年（一九一四）生まれ
- ・ 虫 明
- ・ 陶芸家

宮川香山の釉薬についての小話ですが、私が横山香宝師と同じ居して焼き物を習っていた当時の夜話で五十有余年前に聞かされた話の中でいまだに頭に残って浮かんでくるままのことを思い出してみます。

私たちが焼き物「虫明焼き」を造り始めた当時は一日の仕事を終えれば、ふろと夕食後のラジオに耳を傾けるくらいだったと思います。

浮かんでくるのは香宝師がよく昔の話をよばなしに聞かせてくれた。

香宝の師匠・森香洲が横浜の香洲の師匠のいる「あさま」へ宮川香山を頼り、いていた当時のなしである。

宮川香山は横浜で飛ぶ鳥でも落とすといわれるくらい焼き物にかけては「香山」という時代であった。



落雁細水指

香山・真葛が作陶している横浜のあさまの窯にある日三人づれのお客人が見えまして、その連中が香山に「これこれの壺に、こうした色の釉色を何とか出してほしいのですが…」との注文です。今まで長年香山について仕事をしてきている香洲は焼き物の姿（形）はできるだろうが、釉薬については今まで見たことがないので、香洲は今日のお客人の注文についてはたぶんお断りするだろうと陰から忍び聞きしていたところ、師匠の香山は平然と簡単そうに「お造りいたしましょう。」とお引き受けになりました。香洲は『香山がそのような色は引き受けられてもなかなか出し得まい。いずれそのうち釉薬についてテスト焼きもするだろう。そのとき原料や調合を見たい。』と香洲は何食わぬ顔でいつものように仕事をして終われば、わざと後かたづけ

など時間をかけ香山が釉薬にする材料を取り出しはしないかと、見たい一心で今日は今日と待っていたが、何一つ変わった様子は見せない。

そのうち次に窯を

焼く準備に取りかかって窯詰め作業の時、別の作業場から約五十点ほどテスト用の釉を掛けた小壺を持って見えて窯の中のいろいろな場所へまくばって窯詰めされましたので、香洲は今日まで全く気づかなかったので、吃驚し哑然となったそうです。その後、窯たきも終わり、窯出しをしたとき釉薬テストされていました小壺のなかに望んでいた色が濃淡になって幾つも出てきているではありませんか。

香山はこの釉でといって二、三コ取り上げて持ち眺めた。香洲は吃驚して香山の顔とその小壺をもう一度見直した。香山はこの配合で行くかなと淡瑠璃色を手にしていたのである。香山は釉薬については全く不思議に他の人のできない釉薬を数多く研究され、釉薬に関しては神様のような人である。と、香洲は「あさま」から帰ると虫明の知人や弟子にそのできごとを話し聞かせていたそうです。

「香山はいくら信用のおける弟子にでも釉薬については教えたかった。」と聞かされています。

当時は自分で努力し人の釉薬を盗み見して釉の研究をしたもので、書物・文献などそうしたものはありませんでした。

宮川香山はその後フランスで開かれた世界の大博覧会に日本から香山作・六枚折りの屏風を造り出展されました。

その作品が会場で非常な人気を呼び起こし、日本に宮川香山

という陶芸家が横浜に在るといふ世界的な人気を呼び起こし、海外からの観光客はそれ以後次第と多くなり、上陸した観光客は人力車に乗り片言交じりで「コザン、コザン、ミヤカワ」といって香山の焼物を土産にするのが第一の目的であったそうです。

香山は後に帝室技芸員とられて皇室のご用達と政府からのご注文の海外からの大公使館などへのお土産品のみを晩年は造っていたと書かれています。

今は文化と共に科学が想像もつかない早さで発達して昔は手廻しロクロかケリロクロで製形され、後は型ぬき造りであったのが現代はロクロは電動化され、石膏造りも流し型に至るまでに自動化され機械による生産ができて、焼き上げる窯も電化や重油ガスが取り入れられ松木をもって補足する。あるいは併用式に変わり労力を大きくカバーして製品を造るようになった。原料の陶土や釉薬絵具等に至るまでほとんどの素焼きがすぐ使用できるまでの「スイヒ」、水越した原料が販売されているので、似通った製品が多くなって味気ない気がせんでもありませんが、これも時代の波だろう。昔の登窯で焼かれた当時は、ほとんど火色と色、時には「ゼーゲル」を立て焼いたものだが、火色の感で焼いた。だから失敗も多くするが、その代わり変化して二度と焼けない窯変を味わうことも時にはあり、金銭的には別とし

て捨てがたい存在である。そうはいっても今日の日進月歩、陶芸でも同様に科学が想像もつかない躍進して機械化されつつある。

ロクロにより陶土から製品までほとんど人手を要せぬ自動化ができ、量産がされているところもあるが、私どもの虫明焼は昔ながらの立派な伝統をできるだけ守り通しながら、進歩を求めて行かなければなりません。

歴史のある窯ほど脱線ができない苦勞の多いこの道です。

養老院での奮戦記



岡崎芳枝

- ・ 大正十二年（一九三三）生まれ
- ・ 向山
- ・ 無職

今から三十八年前、緑も鮮やかな上寺山の上から、未来に夢拓くようにも見える吉井川の流れをはるか眼下に追ったものだった。西の空を茜色に染めて沈んでゆく夕日を、芥子山の峯の壮麗な美しさを、心はずませて眺めた遠い日の風景が臉をよぎ



ります。今はほとんど見ることもなくなった藁葺き屋根の家屋が、広々とした田園の中に落着いた佇まいを見せていた光景を、なつかしく思いだしています。岩肌のでこばこの山道、ましてや裸電球の街灯もまばらで乏しい光を、青白い月の光に求めて、身のひきしまる自

然の環境を、当然のことと受けとめていました。神社、仏閣の歴史の重さを物語る三重の塔の下に『上寺山養老院』が、誕生したのは昭和二十八年二月一日でした。ラジオからは「雪の降る街を」のメロディーがものかなしく流れていました。後に故三木行治岡山県知事により「上寺山楽々園」と名称が変わりました。その頃社会福祉事業の声も高く聞こえてまいりました。矢先、邑久町立の施設として収容の準備も着々と進められ産声を上げました。当時、県下でも珍しいケースの一つでありました。



三木知事と開院当時の職員

そうして開設当時は、郡内を優先に二十数名のおとしよりを迎えての出発でした。正直いって福祉の予備知識も薄水を踏むおもしろい、決して充分とはいえず、職員四名と使い走り専門一名で、早朝から夜おそくまで一日を夢中で駆けまわったものでした。現在のように管理栄養士などの配置もなかっただけに、朝夕と三度の食事には大変な苦勞がありました。一日の献立を

たてての買い出しで調理をするといった具合で、今と比べ注文すれば配達してくれるサービスなど考えられず、とても冒険なやり方だったと思われました。恵まれ過ぎている現在をふり返って感慨にふけるのです。おとしより達とは同

居家族としての生活でしたが、いちばん大変な事は入浴時のお世話でした。一人で浴場まで行けない歩行困難な人を背負って連れてゆきました。その状況を見て急に「足が痛くて歩けない」と訴える人もあり、背負って浴場まで連れてゆき入浴をすませるといった、汗と涙の笑いような出来事も数多くありました。が総て老いゆく身のさびしさと甘えによるものと、後日わかったものでした。また入所が寒い時だったので火鉢で暖をとるのでしたから、炭火の扱ひも気の許せないものでした。体調を悪くすれば病室へ移し、職員交替で共に寝たものでした。故中島医師の往診を受けて安心のあどけなさには、長い人生茨の道もあったであろう人には、何にも変えがたいやすらぎの姿でした。でもなかには施設というものの理解も乏しく、「騙されて来た。」とか言って一日中ブツブツ言っている人。少し痴呆の症状が出ている人。また全盲故にひがみの激しい人。それぞれの接し方にも眼の離せない日もありました。人生長い道を重い心の荷物をおろして憩いの場所として安らぐための納得には、相当の日時と愛情が必要でした。また無断で外出して胸の痛くなるような事もありました。お寺やお宮の近辺を探しまわり、果ては町役場へ応援を頼み、夕闇の中を探することに協力してもらったことも一度や二度でありませんでした。今のように車社会でなく、もっぱら足といえは自転車でした。雄川橋から川面

をさがして幾度か渡りました。その頃は、軽便鉄道が現在の西大寺両備バスセンターから後樂園まで運行されており、その西大寺駅の待合室のベンチに、しょんぼりと腰掛けているお年寄りを見た時は、お互い涙がとまらなかつたこともありました。

余程住み馴れた我が家恋しい一途なおもいようでした。どのようにすれば、楽しく安らかに落着いてもらえるかが、毎日の宿題でした。真夜中でもいつ呼び出されるか心安まることもありませんでした。そんな中、視察とか、見学だとか、慰問と来客も多く、机上での事務整理も夜にまわしてという頑張りでした。故三木行治岡山県知事も視察のため来院され、おとしよりには心優しくご慰問くださり、職員にも心温く労をねぎらってくださいました。「一部屋自分のために予約を」と冗談とも思えない程施設を気に入ってくださいました事が、昨日の出来事のように思い出されます。また地区担当の民生委員さんも、日常生活の状況を見たり、慰問にと大変な心配りには感激しております。すべてに「おもいやり」の心を持つことが、楽しくやさらかな人生を送るためにはいちばん大切な事であると思います。超高齢化の進むこれからの社会に対して、家庭における事情とか、また経済上の理由等により、心おきなく老後を暮せる施設が次々と創設されています。このような状況を目の当たりに見る時、若い人も老いゆく人も、誰もが避けては通れない高齢化

の世代に、文化と歴史の豊かな暮しづくりに向かって「おもいやり」の心をもって、行政のあり方や、また地域としての高齢化社会への取り組み方など、現実に今一度しっかり受けとめてゆきたいと思えます。

あとがき

邑久町制施行四十周年の記念事業の一つとして「邑久町ふるさと体験集」の発刊が計画され、この程、執筆者のかたがたのお骨折により茲にその上梓をみる事ができましたことは誠に喜ばしい次第であります。

ながい歴史と伝統に培われてきたわたしたちの郷土が邑久町としての町制のもとに一体となって進展を始めてから早くも四十年、古く優れた郷土の歴史のうえに立ち、そしてそれぞれの立場において、地域発展のために努力されてよく今日の邑久町を築き上げられた各界、各層の町民の方がたのお姿を記録に留めて今後に残すことは誠に有意義なことで喜びに堪えません。

四十年と云えば、人生ではまさに「不惑」と呼ぶ齢、邑久町制四十周年のこのときに当って、この体験集が今後の邑久町発展のため、大きな指針となり役立つことを祈念する次第であります。

編集委員（前邑久町長） 木 下 友 次

「邑久町ふるさと体験集」編集委員

氏名	住所	電話番号	備考
木下友次	福元690-43	2-0108	前邑久町長
上野進	北島97	2-0066	元教育長
大河原京太	山手1622	2-0489	前邑久町農協組合長
横山春松	虫明4350	5-0111	邑久町教育委員長
川野多喜夫	尻海4749	4-0250	邑久町郷土史クラブ会長
朝倉都穂美	尾張645	2-0178	主婦
業合隆雄	北島1116	086-943-1029	前邑久町立中央公民館長
馬場昌一	町教育委員会	2-1215	邑久町教育委員会 社会教育主事

- ◆ 事務局（担当課）
企画課



邑久町ふるさと体験集(非売品)

平成五年三月十五日 印刷・発行

発行所 岡山県邑久郡邑久町尾張三〇〇一

邑久町企画課

電話(〇八六九二)二一一二二一代

印刷所 石井印刷有限公司

岡山縣 邑久農業学校

昭和二十年四月一日、邑久村外六ヶ村学校組合立として第一邑久國民学校内に設く。入学資格は國民学校初等科修了の男子、定員六百名、修業年限四箇年、学科は農業科なり。

邑久農業学校設置認可申請

本郡内ニハ己ニ二十年來二校ノ高等女学校ノ設立ヲ見ルモ、男子中等学校無ク此ノ点頗ル男女教育ノ均衡ヲ失スルモノトシテ、郡ヲ挙ゲテ齊シク遺憾トスル所ナリ。

然ルニ教育ノ普及向上ト時代ノ趨勢ニ鑑ミ、一般男子ノ中等学校ニ進学ヲ希望スルモノ日ヲ追ウテ激増シ、特ニ純農村タル邑久郡地方一帯ハ、現下食糧増産ノ上ニ果ス可キ使命ノ彌々重大ナルヲ自覺スルニ伴ヒ、農学校ニ学ビテ健全有爲ナル皇國農民ヲラントスル熱望青少年ハ勿論、父兄ノ間ニ澎湃トシテ起ルモノアリ。然ルニ之等ノ子弟ヲシテ今日遠隔ノ農学校ニ就学セシムルハ、勞務關係並ニ經濟上將又訓育上頗ル考慮ヲ要スルモノアリ。而シテ仮令之等ヲ克服シテ敢テ進学セシメントスルモ、現存ノ農学校ノミニテハ進学志望者中ノ極メテ一少部分ヲノミ辛ジテ收容シ得ルノ程度ニシテ 到底時代ノ要請地方ノ熱願ニ添フコト能ハズ、是ニ於テ邑久郡ノ中央邑久村ノ地ニ農学校ヲ設立中産階級以下ノ子弟ト雖モ、希望者ニハ進ンデ地方ノ実情ニ即シタル農業教育ヲ受ケシメ、家庭ト学校トノ聯携ヲ密ニシテ行学一体ノ実業訓練ヲ施シ健全有爲ナル土ノ皇民ヲ鍊成シテ質実剛健ナル郷土文化ノ開拓ニ貢獻スル爲、今般邑久村外六ヶ村ヲ以テ学校組合ヲ作ラントス。

〔邑久農学校と終戦前後の思い出〕の文末三八ページに追加分

